

悪堕研究機構 悪堕ち合同2

悪堕ち合同誌

# 悪堕ち ファンブック2A

— 悪堕研究機構 —



# 目次

葛葉ぽて	p.4-7
家畜	p.8
人船	p.9-15
フルタラ	p.16-17
クリフアハート	p.18-24
投職	p.25-29
日高久志	p.30-35
つー	p.36-41
春咲ちぼ太/緋風	p.42-43
mio	p.44-48
LeeBigTree	p.49-51
神定選	p.52-55
桜勝優也	p.56-58
ぐっちー	p.59
なまはぐれ	p.60-61
波多野奈津目	p.62-67
かじた	p.68-69
このさま	p.70-72
花草セレ	p.73-76
糸野キオ	p.77-81
きりら/緋風	p.82-83
アオノレナ/虚狼	p.84-89

表紙・裏表紙イラスト：春咲ちぼ太

編集加工・タイトルロゴ：緋風

せーくんはい♡

ああ、君か  
ネックレスをかけてくれるのは  
嬉しいがどうしたんだ？

先輩が「聖抜」で勇者になったので  
そのプレゼントですよっ♡

ええ、いいんですよ♡  
先輩もきつと気に入って  
もらえるはずなので！

人生が  
変わるほどに

そうか、私は宝石とかは  
詳しくないんだが、こんな  
いいものを頂いていいのか？

な、何だっ！？

らふらふ...

うあああああっ!!

これは「魔族の瞳」……  
寶石の中に魔族の魂が封印されていて  
着用者を魔族に変えるアイテムです♡

オオオオオ

たとえ勇者の先輩でも、この呪いは  
絶対に逃れられません♡

魔族になった先輩を私が討伐すれば……  
晴れて私が勇者に選ばれる……

勇者の称号は貴族の出である  
私こそ輝くもの……農民の出の  
先輩には過ぎた称号です♡

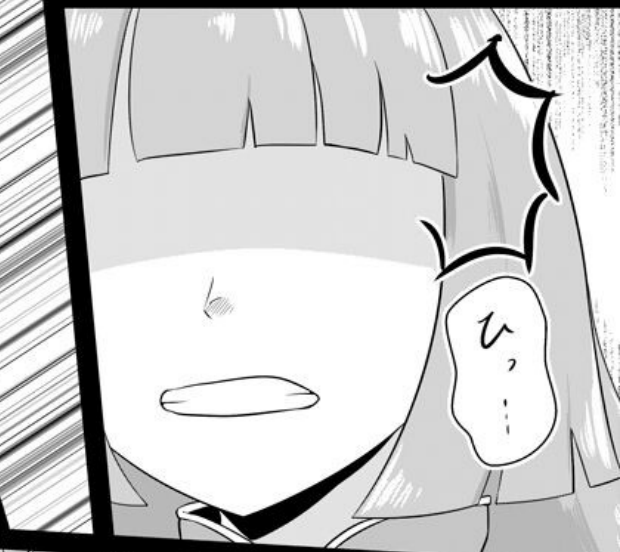
私のなかに何かが入ってる……

さあ！私の輝かしい未来の為に  
ここで倒れてくださいっ先輩っ♡

私は……



ぶあっ!!?



キェム

そうそう。君にももらったあのネックレス…あれにはどうやら古の魔王の魂が封印されていたらしい…聖抜で勇者になれたと思ったら、すぐに魔王になってしまった…

君には「お礼」に、私の最初の贄にしてあげよう




まったく…ひどい後輩もいたもんだ…私の人生がめちゃくちゃではないか…

貴族というのは傲慢で我儘な人間が多いな…



すごく力がみなぎる。  
勇者と魔王の力が合わさるとこころも変わるのか  
実にいい気分だ



貴族は気に入らんが君には感謝している

この力で手始めに貴族たちを全滅させよう。  
そして私が世界を治めようか！

実に楽しみだ

あたし、綿乃木りこら！  
大好きなソーイングを魔法にして  
愛と正義のラブリーキルト  
やってまーす♪

この子はパートナーのクマママ！  
道で倒れていたところをキレイにして  
あたしに変身パクトをくれたのも  
この子なんだよ！

……え？何？  
……うん、そう、そうだね……  
……うん、うん……  
わかるよ……



醜いこの世界を  
キレイなドレスで  
覆ってあげなきゃね……

あはははははっ  
何で逃げるの？  
このあたし、ギルテイクローズが  
かっこ悪いその体を裁ち切って  
素敵に仕立て直してあげるのに！



## 魔王の封印

人船

かつて、魔王により滅びた国があった。

『魔王』などと呼ばれてはいるが、それは国土を徘徊し、目に映るものを破壊する理性無き怪物だ。並みの武器では傷一つ付けられない防御力も備えており、運悪く遭遇しようものなら助かる道はない。

そして、その怪物に取り込まれた者は——死ぬこともなく、ただエネルギーを供給するだけの存在になり果てていた。

魔王はまるで旅をするかのように、決められたルートをなぞり続ける習性のようなものを持つている。故に、周辺の国々は魔王を殺そうとはせず、不干渉を決め込んでいた。

それから数十年以上が経過し、人の国だった土地が『魔王領』などと呼ばれるようになった頃、ついに魔王を倒さんと立ち上がった者達があった。

1

「ハアッ！」

巨大な卵状の身体と無数の触手で構成された魔王が、勇者に向けて触手を放った。

勇者は迫りくる触手を目にも止まらぬ速度で斬り伏せ、聖術の支援を受けて大きく跳躍。

魔王が隙を見せているその瞬間に聖剣を振り下ろし、その身体を一刀両断した。

「……ガ……ガギ……」

鋼鉄をも切り裂く伝説の聖剣だ。聖女の支援も上乗せしたその攻撃には、流石の魔王だろうと耐えられない。

触手の動きが止まり、身体を支えていた触手からも力が抜けて魔王が地面に音を立てて落ちる。

「これで、倒せたか……?」

真つ二つに切り裂かれた黒い巨体。普通の生物どころか、並みの魔物でもこれで生きてはいられない。

ただ、勇者——ヴァンの使命は、後ろにいる聖女——シーラと共に魔王を聖剣に『封印』することである。というより、「封印しろ」と言われていたので倒してしまえるとは思っていなかった。

「まあ、封印よりは倒した方が……いいよな？」

「そう……ですわね」

シーラの方もあっさり動かなくなった魔王に困惑している様子。

魔王は既に光の粒子となって形が崩れ始めており、今まで何度も倒してきた魔物と同じ、消滅する寸前の様相だ。

だが。

「ガ……ギギッ！」

「きゃあっ!」

二人の気が緩んだ瞬間、シーラの身体が触手に絡めとられた。

「シーラッ! しまった!」

「ギ……ギガ……」

魔王は呻き声を上げながらシーラを持ち上げると、身体の一部をまるで口のように開いてシーラを捕食しようとした。

「させるかっ!」

ヴァンがすぐに動き、触手を切り裂いて素早くシーラを救い出す。

そして空中で放り出されたシーラを見事にキャッチ。

「大丈夫か？」

「は……はい、ありがとうございます」

抱きかかえられたシーラはほんのりと顔を赤らめたが、すぐに状況を思い出して冷静になる。

斬られたはずの魔王は二つの身体をくっつけなおし、少しずつ再生を始めていた。

「こういうことか……不死身なんだな、魔王は」

「封印しましょう。ヴァン、聖剣を魔王に向けてください」

「分かった」

ヴァンが領き、再生中でまだ動けない魔王に剣先を向ける。すると、シーラの身体が光り輝き、聖剣も共鳴するかのようになり出す。

「行きます……! 『邪なる力に魅入られし哀れな魂よ……聖なる剣の中で眠るがいい!』」

聖剣の輝きが収束し、光線が魔王に突き刺さる。当たった所から魔王の身体は崩壊していき、粒子となって聖剣に吸い込まれていく。

「グオオオオ……オオ……」

光が収まる。

魔王は既に跡形もなかった。

「……これで、終わりか……」

「はい、お疲れさまでした。聖剣は決して鞘から抜かないでくださいね」

「ああ」

魔王を閉じ込めた聖剣は真っ黒に染まっていた。それを丁寧に鞘に収め、二人はその場を後にした。

## 2

勇者ヴァンと聖女シーラは幼馴染である。

聖女は魔王を封じる力を持って生まれた者を指す。魔王の封印は聖女にしかできず、何人たりとも代わりになることはできない。

王国の民は皆、七歳の時に教会で『聖力』というものを測る儀式を行う。

そこで聖女の才能があれば教会に強制的に引き取られ、外界と遮断された中で聖女としての教育を受けることになっている。

聖女の力は魔王の封印に必須だが、逆に魔の者に力を与えてしまう性質も併せ持つ。故に聖女は力について学ぶことが義務とされ、教会入り拒否できない。ただ、実際に魔物に利用されることは滅多になく、どちらかと言えば教会の都合のいいように教育する目的の方が強い。

一方、勇者は勇氣と強さを国に認められ、魔王封印の使命を受ける者の称号。

ヴァンはシーラが聖女として教会入りした

時、シーラを守るために勇者になることを決意した。

身体を鍛え、技を磨き、力を付け……努力の末に勇者選定試験を突破し、武術大会で優勝を果たして国に認められたのだった。

勇者になれるのは国内でたった一人。その難度故に聖女と関係の深い者が勇者に選ばれるのは歴代でも例が無く、魔王の脅威そっちのけで国民が大いに盛り上がった。

そうして念願の勇者となったヴァンは堂々と教会までシーラを迎えに行き、手を取り合っ

て魔王封印の旅に向かった。

この旅では事前に決められたルートで国内の全ての町を巡り、各地で暴れる魔物を討伐しながら二人の連携を学びつつ様々な経験を得る。

最終目的地は魔王の潜む魔王城。ただし外見は城というより、蓮の実のように無数の穴が開いているだけの巨大な岩山だが。

そんな旅を終え、二人は見事に魔王を封印し、王都に帰還したのだった。

数日かけて王都に戻った二人を最初に出迎えたのは教会の神官や聖騎士達だった。

その中心には教会で最も偉い、大神官のゴルドもいる。

「おかえりなさいませ、勇者殿、そしてシーラ様」

「アンタは……久しぶりだな」

ヴァンはゴルドの顔を見て苦い顔をした。昔、

散々嫌な目に遭わされてきた相手だ。

当のゴルドはそれを一切気にせず、ただ淡々と話を続ける。

「まずは、聖剣の封印を確認いたしましょうか」

魔王の封印がきちんと行われているかの確認。事前にシーラから聞いていたので、ヴァンは素直に頷いて聖剣を鞘ごと渡した。それを受け取ったゴルドは、少しだけ鞘から抜き、刃の部分が黒く染まっていることを確認する。

「ふむ、間違いなく封印されておりますな。今後の勇者殿の使命は、この聖剣を肌身離さず持つて守り抜くことです。決して手放さないようにお願いいたしますぞ」

「わかった。じゃあ、そろそろ行っていいか？」

ヴァンが歩き出すとする。

国王も王都の民も、勇者の帰還を待っている。待たせては悪いし、ゴルドとも長く話したくないのでヴァンは一刻も早く話を終わらせたかった。

それに、聖女として勉強漬けのシーラは民からの知名度が低い。ヴァンはさっさとシーラをみんなに見せびらかしたいのだ。

だが、ゴルドはそんなことも構いなしに話を続けた。

「いえ、お待ちを。シーラ様は我々と共に来ていただきます」

「あ……」

二人の聖騎士がシーラの背後に回り、肩を掴む。

「い、いやいや。待ってくれ。表彰式がまだだ

ろ？」

ヴァンが慌ててシーラを奪い返そうとするも、聖騎士達はさっさとシーラをゴールド側へ連れて行ってしまおう。

「いえ、表彰は勇者様だけで行います。シーラ様は忙しい方なので」

「忙しい？」

そんな話は聞いていない。確かに、聖女として選ばれてから旅をするまでは会うことを禁止されていたが、それは聖女としての修行や勉強の為。こうして魔王を倒した今、シーラは完全に自由の身であるはず。そうヴァンは思った。そんなはずはないだろ、と反論しようとしたが、シーラがヴァンを制止した。

「ヴァン、ごめんなさい。そういうわけですから、式はヴァンだけをお願いします」

他ならぬシーラからの言葉。ヴァンは出かけた反論の言葉を飲み込んだ。

「……分かった。シーラがそう言うなら」

納得するふりはしたが、一抹の不安と神官への猜疑心は拭えなかった。

そして、凱旋パレードで人々に祝福されても、表彰され王から報酬を授与されても、ヴァンの心は暗いままだった。

王から王女との婚約話を持ち出されても上空の空。

ヴァンの頭はシーラの事で一杯だ。

——忙しい、などという雑な理由でなぜシーラがこの場に立てないのか。

思えば「彼女を守る」といつも前に立って

いたが、怪我や毒の治療に聖術でのサポート、果ては細かいお金の計算や食事の管理までシーラに頼りっぱなしだった。

魔王だって一人では絶対に倒せなかっただろう。身長は何十倍もの高さを飛び、巨木の幹のような魔王の本体を一撃で切り裂いたのも全て聖術の支援の力だ。

この場に立つべきはシーラの方だ。

だが、シーラは、その素顔すらほとんどの国民に知られていない。

だからこそ、一緒にこの場に立ちたかったのだ。

……そんな思いとは裏腹に、民は英雄の凱旋に歓声を上げ続けていた。

それから、ヴァンはシーラと一度も会うことはできず、教会に行っても門前払いされるばかりだった。会えないだけでなく、シーラが教会から出ている様子もない。

シーラの現在地は把握できる。旅をしている時にはぐれたりしないよう、お互いの位置を察知できる聖術を使ってもらったからだ。互いに強い信頼を持っていないと維持できないものらしく、今でも効果が続いているのは信頼が続いている証拠にもなる。

それならば、会えないのはシーラが拒否しているのではなく教会の都合だろう。大神官のゴールドは昔から信用できない男だった。なんなら教会に侵入して会いに行った方がいいかも

れない。

そんなことを考えつつも、今は勇者であり救国の英雄という立場。下手なことをして牢屋に入れられたらかなりマズい。

そんなこんなで手が出せず、モヤモヤした日々を送っていたのだが——ある日の夜にシーラの動きを察知した。

教会の裏口から森の方に移動している。

だが、森の中は立ち入り禁止区域のはずだ。

……嫌な予感がする。

そう思ったヴァンはすぐに支度を整え、シーラを追って森に向かった。

3

森の中に入るのは初めてだった。

暗く不気味で、方向感覚が狂わされる。真っ直ぐ進んでいると思ったらいつの間にか大きく曲がっていることもあった。シーラの居所を正確に把握できていなければとづくに迷っていただろう。

また、途中で神官や聖騎士を見かけることも幾度かあり、隠れて会話を盗み聞きしていると「聖女」という単語がちらほら聞こえてきた。間違いなく、この先にシーラがいる。

しばらく進むと、森が開けて古びた教会が見えてきた。

今使われているものと比べると小さいが、並みの家屋と比べればかなり大きい。外壁は大部

分が植物に侵食されており、中で暴れたら簡単に崩れてしまいそうだ。

そして正面の扉には、この場に似つかわしくない綺麗な鎧を着た聖騎士が立っている。他に見張りは見当たらないので、崩れた壁の穴から入ることができそうだ。

——教会の中の礼拝堂は、穴の開いた天井とステンドグラスから差し込む月の光が幻想的な空間を作り出していた。

だが、何年も放置された様子の内装は人の住める環境ではない。並べられた長椅子はあちこち腐っており、至る所が蜘蛛の巣と埃まみれ。崩れた壁からは冷たい風が入り込み、歩くたびに床から嫌な音が聞こえる。

そんな中、中央には異質なほど綺麗な祭壇があった。

一個だけ真新しい、真っ白な石の祭壇。それが淡く光り、一際目立っている。

しかし、ヴァンがそこに目を向けたのは光っているからではない。

その上で、シーラが静かに眠っていたからだ。

「シーラッ！」

ヴァンが祭壇に駆け寄りシーラの安否を確認する。シーラの両腕には手枷がはめられ、鎖で祭壇と繋がられていた。枷と鎖も祭壇と同じく光っていて、まるでシーラから何かを吸い取っているように見える。

「クソ……！」

枷には鍵がかけられ外せない。鎖もビクとも

しない。

ヴァンは少しだけ悩み、黒い聖剣を鞘から抜いた。

「今助ける！」

聖剣で鎖を斬る。

鋼鉄をも切り裂く伝説の剣——と呼ばれるだけあり、あっさりと両腕が解放された。

しかし、黒いモヤが少し立ち込めたので、ヴァンは慌てて剣を鞘に戻した。

「シーラ、大丈夫か？」

「……ヴァン……？」

シーラが目覚めます。そして、周囲の様子を目で確認すると、困惑の表情を浮かべた。

「ここは……？」

「森にある廃墟だ。そこで変な祭壇に繋がられていたんだが……何があったんだ？」

「……分かりません。部屋で眠っていたはずですが……」

訳が分からない、という様子。だが、すぐに安堵の表情を浮かべた。

「助けに来てくれたんですね。ヴァン」

「当たり前だ」

そう言っ、まだ動けそうにない状態のシーラを抱きかかえる。

シーラは少し照れながらもヴァンに身体を預けた。

「すぐに脱出するぞ」

「——それは少々困りますな」

礼拝堂の中に聞き覚えのある声が響いた。

「ゴルド……！！」

「シーラ様には役目があるのです。勝手に連れていかないで頂きたい」

ゴルドが薄笑いを浮かべながら、後ろから多くの聖騎士や神官を連れて入り口に立っていた。

「随分と用意がいいな」

「貴方の動向は全て監視しておりますので……今すぐシーラ様を置いて出ていけば、見逃して差し上げますが？」

ヴァンは冷や汗をかいた。数人の聖騎士程度ならシーラを抱えていても倒す自信があったが、やってきた人数は十数人どころではない。余裕ぶつてはいるが、手持ちの武器は「使ってはいけない」と言われている聖剣だけだ。

「ヴァン」

シーラがヴァンに声を掛けた。

「私を抱えていく必要はありません。下ろしても平気です」

「……助かる」

意地を張ったりかっこつけたりしている場合じゃない。最優先はシーラの安全だ。ヴァンがシーラを優しく下すと、シーラはフラつきながらもなんとか一人で立った。

「さて……どう切り抜けるか」

ヴァンに降伏の意思が無いとみると、神官が聖術で聖騎士の力を強化し、聖騎士は一斉に襲い掛かってくる。

「支援します！」

シーラも対抗して聖術をヴァンにかけ、大き

くその力を強化する。すると、ゾクリとした嫌な感覚が周囲に伝わった。

「殺せ」

ゴールドが聖騎士に命じる。

四人の聖騎士が一斉にヴァンに斬りかかる。

ヴァンは剣を抜かず、攻撃をスリりと避けて、隙を見せた聖騎士の頭を素手で殴った。

「ぐっ！」

殴られた聖騎士はそのまま気絶し、朽ちた椅子に頭から突っ込んだ。ヴァンは続けざまに隣の聖騎士を蹴る。蹴られた聖騎士の鎧がへこみ、目を回しながら壁まで吹っ飛んだ。

「相変わらずシーラの支援はとんでもないな」

人間相手ではあまり使わない力だ。改めてその威力を目の当たりにし、ヴァンは少し笑った。逆に、相手をする聖騎士の方が余裕を失っている。

「この野郎！」

「死ね！」

後ろから更に三人増え、五人がヴァンを囲って襲う。

しかし聖騎士の攻撃は一向に当たらず、ヴァンの体術のみで一方的に叩きのめされていく。「何をしている。聖女を狙え。殺しても構わん」「はっ！」

ゴールドの指示を受け、聖騎士の半分がシーラを狙う。残りの半分はヴァンの足止めだ。

「シーラを殺す？ 何考えてんだ！」

予想外の行動にヴァンは血相を変えた。シーラは聖術に長けており支援はかなり強力だが、

聖騎士と渡り合える戦闘力などは持ち合わせていない。

助けにいかなくてはならない、が、素手では聖騎士を一人一人倒すのが精一杯。武器を奪おうかとも考えたが、時間的に余裕がない。

「シーラ……！」

ヴァンはもう一度聖剣を抜いた。迷った時はまず何よりもシーラを優先する方針だ。

敵の攻撃を避ける時間も惜しいので致命傷にならないようにだけ最低限の回避をし、カウンターで一瞬にして鎧ごと敵を斬り伏せた。

「シーラッ！」

シーラに襲い掛かっている聖騎士は六人。その内一人の男が既に剣を振りかぶっていた。ヴァンは人間とは思えぬ速度でシーラと男の間に滑り込み、男の腕を横薙ぎに払った。両腕を失って悲鳴を上げる男は無視し、続けて襲ってきた三人はまとめて首を斬った。

「ひっ」

シーラが悲鳴を上げる。

少し遅れていた残りの二人はヴァンの剣戟に恐れ慄き、反転して大慌てで逃げ出そうとした。ヴァンがそのうち一人の背中に剣を突き刺すと、糸が切れた人形のように倒れて動かなくなった。

「た、助けてくれーっ！」

最後の聖騎士は悲鳴を上げながら神官達に助けを求め、事の顛末を見ていた神官も真っ青になって我先にと逃げ出していった。

「ふう……ククッ」

逃げ出す獲物を見てヴァンは笑った。そして、ちらりと後ろを振り返る。

シーラとヴァンの目が合い、シーラの心臓がドクンと跳ねた。ヴァンの目は殺意と狂気に染まっており、まるで深淵を覗いているかのような感覚に陥った。

「ヴァ……」

シーラがなんとか声を掛けようとするも、ヴァンはすぐに逃げた神官達を追っていつてしまった。

ヴァンの様子がおかしい。彼をそのままにはできない。そう考え、シーラは恐怖心を必死に抑えながらヴァンを追いかけていく。

#### 4

教会は悲惨な状況になっていた。

先程までいた廃墟の方がマシと思える程に酷く破壊され、神官や聖騎士、果ては巻き込まれた民の遺体まであちこちに転がっている。

先程のヴァンの様子は普通ではなかった。魔王が封印されたばかりの聖剣を振るってしまったせいで、魔王の一部が外に漏れてしまったのかもしれない。そして、聖女の力や聖術が魔王を刺激し、人の生き血が活性化を促してしまっただけでは。

そうして溢れ出た魔王の力に、ヴァンは乗っ取られてしまった。シーラはそう結論付けた。そんな状態のヴァンを町中で野放しにしてしまえば、かなりの被害が出てしまう。一刻も

早くヴァンを止めなければならぬ。

ヴァンの居場所は分かる。互いの信頼が続く限り互いの位置を捕捉できる聖術『心の灯台』がまだ有効であるから。

それはつまり、ヴァンはまだ私の事を想ってくれているということであり、そして私自身もヴァンへの信頼を捨てずにいられているということですね、とシーラは呟いた。

城下町までやってきたシーラは、すぐにヴァンを見つけた。

「ヴァン！」

遠くから呼びかけるシーラ。だが、振り向いたのは、漆黒の肌に覆われた巨体の怪物だった。

「うそ……ですよね」

一瞬戸惑ったシーラだったが、その怪物が聖剣を手にしたのを見て察した。

ヴァンが完全に魔王になった、と。

「グオオオオオオッ！」

「やめてください、ヴァン！ 私が分からないのですか！」

ヴァンはシーラに向かって走り出す。もはや、シーラすら敵に見えているのだろうか。

「……ヴァン……こうなったら、私が、貴方を……」

シーラが近くに落ちていた剣を拾う。恐らくは町にいた兵士のものだろう。それを聖術で強化し、ヴァンに向けて構える。

「いえ……絶対に貴方を助けません、ヴァン」

シーラに剣術のセンスは無い。

故に、町の兵士や騎士が束になってかかっても勝てない魔王ヴァンに、彼女が勝てる道理もない。

しかし戦いの結果、ヴァンの方が地面に倒れ、動かなくなった。

「はあ……！ はあ……！」

息を荒げながら、聖術でヴァンの動きを完全に止めるシーラ。

シーラは才能だけで聖女に選ばれた。

それにヴァンは追いつくため、努力で勇者の立場を目指した。

だからこそ、シーラは自分もヴァンの隣に胸を張って立っていたいと、聖術の修業には全力で取り組んでいた。

それは結果的にヴァンの大きな力になり、今はヴァンを止める力にもなったということだ。

シーラは息を整え、ヴァンが持っていた聖剣を回収しようと近寄った。しかし、ヴァンの手元に聖剣が無い。

どこに落ちたのか、と周囲を見渡していると、後ろから声が聞こえてきた。

「いやはや、流石シーラ様。まさか魔王を単独で撃破するとは」

気が付くと、聖剣を手にしたゴールドが笑いながら立っていた。瞬間移動を可能とする聖術を使ったのだろうか。シーラはそのニヤニヤとした笑みに腹が立った。

「……ゴールド様。今までどこに？ それと、聖剣を返してください」

シーラは思い返す。この男は廃教会で私を殺せと命じてから、いつの間にか消えていた。

ゴールドは笑みを崩さず、聖剣も渡す様子もない。

「まずは魔王を封印しましょうか」

聖剣をヴァンに向けるゴールド。シーラはそれに真っ向から反対する。

「ヴァンまで封印する必要はありません。どうにかして、魔王の力だけを封じれば……」

シーラの提案をゴールドは笑い飛ばす。

「ハハハ！ 魔王になった者は元に戻せませんよ。残念ですがね」

「試さなければ分からないでしょう！」

なりふり構わず聖剣を奪い返そうとするシーラ。

そんなシーラを、ゴールドは片手で突き飛ばした。

「いたっ」

「何度も言わせるな、無駄だ。それに、どちらにせよ貴様にはもう何もできん」

ゴールドが急に敬語を捨て、無表情になる。

そして部下に命令を出す。

「シーラを抑えておけ。私を邪魔せぬようにな」

「はっ」

シーラの背後から黒い男が現れ、彼女の身柄を拘束する。

「い、いつの間に……！」

「そこで見ておれ。私が新たな英雄となる瞬間

を！」

ゴルドの身体が光る。それはまるで、聖女の力を使う時のように。

「聖女の力……なぜ貴方がそれを」

「ハハハハ！」

ゴルドが勝ち誇って笑い、意気揚々と喋り出した。

「シーラ。旧教会で貴様を拘束していたのは、聖女の力を奪う神具だ。聖女の力を他者に移し、新たな聖女を人為的に用意できる、封印されていた祭壇。その力で今、聖女の力を手に入れたのは……この私ということだ！」

それを聞き、シーラの中で情報が組み合わさっていく。

今日、いつの間にか廃墟の中で謎の祭壇に拘束されていた理由がそれか。

思い返せば、ヴァンが私を助けに来た時も即座に兵士がやってきた。

私を殺せと命じたのは、ヴァンを追い詰めて聖剣を使わせるためだったのかもしれない。

そうして意図的にヴァンに魔王を憑りつかせ、復活させた。

すると、この男は……。

「貴方は、英雄の称号が欲しくてこのようなことをしたのですか……？」

「そうだ。王都を半壊させた魔王……それも、元勇者を封印したとなれば、私の名は永久に語り継がれる伝説となる。素晴らしいだろう？」

「最低……！ そんなことのために、こんな被害を出して！ ヴァンまでこんな目に……！」

怒りに震えるシーラだが、捕まったままではなすすべもなく見ていることしかできない。

「さて……封印の準備は整った。——邪なる力に魅入られし哀れな魂よ……聖なる剣の中で眠るがいい！」

しかし、聖剣は光らない。ゴルドは慌てた。

「……なぜだ？ 詠唱は正しいはず……！ 邪なる力に魅入られし哀れな魂よ、聖なる剣の中で眠るがいい！」

聖剣は全く反応しない。光っているのはゴルドだけだった。

「聖剣が壊れたのか？ それとも詠唱が……おい、シーラ！ 詠唱は間違っていないだろう！」

シーラは無視した。それにゴルドは苛立ち、シーラの顔を殴りつけた。

「っ……！ ふふっ……どうやら、奪った力では封印はできないようですね。あの神具が使われていなかったのは、失敗作だったからなのでは？」

完全に御したかと思っていた少女に嘲笑され、ゴルドは顔を真っ赤にして拳を再度振り上げた。

「黙れ……！ このこむスツ」

殴りつけようとしたその瞬間、その身体が吹っ飛んだ。

シーラが顔を上げると、目の前に、完全に回復したヴァンが立っていた。

「……ヴァン。そうでしたね。魔王は不死身……」

……

シーラを拘束していた黒い男が不利を悟って全力で逃げた。

この場で生きて立っているのは、もはやシーラとヴァンだけだった。

「ヴァン、どうやら私にはもう聖女の力は残されていません。これでは貴方を元に戻すことはできません。ですから……」

5

こうして、魔王ヴァンシーラと呼ばれる魔王は誕生した。

その後は先に話した通り、自らの手で滅ぼした国の土地の中で、旅をするかのように決められたルートを徘徊し続けている。

聖女の持つ聖力が魔王に力を与え、魔王が聖女を半永久的に生かして守り続けている。

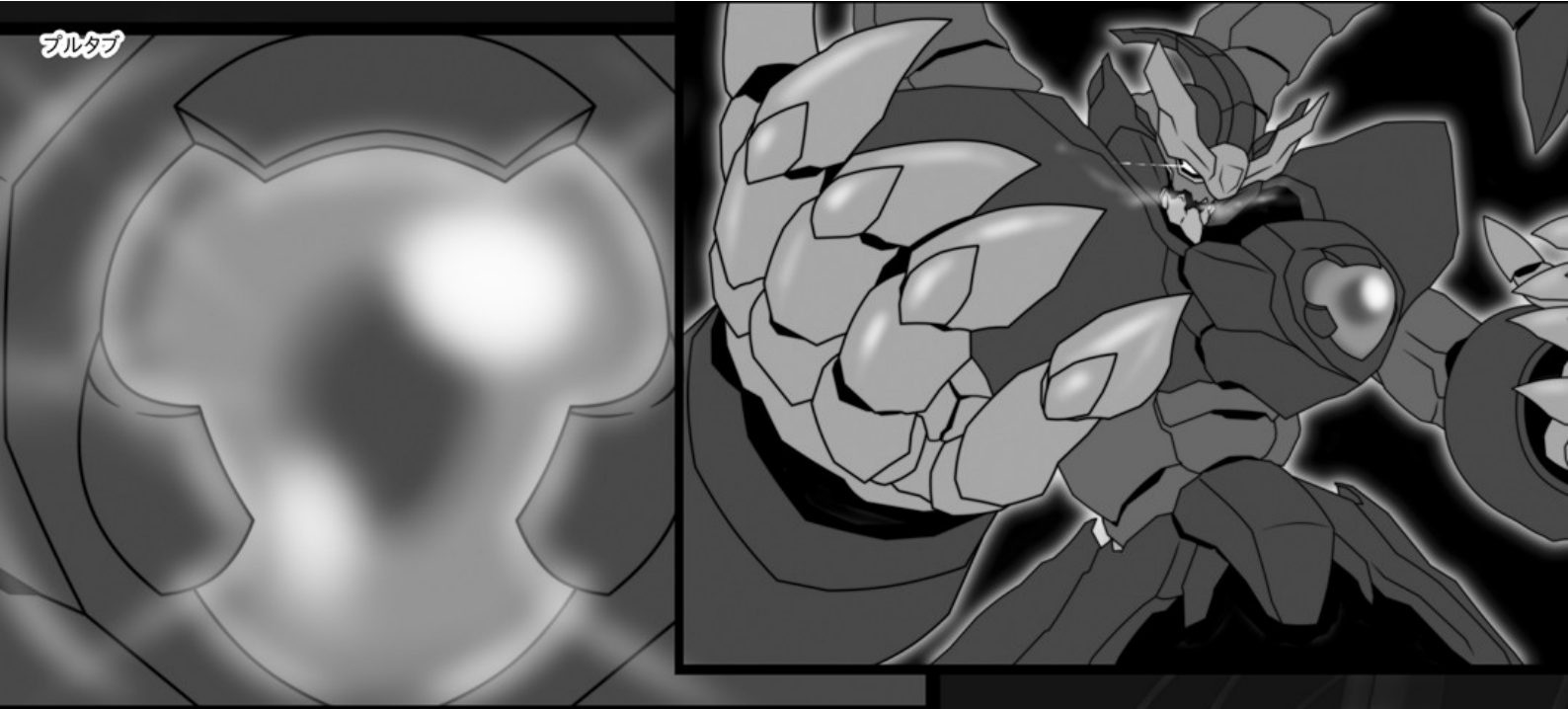
聖女の命は魔王と混ざり、魔王が生きている限り聖女も死ぬことはない。

このエネルギー循環が非常に厄介で、魔王ヴァンシーラはエネルギー枯渇など無視して永久に暴れ続けることができるという。

かつて無策で魔王に挑んだ連中は、聖女の部分を弱点と考えて狙ったらしいが、魔王の逆鱗に触れて見るも無残な姿にされたという。

あれから数十年経った今、僕たちは魔王をどう倒すかを相談しながら、魔王ヴァンシーラを追っているのだった。





## 喪失楽園

クリファハート

——神様は、もうすぐ死んでしまうのだという。

## ① 朽ち果てる世界

「——ユノ。起きて、ユノ」

梯子を登る音と、お姉ちゃんの声。ゆっくりと瞼を開くが、もともと私の眼は光を知らなかった。眼球の保護のために巻かれた包帯が、衣擦れの音を立てる。

「難民キャンプから食べ物に分けてもらったの。ご飯にしましょうか？」

「——うん、いつもありがとう。お姉ちゃん」  
私たちは両親の難民ビザを使って、ニホンにやってきた。もう自分の国も、父も、母も奴らに滅ぼされてしまったからだ。それからトウキョウに近い廃村の難民キャンプに身を寄せ、納屋の屋根裏で細々と暮らしている。せめて私の眼が、景色を映せばお姉ちゃんもつと楽ができたのに。感謝しながらパンを口に含んだ、その瞬間。爆音と振動が私たちの世界を震わせた。

「ユナ、ユノ逃げろ！ 黄昏の軍勢だ！」

外からそんな声届いた。けれど私とお姉ちゃんは、身を寄せ合って震えるだけ。私さえ捨て

ればお姉ちゃんは逃げられるのに、決してそうしようとはしなかった。

黄昏の軍勢。魔神アンサーテンに率いられた、人類の敵対勢力。元は神様と世界創世を争った闇の神であつたらしい。弱り死を待つだけの神様にアンサーテンに対抗するだけの力はなく、黄昏の軍勢は世界を蹂躪していった。いくつもの国を消し大量の難民を産み、ついに極東の島国にもその魔の手を及ぼして、もう世界で彼らに対抗できているのは大国と呼ばれる国だけだ。けれど。

「大丈夫よユノ。きっと、救世聖少女さまが来てくださるから——」

その祈りが通じたのか。外から聞こえる声は、いつのまにか歓声に変わっていた。

「救世聖少女さままだ！」「ああ、彼女は——セイヴァーシユガーさままだ！」

この国には、天使様から力を授かったメシアがいてくれるのだから。

## ② 救世聖少女セイヴァーシユガー

「——浄化結晶——」

軍勢を率いていた大悪魔を、四つの水晶が取り囲む。

「クリスタル・エクソサイズ！」

そのまま水晶は円弧を描いて収束し、大悪魔を閉じ込め——強い浄化の光を放った。

「——く、あ——」

息が上がる。私は荒い呼吸を繰り返しながら、その場にへなへなと頷れた。あふれる聖なる力が小屋を埋める。黄昏の軍勢の下級悪魔たちは大悪魔から生まれ、大悪魔と共に消える。そのため、私は大悪魔に戦いを挑んだのだ。今頃、難民キャンプを襲っていた悪魔達も消えてい

るだろう。  
「さすがセイヴァーシユガー。酒列まひるね」  
背後から声がかかる。この声はセイヴァーカテドラル。私たち十二名の救世聖少女のリーダーだ。

「あまり、見ないでください……」

私の救世聖少女としての姿。天使から与えられた純白のドレスは、血でまだらの赤に染まっていた。すべて私の血液だ。私の聖なる力、救世聖少女の能力は浄化で、悪魔にすら安寧と救いを与えられる。しかし私自身の戦闘能力は低く、生傷は絶えなかった。他の救世聖少女のように、強い力で悪魔を蹂躪はできない。  
「キャンプの無事は貴女の誇るべき成果。胸を張りなさい」  
そう言ってもらえると、少し気分が楽になる。

「——あ——」

取まってゆく浄化の光のなか、怯える小さな悪魔の姿がある。赤い髪と青い肌のまだ子供の悪魔。

「貴女は疲れているでしょう。私がやるわ」

「駄目……！」

軋む身体に鞭打って、私は杖を構えるカテドラルに立ちはだかる。

「シユガー！ 小さくても大悪魔よ！」  
カテドラルの言うことも理解できる。けど、まだこの子は、何もしていないのだ。

「私が保護しますから……面倒も……」  
「……退きなさい。貴女ごと吹き飛ばすわよ」

杖に聖なる力が集まる。むろん受ければただでは済まないが、ここを退くつもりはなかった。「まひる！」

瞬間、乱入してきた影がある。

「カテドラル！ 貴女なにをして——」

同じ救世聖少女であり、幼馴染みの白鶴水鳥だ。すでにセイヴァークルセイドに変身済みで、盾を構え私とカテドラルの間に滑り込む。ちらりと私の後ろにいる悪魔を見て状況を把握したようだ。

「やるっていうなら代わって相手になるよ、カテドラル」

クルセイドが剣を構える。それを見て、カテドラルは嘆息し——踵を返した。

「貴女の慈愛は素晴らしいものだわ、シユガー。悪魔でも罪がなければ守ろうとする。けれど、忘れないことね。私たちが天使様からこの力を授かった理由。それは世を乱す魔神を倒すこと。そして——」

その言葉から先は聞こえなかった。彼女は去ってしまったからだ。けれど、言われたことは分かっている。

「まひる、大丈夫？」

水鳥が気遣ってくれる。彼女は幼い頃から、ずっと私を守ってくれた。そんな彼女への友達

以上の感情を隠しながら私は頷いた。

そう。あの日。私たち十二人の元に天使様が降臨され、聖なる力を与えられた日。私たちに魔神を倒すことともうひとつ、大切な使命が与えられた。そう、これは世界を救う戦いであり。

『主は戦いを終わらせた救世聖少女を、新たな神とするを仰せである——』

——次代の神を選抜する聖戦である。

「まなつ。美味しい？」

私の声に、まなつ——その後、晴れて私の妹となった小さな大悪魔が振り向く。口の周りは、アイスクリームでぐちゃぐちゃだった。

「ああ、拭いてあげる。こっちを向いて」

それでも私は思うのだ。神様になれなくてもいい。例えば悪魔であっても——助けられるものは助けたいと。

——二ヶ月後。魔神アンサーテン戦、七日目。

身体がコンクリートに打ち付けられる。たくさん骨が砕ける音がして、ついでに吐血もついてきた。内臓をやられたらしい。痛い。少し身動きするだけで、狂ってしまうくらいの激痛が身体を苛む。だけどおかげで、気絶だけは免れた。

他の十一の救世聖少女は、まるで枯れ枝のようになり打ち捨てられている。三十分前まではまだ三人残っていたが、もう生きてはいないだろう。「もうぼろ雑巾じゃない。そんなになるまで頑

張って、なにがあるの？」

私に魔神が迫る。青い肌に黒い眼球、赤い瞳。脈打つ角に、骨組の翼を持つ彼女は、しかし言葉ほどに余裕はない。ぼろ雑巾はお互い様だ。皆の攻撃で彼女もまた酷い傷を負っている。残された暗黒の力もあと僅かだろう。だから今、決して倒れるわけにはいなくて。けれど、魔神から放たれた暗黒の矢も今の私には躲すことすらかなわなくて。

瞬間、誰かに突き飛ばされたことだけは理解できた。魔神と同じ青い肌の少女が、暗黒の矢に貫かれる。

「まなつ？」

家に置いてきた彼女が、どうしてここにいるのだろう。彼女はそのまま吐血して、ねえ、お姉ちゃん。

固まるわたしに、こう告げたのだ。倒そうとしちゃだめ。いつものお姉ちゃんのこと。戦いをして。魔神アンサーテンを救ってあげて。

瞬間。最後の力を振り絞り、彼女は魔神に飛び付いて。私はその上からまなつごと魔神を抱き締めた。彼女は逃れようともがくが、二人ぶんの力だ。そう簡単には離さない。そして、自分ごと浄化結晶に封じ——。

「クリスタル・エクソサイズ！」

魔神は、かつて神様と世界を作る権利を争い、負けたのだという。そのときの憎悪が魔神と悪魔達の暗黒の力の源なのだ。なら、それも私が持って行こう。私の心の中に封じ込めて、全

部私を受け止めて——苦しみから解き放とう。自分までも浄化の光で焼きながら。

——魔神アンサーテンの封印を確認。盟約に基づき、次代の神をセイヴァーシユガーと決定する。

薄れゆく意識のなか、そんな声を聞いた。

### ③輝ける新世界

「お姉ちゃん、今日はどこへ行こう？」

ユノがぐるりと振り向くと、空色の髪と白いワンピースがふわりと舞った。額と胸に埋め込まれたサクラメント・セル・ジュエルがきらきらと輝きを放つ。相変わらずその眼は光を灯さないが、この宝石はそれを代替してあまりある。

あの日、新しい神様が生まれた日、天国が空から降りてきた。原罪は許され、人間は再び樂園で生きることを許されたのだ。

それをアセンション・ザ・ワールドと呼ぶ。

人々はサクラメント・セル・ジュエルなる結晶体と融合し新人類へと進化した。私たちの額と胸に埋め込まれ、半生体化している超機能結晶体のことだ。これによりヒトの生物としての能力は大きく拡張された。哺乳類どころか昆虫や植物などの精神波長や、周辺の地形構造、電磁波などあらゆるものを情報化して知覚できるのだ。おまけに身体機能の強化も出来る。ユノだって、もうひとりで生きていける。見ればユノはなにやらネットで調べていた。昼食をど

こにするか考えているのだろう。今や電子ネットワークは半有機化しており、端末を介さずジュエルを経由して直接情報のやりとりが可能なのだ。

私は部屋の外縁に近づく。すると壁はひとりでに円状に開き、ガラスの窓を作った。今や建物は生命体で、そのものが光を放ち、自動的に壁や窓を作ってくれる。窓には鏡に映る私の赤毛越しに、空に浮く道、乗り物、そして神様が住まう高い塔、神支塔が見えた。

新しい神様——『赫々たる黎明』様は、天上に坐すのではなく人と共に歩み、共に生きることを選ばれた。その新たな御代。新聖歴一年。エデンと一体化した地球で、その中心となった樂園の名を黄金郷トーキョー・エリシオンと呼ぶ。それが私たちの住む、かつて東京と呼ばれた街の名前だった。

### ④トワイライト

「まひる。そろそろ休んだら？」

もう夜だよ、とクルセイドが言う。私は背中の光輪と和洋折衷のドレスを翻して、彼女の方向に直った。

「あのですねクルセイド。私の名前はもう『赫々たる黎明』なんですが」

あとあなたの名前ももう白鶴水鳥ではなく救世聖天使セラフィークルセイドなのですが。

——あの日。魔神と旧き神、天使達は死亡し、

私は新しい神に即位した。『赫々たる黎明』とは神としての私の名で、酒列まひるという名前と悪しき心は、神格化されたときに捨ててしまった。十一人の救世聖少女も新たな天使として蘇り、共にトーキョー・エリシオンの神支塔で世界を見守っている。

「そうだよお姉ちゃん。働き詰めだと身体に悪いよ？」

全能神の身体に健康も何もあるものかと思つたが、前任の神様は死んでしまったので案外あるのかもしれない。まなつも蘇り、今では私の世話係となっている。

「そうですね。ちよつと休もうと思えます」

そうして私は神支塔の大広間であるグラウンドチャペルから転移。広すぎて落ち着かない部屋に戻り、姿見に向かう。既に生命体ではない私の身体は、睡眠や食事、入浴を必要としない。けれどもそれを行ってしまうのは、人間だった頃の名残なのだろうか。

そんなことを考えていると、姿見の中に映る私の口角が——にやりと笑みを象つた。

——え？

思わず鏡に手を触れる。鏡の向こうの私も、同じようにこちらに手を伸ばして——。

瞬間、私の身体から力が抜け、足がぐぐくと震える。もはや自分で自分を支えきれず、脱力して姿見の前に倒れ込む。意識がどろどろとした暗闇に飲み込まれる前、辛うじて動かしただけの視界に映つたのは、鏡の中で三日月のような笑みを浮かべる、黒い己の姿だった。

そうして、私は眼を覚ました。

（——ここ、は？）

戻ってきた思考で、状況を把握しようとする。渦巻く闇が支配する、漆黒の空間だ。四肢は闇に絡め取られ、動かすことはできない。それに、この場所はどこかも分からない。世界各地の場所、出来事を一瞬で知覚できる私が分からない場所が、地球上にあるわけが——。

「ここは貴女の心の中ですよ。『赫々たる黎明』さん」

かつかつと靴音を響かせながら、その少女は私の前に現れた。その姿は。

「……私……？」

私と同じ顔、同じ瞳、同じ髪。違うことと言えば、漆黒のレオタード、そして妖艶に改造された救世聖少女のドレス。そう、まるで闇に染まったセイヴァー・シユガーのような——。

「私はセイヴァー・シユガー・トワイライト。貴女が捨てた悪の心と、浄化された魔神の残滓が混ざり合ったものです」

そして、ここは貴女の心の中にある私の空間、と彼女は付け加える。だから、ここでは私の権限が強く、貴女は抵抗できないのだ、とも。

「——私に何の用ですか」

セイヴァー・シユガー・トワイライトと名乗ったもうひとりの私をぎり、と睨み付ける。拘束されている以上、平和的、友好的な目的ではないのは容易に想像がつく。

「そうですね。不公平だと思っんです」

——不公平？

「私はもう魔神でも貴女の悪の心でもない。それが混ざり合った新しい私。けど、神様にだけ後継者がいるのはズルいじゃないですか。それに負けっぱなしなのも癪です。だから」

——神様の後継者を、私の後継者にしようと思ひまして。

そう言つて、彼女は襟の私を抱き締めて、唇を重ねた。唇をこじ開けられ、口内で舌と舌が絡み合った瞬間、それを注ぎ込まれた。

「——！！」

身体、下腹部、脳、思考、魂。全てが灼熱した。まるで、どろどろと煮えたぎる真っ黒いものが、私に注ぎ込まれてくる。

「これはかつて暗黒の力と呼ばれていたもの。今の私を維持している力で、私そのもの。それを、貴女に全部あげちゃいます」

私は元々、貴女の心でもあったんです。だから染めるのも馴染むのも、すごく速いと思うんです。そんな彼女の声が聞こえるが、私は目を見開いてぼろぼろと涙を零すだけ。

「耐えても無駄ですよ。自分に抵抗はできません。さあ、私とひとつになりましょう？ ああ、口から注ぐだけでは足りませんね。えい」

彼女がぱちんと指を鳴らすと、

「実は、周りの闇が全部私なんです。だから、全部受け入れてくださいね？」

ぞぶぞぶと、私を拘束していた闇が私を嘗め回してくる。目を覆われ、臍や身体に突き立ち、より濃厚な闇を私の中にぶち撒けた。

「あっ！ あっ！ ぐっ、う——！！」

もう、自分がどうなっているのかすら分からない。そうして私は、彼女から注がれる闇の力に飲み込まれていった。

### ⑤ 永久の夜

「まひる！ どうしたの！」

心地よい振動で目を覚ます。心配そうに私を覗き込んだのは、セラフィークルセイドだ。夜明け前、私はふらりとグラウンドチャペルに転移して現れ、そのまま倒れ込んだらしい。

——おかしな夢を見ていた。ともあれ夢は夢。

セイヴァー・シユガー・トワイライトは薄明の光に消えていってしまったのだろう。

心配かけてごめん、とクルセイドの方を見て——その涙で潤んだ瞳に、胸が高鳴った。何度も助けられた親友だ。彼女には、許されない恋心を抱いたこともある。だから。

——私のものになりたい。

——お前のものにしてしまえばいい。

こころの中で、何かが囁いた。私の心は何も疑問を呈することなく、それに従った。

「……まひる？」

誰も疑うことはない。そんな純真な瞳を塞ぐように。私は床から、天上から、そして壁から触手を呼び出して、彼女を拘束する。

「まひる！ 何を——！！」

そうして——己の欲求の赴くがまま、彼女に唇を重ねて。これだけでは足りない。もっと。

そうしてクルセイドの全てを、私は奪い尽くしたのだ。

「——は、え？」

そうして、目の前のそれを見上げる。漆黒の結晶——洗隸結晶に閉じ込められたセラファイークルセイドが、内部で身を振っている。彼女は視界も口も塞がれ、四肢を拘束されて、ゆっくりと闇に染められていつている。このままだと、遠からず暗黒天使として生まれ変わるだろう。

「私、私は何を——何をした、の」

自問自答する。好きだった人を襲った。なぜ？ 自分でも分からない。

そうだ、クルセイドを助けないと。私がどうしてあんなことをしてしまったのかは、後で考えるしかない。ともかくやるべきことははっきりとしている。洗隸結晶は、私にしか壊せない。さっそく破壊しようと手をかざし——。

クルセイドはとても気持ちよさそうだ。幸せそうだ。

私の頭の中に、そんな考えが過る。

じゃあ、私はあの時、幸せじゃなかった？

私の所業を思い出す。こんな私のじゃない。けれど——クルセイドの全てを蹂躪するのは、とても楽しかった。そうだ、

とても、楽しかったのだ。

いつの間にか、私はクルセイドを助けるための手を下ろし——ああ、なんてこと。

私は笑っている。誰かをめちやくちやにするのが楽しくて嬉しくて、もう仕方なくて——お

月様みたいに笑っている。

「お姉ちゃん！」

まなつの声が聞こえる。ぞぶぞぶと音を立て、あらゆる場所から触手が這い出してくる。それは私に纏わり付き、黒い粘液で汚しながらあるべき姿へと変えてくれる。

闇に染まり、享楽に耽り過ごすことが、何者にとつても幸福なのだ。そう、これが正しい姿なのだ。『赫々たる黎明』なんて名前も、もう私には相応しくない。

私の名前は——。

「これは！」

我が目を疑う。われわれ救世聖天使の憩いの場だった大広間グランドチャペルは、おぞましい変貌を遂げていた。穢れなき白だった壁も、清廉なる天使のレリーフの柱も、全てが赤黒くぬらぬらとした肉壁に覆われようとしている。黒いクリスタルに封じられたクルセイドの姿もある。

そして、その中央に浮遊する影がひとつ。

『赫々たる黎明』様、なのですか？

誰何する。そのはずだ。私が、セラファイークアテドラルが彼女を見間違うはずがない。しかし、その装いは以前とはまるで違う。背の光輪は禍々しく歪み果て、肢体は艶のある闇色のボンデージドレスに包まれている。

まひるは、彼女は、こんな服は好まなかったはずだ。

「いかがなさいました。その御姿は」

おそろおそろ声をかける。彼女はまひる本人のほずなのに、その確信を持ってない。だって、あまりにも雰囲気の違いすぎる。

『赫々たる黎明』？ 違います。私は『とこしえのよる』。この世界を真の幸せに導くために再降臨した、神と魔神の後継者。カテドラル。貴女も一緒に力と享楽に耽溺しましょう？

その言葉に、私は最悪の事態が訪れたことを悟った。

「乱心なされましたか！」

私は倒れているまなつを抱き、武装である杖を取り出した。背の翼から輝きが光線となり、幾条も放射される。それは『赫々たる黎明』様に突き刺さるが、同時にクルセイドにも直撃した。『赫々たる黎明』様を止めるため、彼女らを解放せねばならない。だが。

「傷ひとつ——ない？」

私の攻撃は、それらになんの影響も与えなかった。

「——カテドラル。まさか貴女、神の被造物を破壊できるとでも思っていたんですか？」

「お姉ちゃん……お願い、やめて……優しいお姉ちゃんに戻って……」

『とこしえのよる』となった彼女に、何をされたかは分からない。まなつはそれでもまひるを信じようとしている。私も同じ気持ちだ。私たちが救世聖少女だった頃から。甘い、けれど慈愛と心の強さは認めるべきものだった。

「大丈夫。二人ともすぐに分かりますよ」

瞬間。私とまなつは、洗練結晶に飲み込まれていった。

「残念。私、それを好きなどころに作り出せるんです。安心してください。痛くはないですから。まなつ、カテドラル。生まれ変わって会える時を楽しみにしています」

ぞぶりとクリスタルの中に肉壁が満ち、私とまなつの手足、翼を拘束する。触手が私の身体に突き刺さる。痛みがないのが逆に恐怖を感じさせ――。

「うあ……あああああああ！」

そして、私も闇に塗り潰されていった。

「――ふふ」

「どうしたんですかあ、『とこしえのよる』様？」

「ううん、暗黒天使達から連絡が来ただけよ」

抱きつき、絡みついてくるまなつの髪を梳き、頭を撫でる。

「なんと？」

カテドラルは、クルセイドと共に跪き内容を問うてくる。カテドラルは特に暗黒天使のまめ役なので、働きぶりが気になるのだろう。

「南米で暴れてるって。帰ってきたらご褒美をあげないかね」

「……いいな……」

そんな私の言葉に、クルセイドがぼつんと漏らす。

「またクルセイドにも任務を与えますよ」

私の言葉に、クルセイドはぶるりと身体を震

わせた。その与えられる『ご褒美』の内容を想像、期待してしまったのだろう。

十一名の天使はその姿を漆黒に染め、暗黒天使となった。彼女らには世界各地の抵抗勢力を削ぐ任務を与えている。今も闇から黒い小型天使『よるのこどもたち』が生まれ続けていた。

まなつは変わらず私の世話役として手元に置いてある。魂まで堕ち、衣服も私好みにボンデージに着替えて、より悪魔らしくなった。

「でもね、まなつ。お腹の子に悪いわ」

私の言葉に、まなつは名残惜しそうに離れる。私は身重なので、この神支塔の最上階から動くことはできない。だからこそまなつの世話が必要なのだ。

「――ふふ」

そうして私は、膨らんだおなかを撫でる。誰かと妻夫になったわけではない。処女のまま妊娠を果したのだ。世界中から集めた暗黒の力でこの子をゆっくりゆっくり育てていく。

「早く――早く生まれてきてくださいね」

もう魔神アンサーテンも、セイヴァーシユガー・トワイライトも私の心にはいない。溶けて消えてしまった。この子はその魂を輪廻させた、私の娘であり新たな魔神。いえ、暗黒神――名前はそう。

「――ヨゾラ。早く会いましょう。ヨゾラ――」

## ⑥ 溶け落ちた真世界

「あつははは！ トーキョー・パガトリーから逃げようとするなんて、バカみたい！」

ユノの笑い声が聞こえる。どうやら、今日の獲物を捕まえたらしい。見たところ、幼い娘を連れた母親だろうか。私じゃなくユノに捕まるとは不運としか言い様がない。けれどもまあ、『よるのこどもたち』よりはマシか。『とこしえのよる』様の使いである十一の暗黒天使様や、眷属『よるのこどもたち』は、反逆者を見つけるとすぐに連行して、私たちに分けてもくれな。ここはトーキョー・パガトリー外縁部。私たちの住居棟も街の出口も近いため、狩りをして遊ぶには絶好の場所だ。

「ねえ、お姉ちゃん。どうしようかこのふたり？」

「そうね。『とこしえのよる』様の洗練も受けていないみたいだし……」

あの日から、星の様相は様変わりした。フォールダウン・ザ・ワールド。もはや世界は暴力と獣欲、蹂躪と支配、不貞と隷属によって成り立つ。墮落主都トーキョー・パガトリーに坐す神、『とこしえのよる』様の洗練を受け、世界は、私たちは再び生まれ変わったのだ。今にして思えば、どうしてあんな品行方正な世界を樂園だと思っていたのだろうか。

なのにそれを認めず抵抗し、逃げ出そうとする者達がいる。奸邪に溢れ、享楽の樂園となったトーキョー・パガトリーからどこかへ去ろう

というのだ。

「もうどこに行っちゃって、あの頃の世界はないのよね？ それよりもみんな毎日、楽しく気持ちよく生きようよ！」

そう言ってユノは、黒い透明なレオタードとボンテージを纏った肢体をくねらせる。私たちは世界が落ちてから、ずっとこうやって他者を墮とし、闇の力を増して生きてきた。必要でない分の闇の力は、『とこしえのよる』様に捧げている。

「ええ、ユノ。このふたりも仲間に入れてあげましょう——ん」

私はそんなユノに歩み寄り、その身体を引き寄せてキスをする。お互いのボンテージが擦れ合うぎざぎざした音と、ぴちゃぴちゃという唾液の音だけがしばし私たちを支配した。

そうしてふと、私たちを見る母親の顔に気付いた。

「あら、不安そうな顔。いいわ。じゃあ、貴女が私とユノの所有物になれば、私たちは貴女の娘に手出ししないであげましょう」

私の言葉に、母親の顔は明るくなる。まま、と声をかける少女に、大丈夫。絶対に貴女だけは守ってあげるから、と抱き合う二人を眺める。「お姉ちゃん、私が、私が洗練やりたい！」

綺麗な眼だね。希望に溢れてる。ユノはそんなことを言いながら、私の返事を待たずに母親に近づいて——そのくちびるを重ねた。瞬間、母親の目が大きく見開かれる。ユノは母親のサクラメント・セル・ジュエルを自分のものと共

鳴させ、その意思を真つ黒に塗り替えているのだ。見れば身体はがくがくと震え、見開かれたままの眼からはとめどなく涙が溢れていた。思考が犯されるとは一体どういう感覚なのだろう。でも、きつと気持ちいいんだらう。

「——ふふ」

そして、ユノはくちびるを離した。その間に、つ、と唾液の橋が架かる。

「まま？」

そうして、娘の呼びかけに振り向いた母親の瞳は——もう、かつての輝きを讃えてはいなかった。そこにあつたのは私たちと同じ、ただ濁りきった、墮ちた者の瞳。

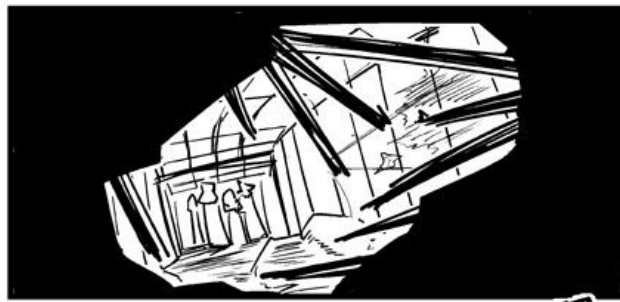
「私たちは何もしないわ。私たちは——ね」

綺麗な、本当に綺麗な親子愛だった。反吐を必死に我慢したくらいだ。これであのふたりも、本当の幸福だと知ることができるだろう。

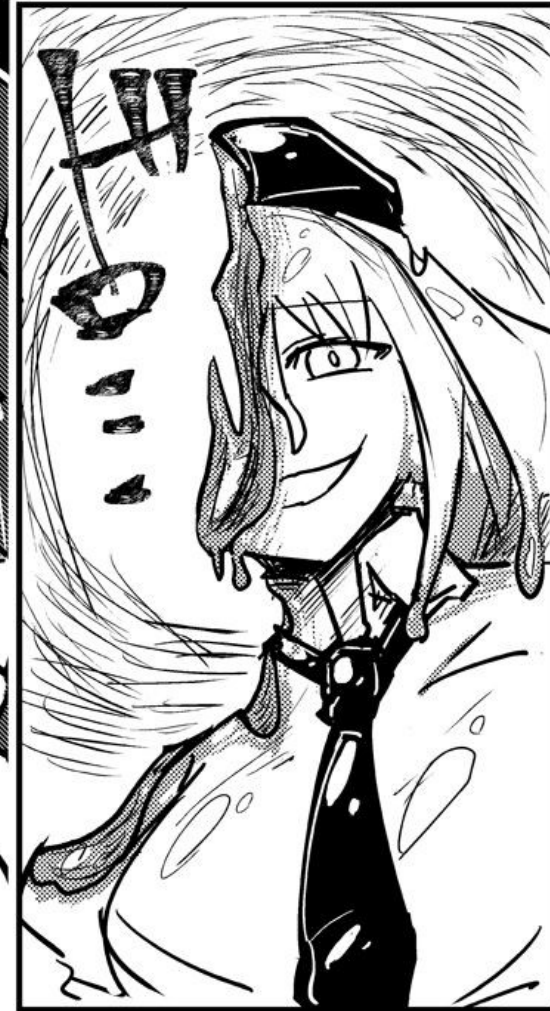
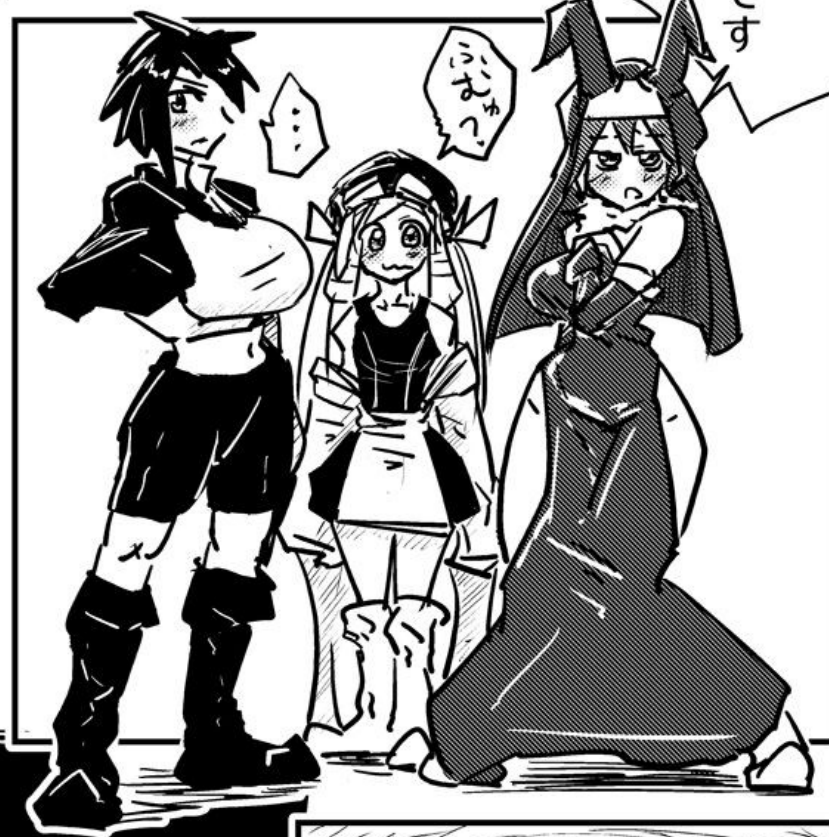
まっくらな空を眺める。そこには闇を放つ黒い太陽が昇っていた。もう、朝は永遠に訪れない。私たちはこの素晴らしい世界で、ずっとずっと生きていくのだ。

私はトーキョー・パガトリーの中心を振り返る。そこには変わらず、しかし真つ黒に染まった神支塔がある。私は、胸のサクラメント・セル・ジュエルに手を当てて、そちらに向かって祈りを捧げる。

ああ、こんな幸せはない。神様、本当にありがとう！



アイナ先輩  
本当にいるんです  
敵幹部つて？



逃げ落ちる戦士達  
投職



ヤマリット!?  
アイナ先輩は







ニウルさん スミレ  
 素敵でしょう？  
 人間の殻を破るの♡

最高♡♡



— そうだ

皆ひとつになっ  
 ってみない？

はあい♡

こうして「私たちが」は  
混ざり合った——  
体形・魂・記憶・体術・魔術を  
一つに統一された  
融合魔ヤマリットとして

次は機関に戻って  
オペレーターや  
司令官たちを「私」に  
してみようかしら♡

奴

## 四方封鎖フォーリングダウン

日高久志

「ダフネ……本当に行くの？」

「はい。私の生まれ育った街ですから。私が一番よく知っています」

銀髪のたなびく髪をかき上げながら魔法少女ファイリット・ダフネこと真鍮未来（まじょうみらい）は、不安げな先輩魔法少女ファイリット・リリーに力強く頷いてみせた。

「だからこそ心配してるの。」

きつと「ジャーミス」は貴方の友達や家族を利用して、追い出そうとしてくるわ。

これ以上、貴方が辛い目に遭うのは……見てられないわ」

「それでも……行かなきゃいけないんです」

引き留めようとする先輩に、未来は寂しげな笑顔で応えた。

行けば酷いことが待っているのは、未来も覚悟はしている。

それでも……救いたい人たちがその街にいるのだから。

故郷の画楽市（がらくし）は現在、「封鎖」されている。

人の負の感情を喰らい人心を操る「ジャーミス」と呼ばれる悪魔達は、根城となる街で周囲

の人間を洗脳しつつ、支配範囲を拡げていく習性を持つ。

小さな街から大きな街へ、そして都市を呑み込み、最終的に国をも蹂躪する。

そんな怪物と戦っているのが、魔法少女……

「ファイリット・フラグランズ」達だ。

「ジャーミス」が世界を支配しようとする前に、「ファイリット」が阻止する。

そんな戦いが何十年と繰り返されてきた。

ファイリットの「浄化」にジャーミスは抗う術がない。

だからジャーミスは洗脳支配している人間を盾にしてくる。

正体のバレたジャーミスは自分の支配した街に「籠城」してファイリットの「浄化」から逃れようとするのだ。

だが支配している人間からは、段々と負の感情が薄れていく。

その為に、喰い物に窮したジャーミスが街を飛び出してくるまで、街を「封鎖」するのが、最近の両者の攻防になっている。

無理に支配された街を攻めようとすれば、盾にされた人間が次々と被害に遭ってしまう。

ジャーミスは自分が生き残る為なら洗脳した人間達に容赦はしない。

つまり待っていれば、敵の方からやってきてくれる……攻め込む方が被害を大きくする。

でも待てない事情が、未来にはあった。

ジャーミスが支配していた街の住人は、無事に解放された後でも大抵は元に戻ることはない。長い間、感情を制御されていたことで、どこか虚ろに人が変わったようになってしまったのだ。未来には許せなかった。

大好きな故郷の人たちが……魔人同然になっ

てしまうのを。

だから行くのだ。ジャーミスの巣になってしまった画楽市（がらくし）に。

「私がお付き合い出来るのは……ここまです」

後輩魔法少女、「ファイリット・バナラ」の操るフラグランズデッキに乗って、街の入り口までやって来た。

「充分だよ。バナラ、ありがとう」

「き、気をつけて下さいね！」

先輩が負けることなんて想像も出来ませんけど……

でも……でも……一人だと……」

「匂いが乱れてる。気をつけるのは貴女」

「え!？」

バナラは自分の匂いをクンクンと確かめる。

「ファイリット・フラグランズ」達には「浄化」以外にもジャーミスに有効な特殊な力が備わ

っている。

それは人に化けるだけでなく、時に人を取り込み隠れるジャーミスを炙り出す力だ。

彼女たちは、人の気持ちを「匂い」として感じることが出来る。

嬉しい、楽しい、気持ちいい感情の時は心地いい香りがする。

苦しい、怒り、妬ましいなどの、負の感情の時は不快な香りがしてくるのだ。

未来は不安になってしまったバニラの気持ちを「匂い」で捉えていた。

先輩からも同じ匂いがしていた。

匂いはセンサーになる。だから自分の匂いを保つ事はフィードバックの初歩だ。

(二人とも……本気で心配してくれてるんだ……)

未来は心通わせる仲間の気持ちを香りで感じられて、心から応援してくれていると感じた。これから起こる……どんなことにも耐えられる……

そう勇気をもらえた気がした。

―画樂市(がらくし)―

「さっさと消えていなくなれよっ!

その汚え面を見るだけで気分悪いわっ!!  
ブサイク自覚しろっ! ブスブスブス……!!」

「何、お高くとまってるの?」

邪魔しに来たクズのくせに!

聞いてんの? 無視すんなよっ!!」

街に入って数分、まわりついて来た二人の少女は……中学時代に親友だった香奈と真帆だ。お淑やかで可憐だった面影はまるでない……

二人からは腐敗臭にも似たゲスな臭いが漂っていた。

(今までも色んな「ジャーミス」と戦ってきたけど……)

ここまで酷い臭いは初めて……!!  
香奈や真帆をこんなにしてしまうなんて……!!)

怒りがこみ上げてくる。

「ジャーミス」に染め上げられた邪な心で、二人は未来を罵倒し続けている。

「昔、この公園でずっと友達だよって誓いあったよね。」

だから……友達で居たいなら、出ていってよ。未来が出ていかない……私達、怒られちゃうの……」

「それとも……私達の「仲間」になってえ……ご主人様にお仕えするう?」

公園に差し掛かった辺りで、二人の罵倒は緩急を付けてきた。

だが泣き落としも、誘惑も未来には通じない。二人の心が出している臭いは……どんな言葉を吐いても変化がないからだ。

ただただ人を貶めようとする……腐敗臭が鼻を突く。

いつの間にか周りに他の住人も集まってきていた。

学校の先生、近所の優しいおじいちゃん、駄菓子屋のおばちゃん、懐いてくれていた子供達……

香奈と真帆の言葉を無視し続ける未来に皆、揃って「帰れ! 帰れ!」と鬼の形相でシユプレヒコールを繰り返している。

もうこの街には未来に優しい人間なんていない……

香奈と真帆と同じドス黒い腐敗臭が全員から立込めて、公園を覆い尽くしている。

「ジャーミス」を倒して、彼らを解放するまで……未来はこの地獄を耐えなければいけない……

(いけない……! 覚悟していたでしょ? こんなことぐらいいで挫ける訳にはいかない……!!)

未来は自分の匂いが揺らぐのを感じていた。分かっているけど大切な人たちから浴びせられる非難の言葉はかなり堪えていた。

これで「あの人」まで罵声を浴びせてきたら……未来の気持ちは暗く沈んでしまう。

心の匂いが揺らげば、フィードバックの力も弱まる。

益々、ジャーミスの思うつぼだ。

「未来っ！こっちだっ！！」

群衆の間から、声が飛んだ。

知っている声……会いたかった……“彼”の  
声。

何より……夥しい腐敗臭の中で、仄かに香る……

……その清々しい匂い……

まるでジャスミンのようなその香り……

未来は吸い寄せられるように、その香りがする  
方へ飛び込んだ。

「耕太っ！無事だったんだねっ！」

初恋の人……美杉耕太（みすぎこうた）は満面  
の笑みで未来を出迎えてくれた。

邪悪に支配された街の中で、彼だけが未来に優  
しく接してくれたのだ。

何かの罟？

フィーリットは心の疚しさを見抜ける力があ  
る。

耕太の匂いは清廉そのもの。

ずっと嗅いでいたくなる……いい匂いがして  
いた。

「立花（りっか）も隠れて、君を待っているん  
だ。来てくれっ！！」

「……うんっ！！」

耕太に手を引かれるまま、未来は悪夢の公園を  
飛び出した。

前を行く耕太から香る匂いに、未来はドキドキ

を隠せなかった。

「未来ちゃんっ！お帰り！」

酷いことされなかった？大丈夫……？」

昔と変わらない妹のような出で立ちの橘立花

（たちばなりっか）は耕太と同じ幼馴染だ。

彼女からも耕太と同じ……清々しい匂いが漂  
っている。

ジャスミンのようなあの香りだ。

ジャーミスに洗脳されていない証だ。

「すまない……未来。」

父さんがこんな酷いことを……」

この街を襲ったジャーミスの正体は分かっ  
ている。

耕太の父親だった男だ。

墮落しジャーミスになった彼は「ドロドロ」と  
名乗り、汚らしい泥を媒介にそれに触れた人々  
を洗脳する。

「私こそ謝らなきゃ……」

この街をおかしくした元凶がお父さんなら……

耕太のお父さんを私は……倒さなくちゃいけ  
ない」

ジャーミスになってしまった人間を救う術は  
ない。

「浄化」をすれば、一緒に消滅してしまう。

それほど心の底まで腐りきってしまった  
のだ。

「アイツが皆にしてきたことを思えば……仕  
方ないよ。」

気に病まないで、未来」

フワ……

父親を倒そうとする未来に気遣いまでしてく  
れる耕太から、また心地良い匂いが未来へ届い  
た。

言葉以上に、フィーリットにはこの“心を表す  
匂い”が何よりも嬉しい証になる。

「そういえば……二人とも……同じ匂いだ」

耕太と立花から漂う匂いは、まったく同じだ。  
心の匂いは、その複雑性から中々同じ匂いにな  
ることはない。

言うなれば香水を掛け合わせているようなも  
のだ。人によってはそこに下水の臭いが混ざっ  
たりするのだから、同じ匂いになるのは珍しい。

（私を助けようとして……気持ちが一緒にな  
ったのかな？）

嫌な臭いがしなければ、疑う必要はない。

未来は耕太という協力者を得たことで、一気に  
決着をつけることにした。

「お父さんの居場所……知っているよね。」

案内してくれる？耕太……」

「ああ、もちろん！」

―街外れの廃工場―

泥まみれで薄汚れた建物の中で、花びらのよう

な「浄化」エネルギーがキラキラと舞っていた。  
「おのれっ!!この俺の居場所をこんなにも早く突き止めるとはっ!!」

ジャーミスは「浄化」の力に触れば終わりなので、フィリットからは逃げ回るしかない。だから隠れ家を不意討ちされたことは、ジャーミス・ドロドロ口にとって大ピンチだった。

汚らしい泥を撒き散らして、抵抗する。

街の住人達から臭っていた……腐敗臭。

それを上回る悪臭が工場中に拡がっていく。

だが未来には通用しない。

その全てを薙ぎ払って、ジャーミス・ドロドロ口に、フィリットステッキを突き立てた。

「これで終わりですっ!!」

「馬鹿なっ!!こんな呆気なく……俺様があっ!!」

「浄化」のエネルギーがジャーミス・ドロドロの身体を崩壊させていく。

勝ったのだ。耕太の協力のおかげで、一人の被害も出すことなくジャーミスを倒すことが出来た。

未来は恐れていた。

ジャーミスが決戦の時に、大切な人たちを体ごと盾に使ってきたら……

ジャーミスの因子が入っている彼らも「浄化」の影響を受けて、最悪消滅してしまうかも知れなかった。

「だがあ……不意をつくのは……  
お前だけではないぞお……この俺もお……  
お前をお……」

消し炭になろうとしているジャーミス・ドロドロの断末魔を未来は、「何を言ってる……?」と訝しんで聞いていた。

その時だった。

「へドロドロオ……♪」

「え?」

ドバドバドバツ……!!

生臭い味のする灰色の液体が突然奪われた唇から、体内に流し込まれた。

「んんっ!!く、苦しいっ……!!

んんむうっ……!!離れてっ!!」

咄嗟に襲ってきた女を突き飛ばす。

女は口からダラダラと灰色の液体を垂れ流している。

(あんなものを……飲まされたっ……!?)

「へドロオ♪どお?私のへドロ液い♪

美味しいでしょお?貴女の身体をへドロ人間に作り変えてくれる……素敵な体液っ♪」

「そんなっ!!なんで……っ!!」

女の恐ろしい宣告よりも、未来にはへドロ口にまみれて、肌までへドロ口色にしてニタアと笑う  
「その女」自身に未来は驚愕した。

明らかに人間を辞めて……ジャーミスに成り果ててしまっている彼女は……さっきまで一緒にいた立花だった。

(馬鹿なっ!!そんな素振りは一つも……っ?匂いだってっ!!今も立花からは……澄んだ良い香りがしているの……!!)

未来は混乱してしまった。

もう完全に消し飛んでしまったが、耕太の父親がなったジャーミスの罠にかかったのは間違いない。

最後に彼が言っていた通り、不意をつかれたのだ。

だが……怪人に堕ちてしまった立花からは邪な匂いを感じない。

むしろ純粋で……透き通った……普通の人間でも中々ない清廉な匂いを纏っている。

(矛盾してる……どうしてっ!?)

「戸惑っているみたいだね。でもお……未来もへドロ人間になったら……」

へドロ口が身体中を巡って、僕の奴隷戦闘員になったら、きつとスッキリすると思うよ♪」

ポンッ……

肩を叩かれた未来は恐る恐る後ろを振り向いた。

知っている声……忘れるはずがない。  
大好きな人の……声を……

「へドロドロオ……♪」

口からヘドロをダラダラと垂らしながら、立花と同じ灰色の肌の怪人と化していたのは……  
耕太だった。

「……ジャーミス・ヘドロドロ……」

未来は知らないはずの怪人の名前を呟いていた。

耕太……ジャーミス・ヘドロドロは邪悪な笑みを浮かべる。

だが彼から漂う匂いも……立花と同じ綺麗な清々しい香りだ。

ジャスマミンのような……

未来は膝から崩れ落ちた。

ふと視線に入った自分の両手が、二人と同じ灰色に染まっていく。

（わ、私も……ジャーミスにされちゃうのっ？！、嫌っ……！そ、そんなの駄目っ……！！）

震える未来の目から涙が溢れ落ちた。

身体の内から湧き上がる抗えない運命に絶望する。

そんな未来の涙を優しく拭い、ジャーミス・ヘドロドロは包み込むように彼女を抱きしめた。

「何も心配することはないよ」

僕と同じになれるんだっ♪こんなに幸せなことはないよ。

ねえっ、立花♪」

「はいっ♪ご主人様と同じヘドロ人間になれ

てえ……私、幸せですっ♪

ご主人様の奴隷戦闘員として、世界中の人間にこの喜びを伝えてあげたい♪」

未来はジャーミス・ヘドロドロに媚びを売る奴隷と化した立花を見上げた。

何の迷いもない純粋な笑顔で、忠誠を誓う彼女からは……ジャスマミンに似た香りがより一層、強く出ていた。

「ああ……そんな……」

未来にも矛盾の正体が分かってきた。

ジャーミス・ヘドロドロや立花は、悪いことをしているとは、微塵も考えていないのだ。

ただ純粋に……清々しいままでにただ真っ直ぐに「ヘドロ人間になる事が幸せ」だと思っ

ているのだ。

喜びを分かち合うように……利用しようとか、思い通りに変えてしまおうなんて、悪意は一つもないのだ。

だから……ジャスマミンのような「心の匂い」は汚れない心地いい香りだったのだ。

その正体がベチャベチャの汚れたヘドロにまみれているとしても……

未来は耕太の手を振り払い、立ち上がった。

「未来、どうしたの……？」

屈託のない耕太……ジャーミス・ヘドロドロを前に、フィーリットステッキを握りしめる。

（このジャーミスは危険すぎる……

どんなフィーリットだって、こんなに綺麗な心の匂いには騙されてしまう！

だからっ！リリーやバナナが襲われる前にっ……！）

最後の力を振り絞って、フィーリットステッキを振り上げる。

ステッキは魔法少女の清廉な心に反応して、「心の匂い」を増幅する。

ダフネに似た香りを纏う未来の強力な力は、数々のジャーミスを葬ってきた。

「ごめんなさいっ……！耕太っ！！ここで決着をつけるっ！！」

フワッ……

ステッキから香ったその匂い……

嗅いだことのある……「素敵な香り」……

「これが……私の……匂い？」

ステッキに充滿しているのは、魔法少女本人の香りだ。

だがそれはいつものダフネの香りではなかった。

ジャスマミンだ。ジャスマミンに似た香りが……する。

耕太や立花と同じ……

「あ……ははは……」

未来は気付いてしまった。

耕太から離れたのは……自分の姿を彼に見せたかったからだ。

「ド……ドロオ……」

リリーやバナラの事を想ったのは……彼女たちにも「幸せ」になってほしかったからだ。

「ヘドロドロオ……♪」

「いいよっ、未来♪」

素敵な笑顔だ。自分が何をすべきか分かったんだね♪

耕太……ジャーマミス・ヘドロドロが未来の前に立つ。

未来がフィーリットステッキを振り上げれば、彼を倒せる。

だが……今の未来にはそんなことする必要がない。

したくもなかった。

今すべきこと……それは……

「ヘドロドロオ……♪私もおご主人様と同じヘドロ人間になれてえ……立花と同じ気持ちになれました♪」

ご主人様の奴隷戦闘員として、世界中の人間にこの喜びを伝えてあげたいです♪

そのためにまずは……」

ヘドロ人間に堕ちてしまった未来が語る暗黒の計画。

それをジャーマミス・ヘドロドロは満足げに頷き

ながら聞き入っていた……

——翌日——

「先輩っ！帰ってきてきたなら教えてください！」

もうジャーマミスを退治しちゃったんですね。

さすが先輩ですっ！！」

バナラが嬉しそうに、未来の部屋に飛び込んできた。

「いきなりは……失礼じゃない？」

ノックぐらいしなきや……嬉しいのはわかるけど」

部屋には未来と、リリーの姿があった。

二人も再会を喜びあったのか、手を取り合っている。

「す、すいません……」

つい嬉しくって……

でもこの香り……？二人とも匂いが変わりました？」

クンクン……

バナラは敏感に鼻を鳴らした。

「心の香り」は微妙な差異はあっても、劇的には変化することはない。

だからこそ気になってしまった。

「このジャスミンみたいな匂い……」

いい香りじゃないですか！

それに二人でお揃いなんてズルいです！」

未来とリリーはニヤッ……と邪悪に微笑んだ。口元から僅かに腐敗臭が立ち込める。

だが強烈なジャスミンの匂い……「心の香り」はそれを見事にかき消していた。

「ふふっ♪じゃあ……バナラもお揃いの「匂い」になってみる？」

「え？そんなこと出来るんですか？是非！是非っ！」

屈託のない笑みを浮かべるバナラは気付いていない。

ジャスミンに似た匂いの正体を。

（ヘドロドロオ……♪リリーと同じように唇を奪って？

いいえ、リリーもいるのだから、両耳からヘドロを流し込むのもいいわね♪

何にしてももう逃さないわあ……♪

バナラもご主人様の奴隷戦闘員に……私達の仲間にい♪)

先輩の心を支配する……ジャーマミスの企みが……その匂いに隠されていることも……

END

## さらなるスカウト

つー

再びの傍観者

久しぶりだね。初めての人もいるのか、なら改めて自己紹介をしなくてはならないね。私は、幾重に重なる世界の傍観者。私自身の興味を引くものには興味がない。とある世界で「悪堕ち」なるものを知り、興味がわいてきた。

前回は堕とす側と堕とされる側それぞれが目線で得た話を諸君等に伝えた。今回はその話の続きをお伝えしたいと思う。

今回も先に二つの分岐があったが、片方はどうも「悪堕ち」と呼ぶには物足りないものがあったのでそちらは割愛させていただくこととする。

さて、初めての人もいるようなのでここまでのあらすじを話そうと思う。

事の起こりは、異世界侵略企業「メイ・ワーク社」が進出したことに端を発する。それを防ぐと「ハロワ」より戦う力を与えられた女子学生朝比奈美輝は「ホーリー・シャイン」として、メイ・ワーク社の侵攻に対処していた。

ある日、メイ・ワーク社の戦いにクラスメイト「月見里月夜」が巻き込まれ更に正体がばれるという事態に陥ってしまう。以降、美輝は戦いのことを月夜に相談するようになる。

しかし、それにより彼女はメイ・ワーク社に狙われることになる。メイ・ワーク社幹部であ

る「トレーナー・レイコ」に目を付けられ、徐々に洗脳されメイ・ワーク社のチーフ「ブラック・ルナ」に変身することになる。

そして、シャインを欺きながら戦うことになる。

そして、月夜がメイ・ワーク社チーフ「ブラック・ルナ」であることをカミングアウトする。それに驚くシャイン、どう対応するのか……というところで、前回の話は終わった。

じゃあ、続きを始めよう。

※業務連絡 美輝（シャイン）の一人称は「ボク」に変更いたします。

――

「月夜ちゃん……、ウソでしょ？」

変わった姿の親友を見たシャインはあまりのことに驚くも、ルナは淡々と彼女の問いに答える。

「うそじゃないですよ。私はお姉様の手によって研修（洗脳）を受けた。メイ・ワーク社のチーフ。ブラック・ルナです」

あまりのことに攻撃の手が弱まるシャインに対し、攻撃の手を緩めないルナ。二人の戦いを眺めるレイコ。

「どうしました？ 友人じゃあ戦えませんか？」

いつの間にかシャインは防戦一方な戦い方になっていく。

「月夜ちゃん……、ボク……」

「本当に正義の味方って、愚かですよね……」

ルナの攻撃を受けすぎたせいかわかるとシャインは足下がふらついてきていた。

「月夜ちゃん……、もうやめよう……」

なんとかこの戦いをやめたいシャインはルナに問い続けるが、ルナはその気がないようだ。「シャイン、何度言えばわかるんですか！ 今の！」

「私は！」

「あなたのため！」

「敵なんですよ！」

一言ごとに力を加えシャインを攻撃するルナ。最後の攻撃である蹴りを素直に受けシャインは後方に吹き飛ばされる。

「どうですか？ 今の私はあなたの知っていた、か弱い『月見里月夜』ではなく、あなたを蹴り飛ばすことの出来る強い『ブラック・ルナ』なんですよ」

あえて、「弱い」と「強い」という単語を強調して現実を思い知らそうとするルナ。

「偽善な正義の味方さん。お別れです」

そう言ってさらなる攻撃を与えようとした瞬間、何者かの銃撃が側に当たった。

「そこまでです」

現場に近づく一つの影。白いスーツに身を包んだ少女が近づいてきたのだ。

「あなたの格好……、ハロワの人間だね？」

レイコは確認するためか、近づいた少女に問うた。

「はい、そうです。わたくしはハロワから参りました監督官『ミレイ・トキワ』です」

銃口をレイコに向けながらミレイと名乗っ

た少女はシャインとルナの間に向かう。

「ハロワの監督官様がなぜこんな所にお越しなのか、わかりませんが」

銃口を向けられたレイコは、とぼけたふりをして答える。

「わかっているんでしよう。メイ・ワーク社トレーナーのレイコ・マサキさん」

倒れたシャインをいたわるように、彼女が上半身を起すために手を貸す。

「協定で関係者以外の者を我々の戦いに巻き込んでほしくない。協定第一条に記されているはずですよ」

「この協定には『関係者以外』は巻き込んでほしくない」と記されている。確かにそうよ」

レイコの言葉に「ならば」とミレイが答えようとしますが、それに重ねるようにレイコは言葉をつづける。

「しかし、彼女はシャインの相談相手となっていた。関係者でなかったら相談なんて出来ないはずよ」

「論破したわ」と自信満々な顔をしてミレイをにらみつける。

「でもですね……」

なんとか食い下がろうとするミレイだったが、核心を突かれた事で反論するための材料はなかった。

「ルナちゃん、このままシャインへの攻撃を続けて。私はこのハロワのお嬢さんの相手をするから」

その指示にルナは「かしこまりました」と返事をすると再びシャインへの攻撃に移ろうと

した。

「待って下さい！」

「あら？ あなたの相手は私よ」

そう言うレイコはミレイへの攻撃を開始した。その攻撃は流石に幹部という地位にだけあって、蹴りやパンチなど状況に応じた方法を取った。

「お姉様、流石です。なら、わたしも」

なんとか立ち上がろうとしているシャインと決着を付けるためにルナは攻撃を再開した。

「攻撃が単調ですね」

ルナに向けられた攻撃はパンチをただ単調に繰り返すだけだった。

「まだ、本気で戦ってくれないんですね。残念です」

それに対しルナの戦い方は時にフェイントを挟んで順調にシャインの体力を削っていく。

「シャイン！ 今そっちに行きますから……」

「あなたの相手は私だって言ったでしょ」

なんとかシャインに近づこうとするミレイの行く先に先回りをしてレイコは阻止するよう蹴りを繰り返す。その蹴りを受けたミレイはシャインとは反対方向に蹴り飛ばされ近づくことが出来ない。

「ルナちゃん、シャインにトドメは刺さないでね」

意外な言葉にルナはレイコに真意を聞こうとした。

「なんでですか？」

「私の計画には、その子も必要なのよ」

「戦うことが出来ませんか、もう必要がない

のでは……」

すでにルナの攻撃によってシャインは明らかに息切れして疲れているように見える。

「もう一人手に入りそうだしね」

そう言うレイコはミレイを羽交い締めにし、戦闘員であるワーカーに目隠しと両腕を口で縛るように命令した。

「じゃあ、帰りましょうか」

レイコの言葉に頷き、倒れたシャインはワーカーに運ばれ、ミレイはレイコにロールを引張られ、その方向に歩いて行く。

――

彼女たちが連れてこられたのはもちろんメイ・ワーク社の隠れ蓑サツキ・ワーキングの現地事務所。

「じゃあ、『上上下下左右左右BA』っと」

秘密のパスワードをエレベーターに入力し、エレベーターは地下に向かって降りていく。

「じゃあ、彼女たちを研修用のイスに座らせなさい」

かつて月夜がブラック・ルナに改造されるために用いられたイス型の機械が今回は二台用意された。ワーカーによって座らせられる二人。「お姉様、美輝さんの家には私の家に泊まる事として、私の家には美輝さんの家に泊まる事と連絡しましたから警察への捜索願対策は大丈夫です」

今回は夜を徹しての作業になる事を察したのかルナは自身の家と美輝の家に連絡を取った事を報告した。

「流石、ルナちゃんね。私はハロワのお嬢さんの相手をするから、シャインはルナちゃんに任せるわ」

そう言ってレイコはミレイの目隠しを外し、機械に両腕と両脚を拘束する。

「これから、どうするんですか？」

目隠しが外されたミレイは現状を把握したのか、なんとかしようと身体を動かそうとする。「これから、あなたたちにメイ・ワーク社の研修（調教）を受けてもらうわ」

そう言ってレイコはミレイにヘッドホン一体型のヘッドギアを付ける。

「じゃあ、美輝さん。あなたも研修（調教）受けて下さいね」

ルナもシャインにヘッドギアを付けると側にあるマニュアルを見ながら機械の操作を行う。

「んー。数値の伸びが芳しくくないですね」

ルナの操作盤に現れたシャインの研修進捗率の伸びが芳しくなかった。

「……私は……、絶対……負けない……」

シャインの言葉には絶対に堕ちないという意志が見て取れる。

「お姉様、美輝さんの数値が伸びないんですが……」

ルナからの相談を受けたレイコはとある本の存在を思い出した。

「そうだ、ルナちゃん。いいものがあるわ」

そう言って、レイコは自身の操作盤にある、とある本をルナに渡した。

「これは、あなたの研修に役立ったシンクタン

クの報告書よ」

「墮悪開発機構ですか……」

レイコから渡された報告書の目次を見つつ今回のケースにふさわしいページを探していた。

「……あった」

そのページには『親友が墮とされて意気消沈した正義の味方を、自分の立場を使って墮とす方法』と書かれていた。

「えっと」

早速、そのページに書かれたことを実行に移すことにした。

「美輝さん、聞こえますか？」

ルナの呼びかけに「……あ、つくよちゃん……」とかなかな大きな声で返事をしたことで聞こえているとルナは判断した。

「美輝さん。私、強くなったでしょ」

「うん……」

自分の問いかけに一応の反応を返す美輝にルナは続ける。

「驚きましたか？」

「うん……、驚いた。ボク、やられちゃったね」

「でも、これは美輝さんのおかげですよ」

「ボクのこと？」

「そうです。美輝さんがホーリー・シャインであることを告白してくれたからですよ」

あくまで、美輝のおかげだと、まずは持ち上げる。報告書に書いてあるとおりに美輝に語りかける。

「でも、美輝さんは私を護ることで、私に優位に立とうとした」

「ち、違うよ。ボクは……」

「何が違うんですか？ 私を護ることによって、力の差を見せつけて優越感に浸っていたんじゃないんですか？」

そこから、いきなりたたき落とす。これによって墮とす側の言葉に耳を傾けるようになる。

「で、力のない私を護って、『ボク強ええ！』って満足していたんじゃないんですか？」

「ちが……う、ボクは……」

「でも、私はあなたより強くなれた。なぜかわかりますか？」

ルナの問いかけに「わからない」とシャインはつぶやき答えた。

「私には尊敬すべき敬う存在がいるからです」

「尊敬……敬う……存在？」

「そうです。美輝さんあなたが弱かったのは尊敬し敬う存在がいなかったから。そうじゃないですか？」

「でも、ボクには月夜ちゃん、そしてみんなを護りたいって思いが」

「で、その私を含んだ弱いみんなを軽蔑していたと」

あえて「弱い」を強調するようにルナは語る。「なら、美輝さんも尊敬し敬える存在を見つけてください」

「……尊敬し敬う……、誰を……」

「誰を？ わかりませんか？」

ルナは意地悪くシャインに問いかける。

「お姉様ですよ。メイ・ワーク社のトレーナーである、レイコお姉様です」

「でも……、メイ・ワーク社は、悪いところだ

つて……」

それでも自分の信念を曲げないシャインに尊敬をしつつも、なんとか墮とそうとルナの話は続いていく。

「そうですね。それなら、もう美輝さんは私より強くなれませんか」

ここで、更に追い打ちをかけるべくルナの話は続いていく。

「月夜ちゃんより……、強くなれない……？」

「そうですね。それまであなたに護られていた私が強くなったのも、メイ・ワーク社のおかげです」

この発言に操作盤のモニターに映るシャインの研修進捗率が伸び始める。

「メイ・ワーク社って……いいの？」

「いいですよ。私が推すんですから。それに、私は美輝さんと一緒にいたいんです。美輝さんはどうですか？」

「ボクも……、月夜ちゃんと……、一緒にいたい……」

シャインもルナと一緒にいたい思いをはき出し始める。

「でも、このままじゃあ私と美輝さんは敵同士ですよ。私はイヤですよ、そんなの」

「うん……、ボクも……イヤ」

ここで研修進捗率が九〇パーセントを超え始める。

「なら、美輝さんメイ・ワーク社に来ましようよ」

「……うん……」  
シャインのこの答えにルナは墮ちた事を確

信し、モニターの研修進捗率は百パーセントに達した。

「お姉様、ホーリー・シャインの研修は終了しました」

「ルナちゃんお疲れ様。こちらもなんとか終えたわ」

タイミング良くミレイの研修を終えたレイコはルナをねぎらう。

「一気に言うと研修直後は意識がもうろうとするから、しばらく置いておきましょう」

こうして二人の研修という名の洗脳は終了した。彼女らの意識が落ち着くまでイスに座らせ、二時間が経とうとしたときだった。

「う……ん……」

シャインが目を覚ます。それに気づいたルナは変身を解いた月夜の姿で彼女に近づく。

「美輝さん、目が覚めたんですね」  
「月夜ちゃん、ゴメンナサイ」

「なにを謝るんですか？」  
「ボク、月夜ちゃんにひどいことを……」

その先をシャインが言おうとしたところで月夜は人差し指を当てる。

「その先は言わなくて大丈夫ですよ。私、怒ってませんから」

その言葉に安堵するシャイン。

「今のあなたにはその姿はふさわしくないのではないですか？」

月夜に言われてシャインは自分の姿を確認する。

「確かにそうだね、じゃあ戻るね。ホーリー・シャイン、ゲットオフ」

変身解除のキーワードを唱えるとそれまでのホーリー・シャインとしての姿から女子学生朝比奈美輝としての制服姿に戻った。

「もう、これは必要ないですよね」  
月夜はそう言って、美輝の右中指にはめられた赤い宝石が収まった指輪を外す。

「それから、これが美輝さんの社員証です」  
そう言って月夜は『メイ・ワーク社 チーフ朝比奈美輝』と書かれた社員証を美輝の首にか

けた。

「美輝さんも私と同じチーフですね」  
「うん、これでボクはメイ・ワーク社の一員になるんだね」

「でも、まだまだですよ。今度はこれに着替えてもらいます」

そう言って美輝に手渡したのは月夜も着たことのあるボディースーツだ。

「これで、美輝さんの新しい戦闘服の採寸をします」

「ねえ、下着も脱ぐの？」  
「そうですね。そうしないとブカブカに採寸されて身体からずれ落ちてしまうかもですよ」

「それはヤダ」  
そう言って、月夜からボディースーツを受け取った美輝はこの場で制服を脱ごうとする。

「美輝さん！ そこに更衣室がありますから！ そこで着替えて下さい！」

月夜に強く言われた美輝は月夜が指さした部屋に入ってしまった。

しばらくして……

「うーん、月夜ちゃん。おかしくないかなあ……」

…」

着替えた自身の姿に美輝は少し違和感を感じているようだ。

「そんな事ないですよ。水泳の時競泳水着を着るじゃないですか。そんな感じですよ」

「そっか、そうだよね」

『競泳水着』という単語で納得するあたり美輝は運動少女だと月夜は納得した。

「じゃあ、これの中に入って下さい」

そう言って月夜は自身も経験した円柱形のカプセルを指さした。

「なんだか緊張するね」

「最初はそうですけど、入ってみるとお風呂みたいな感じがしますよ」

月夜の言葉に納得した美輝はカプセルの開口部から中に入り、呼吸のための酸素マスクで口鼻を覆うように装着すると開口部は透明なガラスで閉じられた。

「じゃあ、作業開始しますね」

月夜の時は戦闘に耐えられるための改造が施されたが、美輝はホーリー・シャインとして戦っていたこともあり肉体強化は最小限で済ませ、戦闘服のマーキングを行うことにしたので、月夜の時よりは短い時間で済んだ。

「美輝さん、終わりましたよ」

月夜の言葉に「終わったの？」と明るく美輝は答える。

「月夜ちゃん、今度こそこれでメイ・ワーク社の一員になれたんだね」

月夜が頷いたときレイコが研修を終えたミレイを連れてやってきた。

「これからはミレイには私の秘書を務めてもらうことにするわ」

「もう、ハロワに戻れませんし、それならレイコ様の一助になればと思いますよ」

そして、レイコは美輝に今の気持ちを聞く。

「美輝ちゃん、どうかしら？」

「はい。身体の異常はないです……、お姉様？」

「美輝ちゃん！ お姉様をお姉様と呼んでいいのは私だけです！」

美輝がレイコを「お姉様」と呼んだことで月夜の嫉妬心に火を付けたみたいだった。

「レイコ様、おモテになって……」

そんな二人のやりとりを見たミレイは冷静にレイコに突っ込んだ。

「早速、私に突っ込むとは良い仕事ね、ミレイ」

ミレイはレイコの言葉に「恐れ入ります」と丁寧に答えた。

「美輝ちゃん、ゴメンナサイね。わたしをお姉様と呼んで良いのは月夜ちゃんだけなの」

レイコのこの言葉に美輝は落ち込んだように顔を下に向けた。

「そのかわり、美輝ちゃんには『姉様』と呼んで欲しいんだけど……」

レイコの提案にすぐに美輝は反応を起こした。

「ねえさま？ わかりました、姉様っ！」

自分専用の呼び方を与えられた美輝は嬉しそうにレイコを呼んだ。しかし、自分の今の姿を思い出すと身体を両腕で隠す動きを見せた。

「あ、そうだ。今ボク裸だった……」

「ちょうど良いわ、早速制服（戦闘服）に着替

えてもらおうかしら。やり方は月夜ちゃんのを見たから、わかるわね」

「はい、姉様。じゃあ、見ていて下さいね」

早速着替えようとする美輝に月夜が待ったをかけた。

「美輝さん、いつそのこと私と一緒に変わりますか？」

「うん、わかった」

美輝は親友の提案に乗ることとした。

二人は背中合わせになると首にかけた社員証を手にとって、その手を前に伸ばす。そこにカードリーダーが現れそれぞれ、社員証を読み取らせる。

「出勤！」

そして起動コードである言葉をかけると月夜は青、美輝は赤の光が包んだ。

その中で、まずは服を着ていた月夜の衣服は取り除かれる。二人が裸となったところでまず髪型に変化が訪れる。月夜は編み込んでいた髪がほどけウエーブのかかったロングヘアに変わると紺色に髪が染まっていく。美輝はショートヘアだったのが一部が伸びるとツインテールに変わる。そして、毛色はえんじ色に染まった。

次は顔に変化が現れる。まずはアイシャドウが塗られていき、口紅が塗られると何だか大人っぽい印象を受ける。

そして、戦闘服が足先から装着される。まずは足から。ひざまで編み目の粗いタイツが履かされると月夜は紺色、美輝は深紅のブーツが履かされ、下腹部、上半身と扇情的な衣装が包ん

でいく。両腕をひじまであるアームガードが覆い背中まであるマントが装着される。その色はブーツと同じ色だった。

最後に両手の爪に赤いマニキュアが塗られ変身は完了する。

「メイ・ワーク社チーフ、少女戦士ブラック・ルナ！ 上司の命によりただいま出勤！」

ルナがいつも通り誇らしく名乗ったのとは逆に美輝はおどおどしていた。

「美輝さん……？」

「この格好で『ホーリー・シャイン参上！』なんて言えないよね……」

その発言にルナはハッと気づき、気まずそうにレイコの方を向く。

「ゴメンナサイね、美輝ちゃんの新しい名前教えてなかったわね……」

「姉様……」

気を取り直したレイコは美輝に新しい名前を教える。

「美輝ちゃん、これからのあなたは『ダーク・フレア』。そう名乗って」

「ダーク・フレア……、何だかカッコイイ！」

ルナが「仕切り直ししましょう」と言うと、フレアは素直にうなずいて二人はポーズを決め再び名乗りを始めた。

「メイ・ワーク社チーフ、少女戦士ブラック・ルナ！」

「同じく、メイ・ワーク社チーフ、少女戦士ダーク・フレア！」

「上司の命により、ただいま出勤！」  
最後はうまくハモリ名乗りはうまく終わっ

た。

「そういえば、お姉様」

「ルナちゃん何かしら？」

見事名乗りが決まったのでルナはあのときの発言について質問をすることに。

「私がシャインにトドメを刺そうとしたときに『私の計画』って言っていましたけれど、どういうことですか？」

ここまで来た、その集大成としてレイコはミレイ・ルナ・フレアに計画のことを話す。

「今ここにいるのは私が信頼を置けるメンバーしかいないから話すわね」

それは、自身の出世のために今まで上の理不尽な要求にも応えてきて今の地位があるという事をまずは話した。

「これから、上を目指すには手駒が必要なのよ」

「それが、私たちなのですね」

「そうよ、それにまだ私は末端の事業所のトップというだけだから」

レイコの話では、事業所のトップである「トレーナー」または「マネージャー」がおり、その上に地域を統括する「エリアマネージャー」

がいる。ここまですが地方組織で、その上に本社組織の「ディレクター」など幹部がいる。

「当面の目標は本社勤務で、いつかはトップである『プレジデント』に座る事よ」

「先は長そうですね……」

ミレイは長い戦いになる事を予測していた。

「大丈夫ですよ姉様！」

レイコを励まそうとしたのかフレアは元気に言葉を続ける。

「ボクもルナもミレイも姉様の味方なんですから」

それを聞いたルナも続ける。

「そうですねお姉様。フレアの言うとおりです」

「わたくし達、レイコ様に忠誠を誓いましたし、我らがリーダーの昇進のためならわたくし達は全力を尽くして参ります」

その言葉にレイコは不覚にも涙を流すことになった。

「あなたたち……、ありがとう……」

さて、その後レイコは本社勤務となり女性初の「ディレクター」に就任すると、さらなる昇進のために、かたわらに控える秘書の作戦を直

属の少女戦士が忠実に実行に移すことにより彼女の地位は上がっていく。後に『プレジデント・エンプレス・レイコ』としてメイ・ワーク

社の頂点に立つのだがそれはまたの機会に。

エピローグ

さてどうだっただろうか……、この報告書を楽しく読んでもらえたなら私も嬉しいよ。これでまた新しいケースとして我が「墮悪開発機構」

から報告が出来るといふものだ。私の興味からこの機構を作り上げたかがあるというものだ。

また、新たな話を手にし、機会が訪れたらお話ししたいと思う。

墮悪開発機構 創設者  
アクオチラーヴェ







「だろ？ お前の攻撃は私たちに通用しないって……」

「くっ……」  
元気な赤いヒロインの力強さに怪人は歯ぎしりをする。

ツインフレアが持つエレメントは炎属性を持つ。噴火した火山の跡地から発掘された炎のエレメントはマグマのごとく悪を焼き尽くす力を少女に与えるのだ。

一方、南極で発見された氷のエレメントを操るツインワールドも相方に劣らない力を持っていた。

「アイスストーンブリザード！」

ツインワールドが両手を左右に伸ばし氷のエネルギを全身から放出。すると彼女の周りに冷気が帯び始め、氷の粒が生成される。そして、それらを吹雪のように風に乗せて敵に向かって飛ばした。

「ぐぬぬ……こ、これは……」

破壊力こそないものの氷の粒が下級怪人たちの体に付着すると彼らをたちまち凍らせ氷像へと変える。

その威力は丈夫なボディを持つラバー怪人でさえ、身体の動きを鈍らせるほどだった。

「改造された生徒の皆さんのために手加減しました、生半可な威力では耐えられるようですね。さすがはA級怪人と言ったところですが……その気になればあなたを氷山に閉じ込めることだって可能ですよ」

ふふんっと得意げにワールドが笑みをこぼ

す。

怪人の体が徐々に氷に覆われてきたところでワールドは後ろにいる少女の方に振り向いた。

「大丈夫ですか？ お怪我はありませんか？」

「え、ええ……転んだ時にちよつと擦りむいちゃったけど、これくらい平気よ」

「そうですか。なら、そこで大人しく待っていてください。今、あの怪人にトドメを刺します！」

フレアとワールドが必殺技を撃とうと体を構える。

しかし、ミカは二人に待ったをかけた。

「待って！ あの怪人は……アタシたちの先生のなの！」

「え……!?!」

ミカの発言に二人は目を見開く。

頭に生えた二本の触覚と背中にある四本の羽、紅いシエルのようなものに覆われた瞳に漆黒のボディ……目の前にいる異形の怪物が人間だと知り正義のヒロインたちは狼狽える。

二人の動揺に怪人はクククつと不敵な笑みを浮かべ、ミカの言葉を肯定した。

「その通りよ。私は異次元帝国レイドに改造して頂き、この強力なパワーを手に入れたの。我が名は怪人ラバーモス！ あのお方の命を受け、この学園を支配するのが私の使命……！」

「先生……」

教え子たちを容赦なく怪物に変え今度は自分もその一員に取り込もうとする女怪人。恩師

の醜き変貌にミカは瞳に大粒の涙を溜める。

ツインエレメンツも、怪人を倒さなければならぬとわかっていながらも元人間を相手にどうすればいいか戸惑っていた。

「お願い、先生を元に戻して！」

「そうしたいのはやまやまですが……」

「一度怪人にされてしまったらもう人間には戻せないんだ……」

「そんな……!」

人間の邪念を抽出して生み出されたのであればその怪人を倒して終わりだが、怪人の素体として改造されてしまっただけはどうしようもない。

自分たちに縋る少女の願いを叶えることはできないとどう伝えるべきか一瞬、二人の意識が怪人から逸れる。

その隙をラバーモスは見逃さなかった。

動きが鈍る腕を上げ正義のヒロインに不意打ち攻撃。拳を筒に変形させ内側から黒い塊を発射する。

「隙あり！ ラバースライムダブルショット！」

「し、しまっ……ングっ！」

「きゃあああ……!」

顔面に黒いスライムが直撃。ワールドは顔の上半分だけだったが、フレアは正面から受けてしまい顔の形がくつきりとラバーに表れていた。

黒い粘液を引き剥そうともがく二人だったが、ラバーが取れるどころかそれが手にも広が



「このままでは三つともエレメントが怪人の手に……早くこんなところから脱出しなくては！」

幸いにも彼女はヘルメットが取れただけで、まだ変身が解けたわけではなかった。スーツの腕輪にセットされたエレメントもこの通り、コールドの身体から離れていない。

「フレア、今助けます……！」  
足場の悪い床で何とか体勢を整え、右足を一歩後ろに下げる。

氷のエネルギをフル稼働させコールドの周りに冷気を発すると、力の余波で彼女の青い長髪が激しく揺れた。

「ちよつと痛いですけど我慢してくださいね。アイスニード……！」

ラバー繭をツララで破壊しようと溜め込んだ力を開放しようとしたその時、ラバーでできた地面から黒い腕が伸びてきた。

黒い腕はコールドの右手首に巻き付き、彼女を床に倒そうと下に引っ張る。反対側の手も同じようにラバー腕に掴まれるとコールドがバランスを崩す。

それでも何とか立っていると今度はラバーが彼女の拳を包み込んだ。  
「これでは必殺技が……！」

試しに力を開放するも拳を覆うラバーにトゲのシルエツトが現れるだけでコールドは拘束から逃れることはできなかった。必殺技のエネルギを吸収したラバーがさらに拡大、彼女のスーツにびっちり密着した。

黒いラバースーツに締め付けられるコールド。また頭まで黒い塊に飲み込まれるかと思われた矢先、ラバーは違う動きを見せる。

変身スーツと首元の隙間をラバーが強引にこじ開けズルズルとスーツの内側に入り込む。

青い変身コスチュームが姿を現すと同時にそれが膨張、蠢きながら彼女の意思に関係なくスーツを脱がせた。

さらに器用にスーツからブレスレットを外すとエレメントチップだけを回収する。

「ああっ……！ 私のエレメントまで……！」  
戦う力を失ったコールドの体がラバーと同化。そこへ全方位から彼女を包むものと同じものが大量に発射される。

彼女の体に付着したラバーは巨大な繭を作り始めあつという間にコールドの顔以外を覆い尽くした。

「あぐっ……！ このままでは私も……ムグッ!?」

壁に穴が空きそこから怪人の腕と同じアーム砲が突出する。そこからラバースライムが放たれ彼女の顔を黒い粘液で塗りつぶした。

「んぐうううう……！ ん、ンン……ググッ……！」

(い、息が……呼吸ができない……！)

全身が繭そのものになったかのような感覚で手足を動かすこともできないままコールドの意識が薄れていく。

(も……ダメ……意識が……)

フレアにそっくりな白目を剥いた表情で顔を固定されて気を失ったコールドが繭の中で肉体をラバー怪人に作り変えられていく。

正義のヒロインを飲み込んだラバー繭が二つ、彼女たちの敗北を惨めに晒すように並んでいる。

しばらくして繭の下が極端に柔らかくなる。彼女たちは繭に包まれたまま床下へと沈んでいくのだった。

\*\*\*

「ふふつ、氷の力もこの通り……ハッ！」

コールドが持っていたエレメントも吸収した怪人が手を前に突き出すと氷の槍が生成される。指の数だけ槍を作り同時に発射すると地面に溶けないツララが刺さった。

それを今度は火の玉でまとめて蒸発させる。

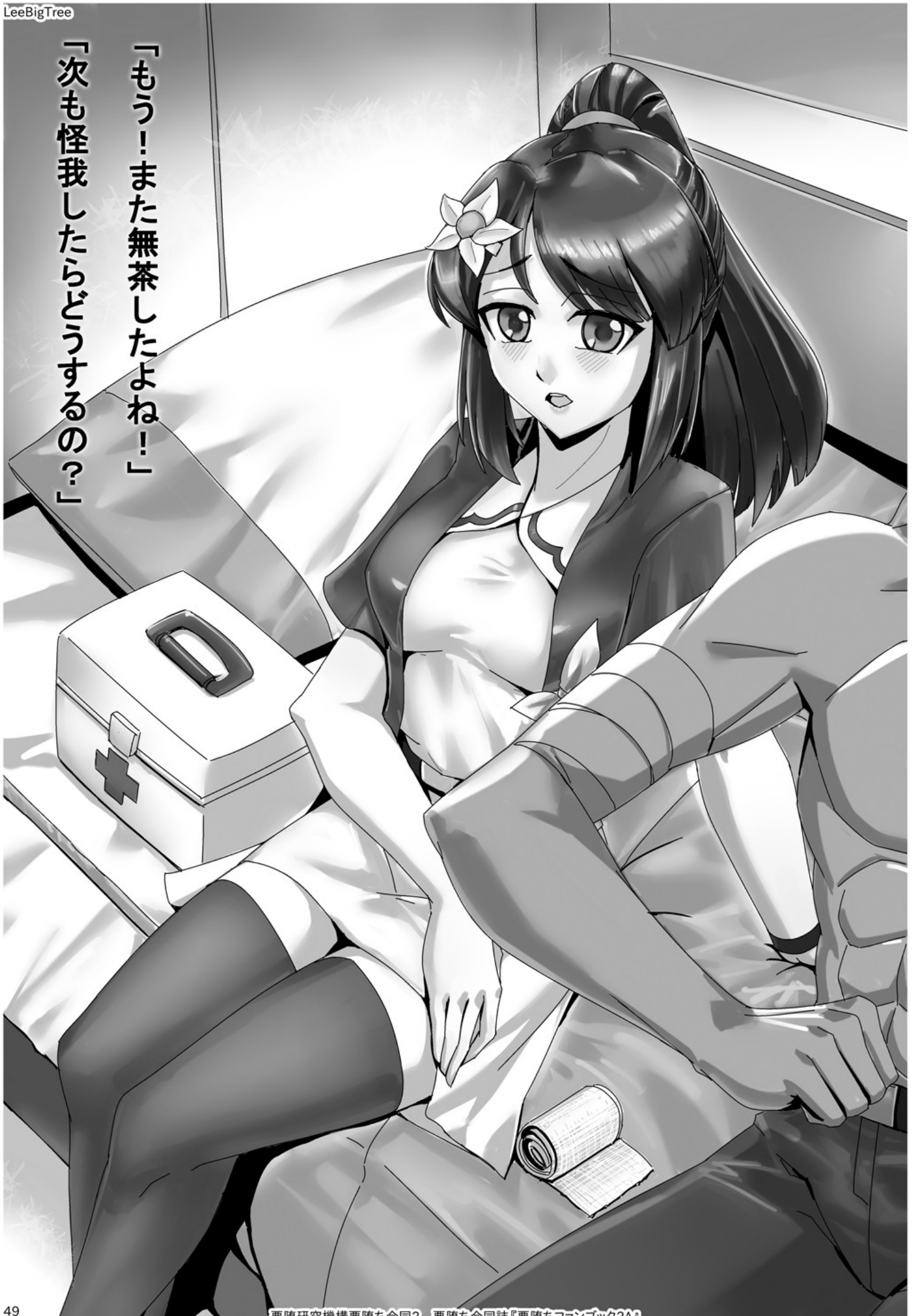
「炎のエレメント、そして氷のエレメント……んふふ、だんだん力のコツが掴めてきたわ。どうかしら、この力……素晴らしいとは思わない？」

正義のヒロインから奪った能力を使いこなすラバー怪人がかつての教え子に勝利の微笑みを見せる。絶体絶命のピンチに絶望するミカは何も言えず怯えることしかできなかった。

渡り廊下の四隅で縮こまる彼女にニタリと口端を曲げるラバーモス。女怪人が喉をググつと鳴らし唾を吐くと一緒にその口から体液まみれになった赤と青のスーツが吐き出された。

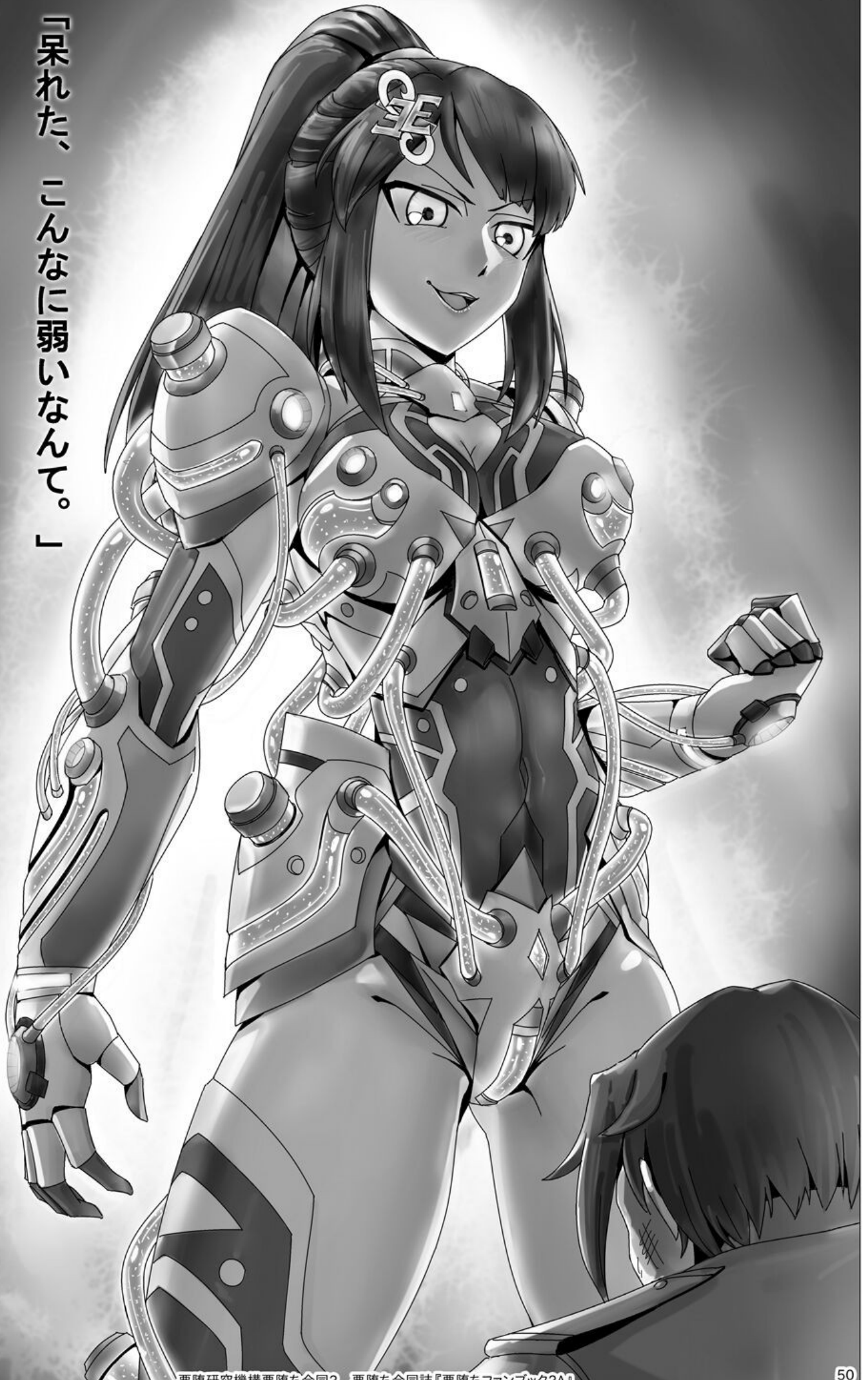


「もう！また無茶したよね！」  
「次も怪我したらどうするの？」



「呆れた、こんなに弱いなんて。」

「それでも組織に逆らうのは、相変わらず愚かね。」





## File. 1

神原理恵（21）、大学生。

心優しいが意志は強く、  
そして強健な体を持つ。

しかしその強さは、  
彼女を呪いのように  
最悪の結末へと導く...

記者の彼氏がいる。

彼は今、ある新興製薬会社  
“E.E.”の裏の姿を追っている...

## File. 2

〔日誌1〕

... 試験体G969、  
肉体と精神力はともに最高レベル。  
... 試験段階に移行。

〔日誌2〕

.. 結果は想像以上だ。彼女の体は、  
強化の反動を耐えるだけでなく、  
精神面でもギリギリを保っている。  
... 洗脳段階に移行。

〔日誌3〕

... 本当に素晴らしい！  
洗脳の副作用も残っていない。  
... 彼女は今、我々の真の同志、  
そして最高の兵器に生まれ変わった。

... 総裁自ら  
彼女に新しい名前を与える。

イヴ-我々を造る最高の造物。

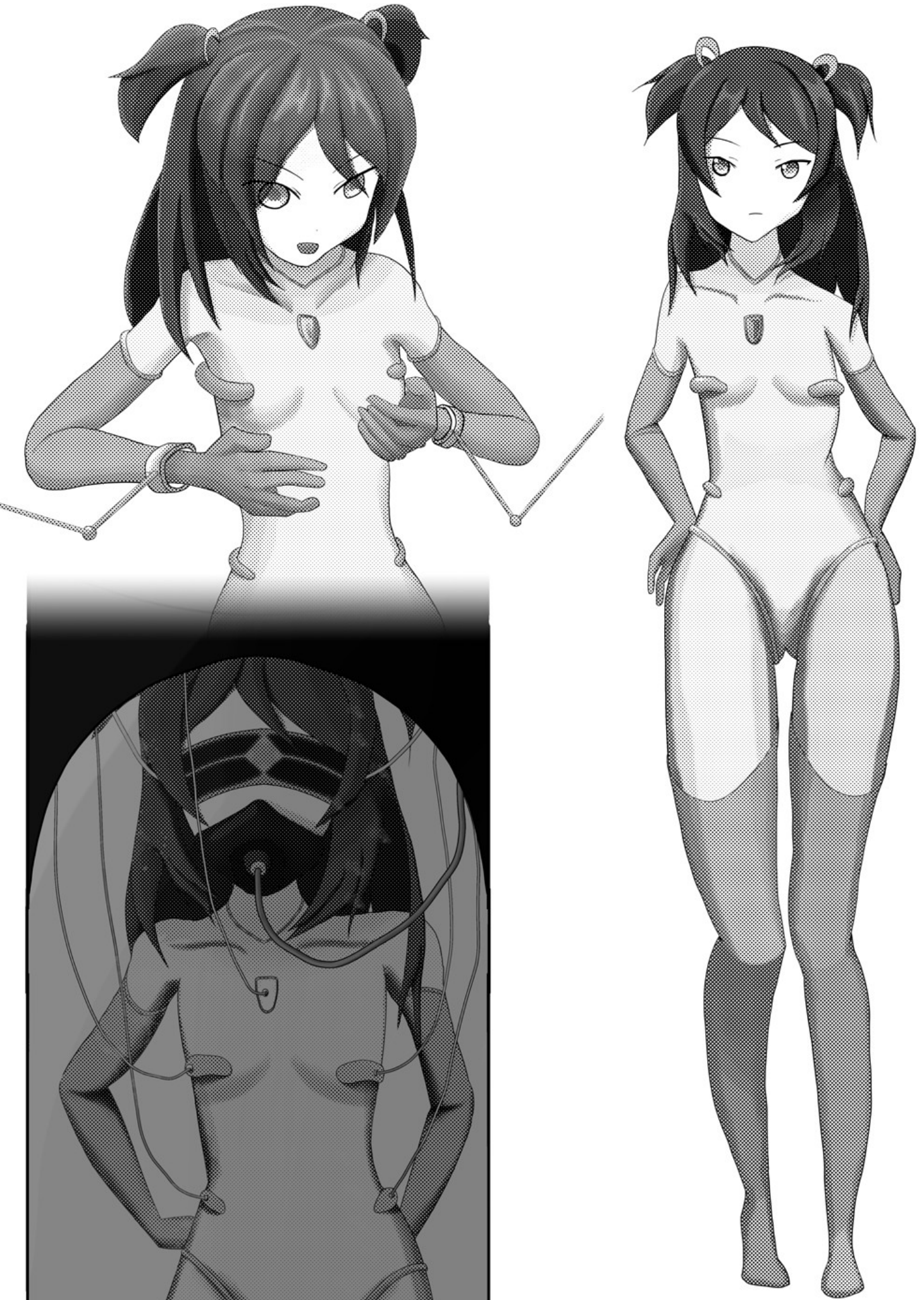
## File. 3



Extreme Evolution (E.E.) -  
表向きは新興の製薬会社だが、  
裏では「医学で人間の力を限界まで  
引き出し  
そして劣った人間を淘汰する」  
という過激な思想を持つテロ組織。

研究の名のもとに、  
様々な非人道的な実験を行う。  
生き残った“優れた人間”を  
E.E.の一員に迎える。  
組織の私兵は  
その強化人間達で構成されている。

ある日、新たな女幹部が着任した...



ここが潜入先か……

私、エージェント・カナミの今回の任務は敵対組織であるテムリャヴァの本部に秘匿されている秘密兵器に関する情報をスリテツァ本部に持ち帰ることね

噂では聞いていたけど、ほんと暗くて趣味悪いったらありやしない……さっさと奥に行つて目的のブツを入手したら退散するとしましょうか

……っ！見張りか、こことは別のルートだと、あっちが使えるはずね

事前に本部の全貌はある程度掴めているとはいえ、やっぱり人の巡回情報が得られなかった分見回りは気にしないといけな……

ん？今何か光って……まずい！レーザーで検知するシステムか！まだ周囲に人がいないからまずはここから離れないと……しまったロボットアームが腕に巻き付いて……このっ！離しなさいって！！うわっ引っ張られる！腕痛い痛い痛い痛い！引きずられる！

止まった……けどどこどこだか分からないし狭いし閉じ込められたのかしら……どうやらガラス張りで前は見えるみたいだけど気色悪いわね……ちよつと！何か霧みたいなのが……まずいこれ吸ったら間違いなくよくないことになりそうな気がするけど……息が苦しくて……意識が……遠く……

……

……

…

———調整装置、起動。

これより被検体01の調整を開始します。

被検体01への身体調整液投与管の接続——各部位へすべて接続。

被検体01への精神調整液噴霧装置——接続。

調整装置内の羊水注入——完了。

被検体01の精神へのアクセス——完了。

これより被検体01の精神調整を行います。

テムリャヴァへの忠誠確認——拒否。

記憶改変による忠誠プランに入ります。

被検体01へ電気パルス付与——完了。

被検体01の記憶消去進行率——20%。

過去の記憶に対する応答——被検体01の反応を確認。

記憶消去を続けます。

被検体01の記憶消去進行率——60%。

所属組織に関する記憶応答——不明瞭。

テムリャヴァ代表を提示——拒絶。

電気パルスの電圧を強化します。

被検体01の反応衰弱を確認。

被検体01の記憶消去進行率——90%。

自身の存在理由への応答——なし。

テムリャヴァ代表による接触を再現。

徐々に電気パルスの電圧を弱めます。

被検体01の反応——良好。

テムリャヴァへの忠誠確認——沈黙。

これより調整した記憶の返還を行います。

所属組織のテムリャヴァへの変更——

完了。

存在理由をテムリャヴァへの貢献に書換——完了。

元所属組織への敵対心刷り込み——完了。

テムリャヴァへの忠誠確認——同意。

精神の調整が完了しました。



これより身体の調整に移ります。  
被検体01のガジェット破壊——完了。  
被検体01の衣装抹消——完了。  
テムリャヴァのエージェント装備の着用  
を行います。  
防弾・防刃衣の胴体装着——完了。  
プラズマ弾発射回路付手袋の装着——  
完了。  
高速移動仕様脚強化被覆の装着——完了。  
感覚拡張装置の脊椎への接続——完了。  
バイタル測定用胴体ガジェット装着——  
完了。  
管理用首輪型装置の装着——完了。  
ガジェットと被検体01の意識のペアリング  
——完了。  
下腹部への印章刻印——完了。  
首輪装置への認識番号の印字板の設置——  
完了。  
元組織への救難信号の発信——完了。

被検体01の全調整が完了しました。  
これよりSLAVE-01: カミとしてテムリャヴァ  
のエージェント活動に従事します。  
被検体01の忠誠を再度確認——完了。  
任務「元所属スリテツツァへの反逆」を  
指示します。

...

.....

.....はい♥

本当に私の救難信号を真に受けちゃって、  
あんなの普通は罨を疑うものなんですけど  
.....♪

はい、私はこの任務中に幸運なことに罨  
にかかって、秘密兵器によって「調整」して  
頂きました……今の私はテムリャヴァ所属  
SLAVE-01のカミです♪

愚かにもテムリャヴァに楯突いていた私は  
調整装置に入れて頂いて、これまで私が犯し  
ていた過ちを知ることができたんです

ええ、勿論記憶は残ってますよ？代表様は  
記憶を完全に消さず、それまでスリテツツァ  
にいた私を受け入れてくれたんです……本当  
に慈悲深い方ですよ？

この服もテムリャヴァのものを着けて頂い  
て、これまで以上に力を感じますし、代表様  
に認めてもらったことが動くたびに感じるこ  
とができて胸が高鳴るんです

もう本当にどうしてこんな素晴らしい組織  
に反抗していたのか馬鹿らしくなっちゃいま  
すね♪

じゃあ、新たに私が得た力であるプラズマ  
弾で葬ってあげますね、まだ会得して間もな  
いので強すぎるかもしれないですが……まあ  
痛みを感じる時間がない訳ですから、私から  
の情けになりますよね？

さよなら、テムリャヴァの威光をあまねく  
世界へ広めるための贄になりなさい

私の全ては、「テムリャヴァ」のために♪

## 死は救済ではない

桜勝優也

あなたは夜中にラーメンを食べたことはありますか。

私があります。これがたまらないですよ。私はずいっと麵をすする感触。心が洗われる気分になるの。

実際は胃の中もゼーんぶ油でギトギトに汚れてるんだけどね。心も汚れてる。けれども清々しいの。

ケタケタ。  
笑うな気持ち悪いですって？ ふふ、そんな生意気を言っていられるのも今のうちよ。私の甘い誘惑の前には耐えられないんだから。

そういうえい何話を話していたかしら。そうそう、ラーメンの話ね。

全部胃の中に収めたころには短い時計の針が右上で止まっているのを見て思うの。「またやってしまった」って。けどそれがいいのよ。美味なの。太るのが確定なのにやめられないの。

やったことない？ じゃああなたは誰もいない信号を無視したりはしないの？ 一応左右を確認してみるけど人っ子一人いない信号を渡る。社会のルールを無視するこの感じ、好きにならない？

それこそわからない？ あら、ラーメンは信号よりは共感してくれるのかしら。

え、こんな茶番を話してないで正々堂々と戦えですって。えーっとお……私の計略にまんまと嵌って捕まったあなたが悪いんですよ。

あなたとは『ここ』の出来が違うんです。頭です。わかりますか？ ばーか、ぎーこ、まぬけー。

ケタケタ。

「くっ、だったらそろせえく？」うーんそれはできない相談ですねえ。だって、天使のアームスファイアの技術の神髄を何もしたくないのはもったいないですから。

いやー、それにしても壮観ですね。数々のライバルであり同胞を打ち破ったチエルサンストのリーダーが四肢を鎖に繋がれて「くっころ」って言っているんですから。あれですよ、俗にいう生殺与奪の権を握られているってやつですよ。ああ、無常。諸行無常の響きあり。

あなたは私の思うがまま。今からあなたには悪の楽しさを知ってもらうんですから。決して悪には屈しない？ みんな最初はそう言うんですよねー、口を揃えたように。あなたの部下のサーベリーちゃん？ あれがあなたを後ろから切りかかった時はもう全身がぞわつとして、ああ、あの子も染まってしまったのね。かわいそうって……とつてもうれしくなったわあ。あなたたちエンジェルシスターズはみんな人間を依り代にしていますから、人間の悪い部分をちよこつといじってやればだいたいみんなコロツとイっちゃうの。

まあまあ、そう怖い顔で睨まないで。ほら、息をゆっくり吸って、吐いて。落ち着いて。なんだかい匂いがしない？ もうそろそろアロマで焚いておいた薬が効き始める頃合いだと思っただけ。あなたとお話したかったのはその待ち時間。

眠くなってきたわね。この匂いはあなたの心

を解放するための薬なの。ねえ、ふわふわして。いい匂いがして気持ちいいでしょう。さあ、目を閉じて、自分の心の中を見つめて。そこは暗い暗い場所。けど、そこにいると居心地がいいの。心が深い、深い、ところへ沈んでいく。沈めば沈むほど心地よくなっていくわ。五つ数えると心の奥底までたどり着ける。そこはあなたが一番落ち着く場所。

五、四、三、二、一……はいっ。

これで見栄も立場もない素直なあなたと話せるようになったわ。

顔がだんだんやさしくなってきたわね。まさに天使の顔だわ。わあ、触るとお肌すべすべね。かわいいわあ。

スリスリ。

ねえ、早速だけどこれを見て欲しいの。地上のリアルタイム映像よ。面白いことが起こっているから見て。あ、映った。これはあなたが人間天使として存在していた場所。あそこにいるのは天使排斥運動家の方々ね。あら、誰かに追い詰められていますよ。行き止まりに追い込まれて斧とか持っている人たちに囲まれてかわいそう。ちよつと何を話しているか聞いてみましょうか。

ふむふむ、どうやら天使であるあなたがいなくなることによって私たち悪魔があの地上へ侵入した結果、天使排斥運動家の方々には責任を押し付けられたのですね。こんなことになったのはお前たちのせいだと。愚かですねえ、愚か。あの人たちは天使のいる空へ届きもしない石を放っていたせいで、それが自分の身に降りかかっている。何も知らなかった原因をあの人たちに

なすりつけている。今こそあなたが常日頃言っていた一致団結せねばならぬ時だというのに、こんなことをしていいんですかね。

あら、やめると叫んで泣いている声が聞こえる。感心ですわ。あんなにひどい目に遭っている、まだ心の底から他人の命の心配ができるのね。あんなの私が公園で踏みつぶしていた蟻以下の存在だというのに。

いいでしょう。やめさせてあげましょう。レッツゴー、やっておしまい使い魔ちゃんたち。

これで天使排斥運動家は殺されなくなりました。それ以外のそこにいた人は全員死にましたけどね。

ほんと、絶望するのが得意ですね、あなた。単純なトロッコ問題ではありませんか。一方を止めれば片方が生き残らない。それだけのことです。天使と悪魔の存在が相反するように、あの人たちも相いれない水と油のような存在だったのです。一緒に虫かごの中では生きてはいけない哀れな存在よ。その頭が悪かったからのうとうと生きてこられたのよね。本当に羨ましい。ケタケタ。

使い魔ちゃんに頼んで天使排斥運動家を連れてまいりました。

あなたが選んだ命です。好きにできますよ。

ほおら、あなたの目の前の人間はあなたに罵詈雑言を放った人間。今は恐れて言葉を失っているけど、自分の身の安全が保障された途端、きつと、あなたを追い詰める。さつき自分が追い詰められたみたいだね。今度は、今度も、自分たちがこんな目に遭ったのはあいつ、天使のせいだってね。

だから、私からの提案です。あの人たちを殺しましょう。自分に危害を加える者は殺してしましましょう。

そんなことはできない？ ずいぶんと意思の固い人ですわねえ。いや、天使らしい石頭ですかね。いいですか、あなたは人を殺めてはいけないうえにそう思っているのかもしれないが、なにも肥溜め以下の人間まで守れというわけではありませんよ。それに人を殺めることは楽しいことです。ええ、最初は罪悪感を覚えて耐えられないでしょうねえ。いいのよ。今はそれで。あなたの言う通りです。人を殺めることは悪ですから。やってはいけないことです。人間の法律で定められていることです。種の繁栄という行為から遠ざかる行為です。

でも、生きとし生けるものを蹂躪する。これは最高の快楽であり、悪ですよ。

ねえ、やってみましょう。今、目の前にいるのは最低最悪の人間ですよ。ほら、立ち上がって、武器を持って。おっと、私が破壊したの忘れてましたわ。特別にこの鎌を貸してあげましょう。振りかざせば一発で人の首を刈り取れる優れものですよ。

さあ、さあ、やっちゃえ。

ザシュ。

いいですわ。最高ですわ。殺した人間を見下ろして、わなわなと震える姿。黒く染まっています。あなたはもう戻れません。

ねえ、もうここまで来たらとことんまで行ってしましましょう。

大丈夫。私が一緒よ。

あなたの全てを受け入れてあげる。さあ、ゆっくり息を吸って。吐いて。落ち着

いた？

まだ震えが収まらない？ 大丈夫。私がおまじないをかけてあげる。

五つ数えると、収まるわ。そして、あんな人間の奴らなんか殺しても何も思わなくなる。むしろ楽しくなる。

五、四、三、二、一、はい。

いい顔になったわね。そのとろとろで笑って、悦楽に浸った表情。白の羽が漆黒に染まるこの瞬間。いいわあ。私そんなあなたが大好き。私があなただを愛してあげる。墮天使としてね。

さあ、一緒に行きましょうか。悦楽の虐殺に。人間も、天使も、何もかも殺しくしましう。

こんにちは。まだそんなところに生き残りがいたのね。

あら、私のことをまるで知っているような素振りね。ああ、その名前は捨てたの。今の名前は悪魔の名前よ。今から死ぬあなたに名乗るものではないけれど。

さあ、剣を抜きなさい。最後の稽古をつけてあげる。

どうしてと叫んでも無駄よ。私は見初められたの。見て。この黒い羽、きれいでしょ。

あなた、私のこと知っているの？ そう、もう少し今の私と会うのが早ければきつと仲間になれたでしょうに。うーん、ざんねーん。

ほら、腰が引けて剣が震えている。しつかりとしなさい。それでも私の部下だった者の姿かしら。情けない。

ええ、あの日あの人を私を生まれ変わらせて

くれたの。ああ、人だったものが、天使だったものが剣に刺されていくのはとても……：たまたまないわ。

あなたのその絶望する表情をみただけでゾクゾクするの。ああ、いいわ。そういえば、思い出してきたわ。私はあなたを助けるために自ら囚になった。生き残ってくれたのねえ。うれしいわ。あなたはいつも仲間思いで、みんな助けて、仕切って、そんなあなたならここを任せられると思ってたわ。よろしくやってくれていたように何より。

天使に戻って欲しいですって？ いいえ、この涙は天使のものではないわ。あなたたちを私の剣で串刺しにできる、悦びの、悪魔の涙よ！

ほら、叫びなさい。そしてそれを助ける仲間を呼びなさい。どんどん湧いてくるわね。犠牲になる天使が。何も知らない無垢なあなたは何もできないわ。それを思い知りなさい。

ああ、脆いわねえ。人間ならもうとつくに終わってるからむしろしんどいと言うべきかしら。異常？ いいえ、私は正常よ。むしろ前が異常だったの。他人を守ることには何の意味があるの。弱いあなたを守って何になるの。強い者は強い者で生き残るべきなのよ。弱者がどれだけよってたかったって所詮は鳥合の衆。その抵抗は蟻の斧にしか過ぎないのよ。

ケタケタ。  
ちよつと長く話し過ぎたかしら。それじゃあ、さようなら。

……ああ、いい音。人間であったものが、天使であったものがそこら中に散らばっている。

なぜこんなにも弱くて儂いものを私は守っていたのかしら。とても愚か。愚かね。

ああ、もっと白い雨を降らせて。空を黒で覆いつくして！

凄い、神が陥落する。天と地が入れ替わる。地獄の扉が開いて地上に災厄が溢れてく。

命が、命だったものも跡形もなく消えていく。うれしい。うれしいわ。

ケタケタ。

さあ、大邪神様降臨の準備をしましょう。あなたと、あなたと、あなた！ その首を天に掲げて歌うの！

さあ、吹きすさべ空よ。荒れ狂え、海よ！ 震えろ大地よ！ 生きとし生けるもの全てに災厄を与えしその御姿、私たちの前に現れよ！

ハハハ。

ああ、誰かと思えば久しぶりね。悪魔さん。先日は私に悦楽を教えてくれてありがとう。もうすぐ大邪神様が復活するわ。これでこの世界は全て大邪神様のものになる。全ての弱き者はいなくなる。最初からこうすればよかったのね。けど、少しだけ残念なのはもうあの断末魔は聞けないのね。それだけが残念。えっ？ まだ残っているって。あっ、あなたのその悪戯な笑みでわかったわ。そうよ。そうよね。私は、私たちは元々天使だったものね。

私を仲間にしてくれたのは私があまりにも何も知らなかったから。先に全てをあなたは知っていたのね。それを親切にも私に教えてくれた。あら、急に抱きしめてどうしたの？ 嬉し泣き？ うんうん、これで私たちは呪縛から解放されるものね。

元はと言えば人間だったものに天使の器を与えたのが間違いだったのよ。神様はそれで悪魔に対抗しようとしていたけど、私たちは天使で

あったがゆえに人の醜さを知ることができなかった。石を投げられても投げられたことさえ理解できない愚か者だったの。

けど今は大丈夫？ そうね。あなたのおかげで全て知れた。この世の真理をね。ああ、世界が黒く、潰れていく。私たちを虐げるものはもうなくなったの。

……

ああ、大邪神様が大きなお口を開けたわ。すごく綺麗。私たちの羽よりも黒い、どこまでも純粋な黒。まずは私たちの実体という名の器を捨てましょう。

私の天使だった部分が、世間知らずで愚かだった部分が断末魔をあげるのがわかるわ。あなたも？ うれしい。この悲鳴は今の私にとって、私たちがとって最高に気持ちがいいものね。

ありがとうございます。大邪神様。私を受け入れてくださって。私を煩わせるものはないの。あなたとも繋がれて、とても気持ちいいわ。とっても気持ちいい。

周りは真っ暗だけどみんないる。みんな繋がっている。この深い闇の中で漂い続けるの。何も考えなくていいこれからは。

今日はもう疲れたわ。眠ることにしましょう。いえ、そもそも寝ることができるのか、もしかしら永遠に目が覚めないかもしれない。むしろその方がいいわ。大邪神様の体の一部に完全になれたってことだもの。

フフフ。

最後にお礼だけ言わせて。私を救ってくれたあなたへ。

ありがとう。  
そして、おやすみなさい。







## 黄泉路の彼方より

波多野奈津目

この閉鎖空間に拉致されてどれだけ経つだろう、と雲龍カナタは呟いた。コックピット内の計器に標準時を表す時計はある、だがそもそも時間の流れが通常と違う異次元の侵略者の本拠地だ。

「腹減った……」

居住性は悪くない。空気は特殊な機関でほぼ無限に新鮮なものが循環される。水も生成出来る——これは有限だ。ただ、何より困っているのが食料だ。備蓄の非常食は八割方を付けた。カナタは十三歳の育ち盛りで、栄養素はともかく質量と味の面において大いに不満がある。

暫定呼称、ヨミ。意思疎通は取れないが攻撃的であるのに間違いはない、地に突如あく大穴から現れる、機械生命体群。地獄というのが案外住みやすいものであったり、神罰で落とされると定義されるものであったりすることで国際的呼称で割れて、日本人の宗教観なら問題はないだろうと押し付けられたのだというが、厄介な名を付けたものだと思う。

「ヨモツヘグリって言うもんなあ……」

対抗する人型機動兵器には各国好きな名を付けている。花や宝石の名を付ける国もあるのだという。そして日本は当然のごとく記紀神話にあやかっただ。カナタを守るこの機体はイザナギ、日本の持つ機動兵器群の中でも最強の部類

に入る。ヨミに対抗出来るのは子供の持つ未来に向かうエネルギーなのだという。非人道的ながらそれ以外に対抗手段のない現状。カナタは総理大臣の孫で、何より適性がありチームをまとめてきた。ただ戦闘終了直後の隙を突かれここに落とされ、時間の感覚がおかしくなり体調も、精神状態も安定しない。そして言霊を守るのは大事だ、とモニターの向こうに映る瑞々しい桃を睨む。それが真実、秋の味覚でカナタの好物の桃であるかは非常に怪しい。

「奴ら、俺を連れてくるだけで何もしねえし。イザナギが怖いのかもだけど。だから、俺がくたばるのを待ってるんだ」

カナタは反抗期でもあり、少しばかり口が悪い。己を鼓舞するため強い言葉を使う。ヨミの雑兵がカサカサと這い回っているのは確認できる。イザナギの装甲は雑兵では食い破れない。しかし脱出の当てはなく、激しく動かせばカナタも消耗する。だから静かに消耗を防ぐ。侵攻の際に通常空間への穴が開くはずだ。その時を待つ。ただ孤独はしみる。弱気だが優秀なパイロットのレン、トリガーハッピーの悪癖はあるが普段は気遣いの出来るマコト、パイロットになっただばかりだが既に頭角を現しつつある従妹のハルカ。それに——とにかく、恋しい。人間らしい食事に友達。サポートメンバーの大人。そのためにイザナギを駆る。いくらでも意地を張る。

「計器、異常なし」

定時に声を上げて指差し確認。ただ、これが

何度目なのかは既に把握出来ない。シートを倒しモニターを現時刻の星空に変える。パイロット保護モード、緊急事態においてその精神の均衡を保つための措置が複数用意されているうちのひとつ。星座を追っているうちに深い眠りに誘われ、心身を強制的に休ませる。この眠りに夢はない。脳の疲労時に、余計な演算は取れないようにしている。

故に。

カナタの操縦を受けないまま、イザナギが穴を通り地上へ舞い戻るのは、現実に起きたことだ。大量のヨミの尖兵を伴い、自らの太刀で建物を薙ぎ払う。

悪夢のような現実だった。

目覚めたカナタは拘束に気付いた。操縦桿から指が離れない。吸い付いて、カナタを逆に操り機械神は踊る。

「カナタ、答える！ 何でこんなことを！」

呼びかける声に思わず逆上した。自らの意思でこの破壊を行っている、そう断定し糾弾している。ようやく会えたと思えばこれだ。

「んだとおっ!? レン、俺が！ 自分で！ コレをやっているように見えるのかよッ!! イザナギのコントロールが奪われたんだよ！」

カナタもまだ状況が飲み込めていないが、こ

れだけはわかる。イザナギの解析が終わったか何らかの処置をしたか、カナタを単なる燃料タンクにしてヨミの力として振るわれているのだと。

「！、そんなつもりはないよ。だって、ずっと答えないから……でも、イザナギを動かせるのはカナタだけだし……！」

レンのスサノオと罅迫り合いをする。渡り合っている。単にコントロールを奪われただけならレンとはやりあえない。

「俺はただ乗っただけ、燃料タンクで制御装置だ。レン、お前が止める！ ぶち壊せ！」

舌打ちをする。蹴り飛ばし強制離脱して急旋回と突進——慣性による被害を考慮していない、常時より鋭いイザナギの刃。パイロットとしての技術も奪われている。危機を察知すれば回避行動を取り、与えられた目標にその全力を投入する。

「止まりやがれ、イザナギ！ くっそ、俺はお前を破壊の力になんかしたくないんだ！ マコト、ちゃんと狙……ぐっ」

射線から逃れようと急旋回を繰り返す。慣性制御、Gからパイロットを守る機能にも限度がある。

「マコちゃん、まずいよ！ カナタが気絶したらさっきみたいにイザナギが大暴れしちゃう、カナタは今抑え込んでくれてるんだよ！」

ハルカの悲鳴が響いた。マコトのオロチはその由来になった八門の砲口を黙らせる。狙撃モードに切り替える。いつでも狙えるように。

「……ハル、いい。イザナギをぶっ壊せ。俺ごと潰せ。周りの被害は見えている。酷かったんだろうな、さっきまでの。お前がもう動けなくなっているのがその証拠だ。ついでに言えばレンがブチ切れているのもだいたいそのせいだってわかる。だから、やれ！」

カナタの言葉と願いと裏腹にイザナギは駆ける。目標は、敵機ではない。

「や、めろ。イザナギ」

意図に気付き凍り付いた。戦闘を行っていた地点より数キロ先、避難用のシェルターがある。動体反応、生命の持つ熱。大剣を振りかぶり。

「やめろ!!」

その根元を断った。

「あ、あああああ」

焦げ付いた肉片が無造作に周囲の建物を薙ぐことで拭われる。

「止めてくれ！ 止めてくれ、俺を、イザナギを！ これ以上、これ以上！」

半狂乱に陥る。守れなかったことはあった。

不意に巻き込んでしまったこともあった。それでも、己がその強大な力で虐殺を行ったのだという事実は、演習以外で人間を相手にしたことがない少年には重すぎた。しかしその手は変わらず操縦桿を通して生命と魂、闘争本能や身に沁みついたパイロットとしての技能を提供し続ける。

「カナタアアアアア!!」

レンもまた狂った怒りをぶつけていた。ずっと探していたのだ。ひと月。ヨミの襲来は小規

模でカナタとイザナギを拉致した巨大な穴は現れなかった。イザナギの生命維持機能をもつてもその期間カナタを延命させることは難しいと大人は結論付けた。レンをリーダーに任命して、初めての大規模戦闘がこれだ。無論彼も対人戦を行ったことはなく、相手は奪われたイザナギとその制御装置にされたカナタだ。呼びかけを行ったがずっと返答はなく、諦めもつこうという所で目覚めたカナタは躊躇なく自分を殺せと言ったのだ——逆に、斬れなくない。討てるはずがない。カナタは何も変わっていない、口は悪いが気のいいレンの親友だ。

「止まれ、止まってくれ！」

イザナギはパワー・機動力共に優れているが、武器がその大太刀しかないのが弱点だ。人型機動兵器であり、剣を握るのには両腕がいる。片方だけでも落とせれば、少なくともバランスを崩し猛攻は難しくなる。腕を。

「小手先はやめろ、レン！ ぶっ殺すつもりでやれ！」

「出来ないよ！ 僕がカナタを殺せる訳がないじゃないか！」

「クソ甘馬鹿野郎！ お前のそういう所が昔から大ッ嫌いなんだよ！」

その言葉の通り、レンのスサノオの攻撃は通らない。だが注意を引き付けるのには十分で、離脱による虐殺を許さない。そしてイザナギの兄弟機であるスサノオの差異として、大剣以外の小技がある。

「アンカーセット！」

各部位から伸びた鉤爪つきワイヤーがイザナギを縫い留める。程なく振りほどかれるだろうが、一瞬の隙を作ればそれでいい。

「マコト、合わせて！」

「ってーい!!」

片腕を落とした。右利きのカナタの想念が反映される利き腕ではない、しかし重力に耐え切れず十分には振るえなくなる。

「……わりい、レン。色々考えてもらったけど、俺を殺さなきゃ、やっぱりこいつは止まらない」

強制された動きでカナタは次の行動が読める。剣を振るうのを諦め、背負いその総重量を叩き付ける。カナタは乾いていた。絶望と無力に、不甲斐なさに。この拘束を解いて自爆装置を起動することが出来たなら、と願ってもそれは叶わず、そして性質が変えられたイザナギは未来への夢や希望といったものでなく、絶望と嘆きを喰らい力に変える。

「! こっち来る！」

マコトのスクープに巨神が迫る。いくら撃ち込んでも、スローモーションで彼女が好きだったカナタの姿が流れる。女子はだいたいカナタかレンが好きで、他の男子はそこそこに不満げではあったが納得せざるを得なかった。二人はそれだけ強かった。心中、という言葉がよぎったがここにカナタ自身の意思は介在しない。

「きやああああああああああああ!!」

断末魔を上げたのは機体が半壊してもなお、何か役に立てることはないかと探していたハルカの方だった。

「ハル………?」

呆然としても、イザナギは次の犠牲者を求める。次こそ、マコトと目が合った。

「生まれ、生まれ、生まれ! もう十分だろうが! 殺せええええ!!」

「カナタ、ごめん……!」

その精神力が一瞬、操り糸を断ち切った。佇むイザナギを刀を構えたスサノオが薙ごうとする。しかし、その姿が掻き消えた。

「! ヨミの穴……カナタ!」

導入以来かつてない損害を出しながら、敵指揮官機の撤退という形で終わったこの戦い。少年たちの想いは、誰にも届かない。

「クソが、死ねなかった……このままじゃ、また修復されて……」

自動修復機能が働いているのを示す計器の前に、自らが出した犠牲と伝わった死の感触に打ち震える。今のうちに自爆装置を、と動かしただが権限エラーが発生した。

「そう、なるよな……」

虚勢を張ることも出来ない。張る相手もない。呆然と指先を眺めるしかできない。

「そもそもね、カナタはもう死んでるんだよ?」

通信が入った。そのはずはない。ハルカは自分が殺した。肉片すら残らないはずだ。

「うん、だから死んだの。それで蘇生された。」

ヨミって本当にいい名前。機械組み込んでそれっぽく動かしてるだけなんだけど、魂もこうして再現できる」

「ハル、なのか……でも、お前はやっぱ、ハルじゃない……」

声はそうだが、語り口が明らかに従妹とは違う。ヨミの意思とようやく対面できるという所か。このデータを持ち帰ることが出来ないのがどうにも悔しい。

「意思、なのかな。やっぱりそれらしいこと言わせているだけかも。事実として起きたことは話せるけど。とりあえず、カナタはもう死んでいる。気付いていないだけ、連続性を保っているだけ。もしくは生かされてはいたけど、お察しの通り制御装置としてだけ。イザナギを造り変える時、まとめて手を入れた。パイロットの機能を維持するためなら、精神操作も強引な栄養補給も行う。私たちが使っているのはそういう兵器だって知っていたでしょう?」

相変わらずの空腹感がある。だが前に非常食に手を付けたのはいつだろうか。水分補給。排泄行為。わからない。ルーチンの眠りと変わらないモニター越しの風景とコックピットがあった。そうしてずっと雲龍カナタの人格だけを保持していた。

「でも、私はカナタに感謝しているよ。カナタに殺してもらえた、これでもう戦いは怖くない。カナタだってそうだったでしょう? おじいちゃんの見栄で無理矢理戦わされてきたんだもの」

モニターに映るハルカは無表情のまま笑い声を出す。そもそも同期しているのか、ハルカの姿を取った精神制御装置ではないのか。

「ジーさんは関係ないだろ」

「カナタは本気でそうだったかもね。でも周りの人はそうじゃなかった。七光り、とか。何にもないレンの方が頑張ってるって凄いつて」

「レンのことはやめろ！」

切り口を変えたものが致命傷であるのを感じて激昂する。止まるはずもなく、抑え込んだ傷を抉り出す。

「カナタは何でもできて当たり前、レンは頑張ってるって凄いつて。カナタは強いから、レンもカナタに守ってもらえて当たり前だと思ってる。演習をして、レンの方が腕前が上なのに、本気になれないからカナタの方が勝って、レンは何も疑問に思わない。カナタだけが自分が負けてて手を抜かれたんだって感じて努力して、それでもレンの方が天才だから引き分けになっちゃう。カナタには声変わりが来ないのに、レンは最近喉を傷めている。二人とも女の子に人気があるけど、カナタが本当に好きなのは……」

機械的に列挙される傷に嗚咽が漏れた。折れた心を踏みにじり、砕けた欠片を散らしていく。

「カナタは、絶対に弱音を吐けなかった。苦しむよ、嫌だよ。だからね、地上での大暴れはカナタの本音」

「詭弁だ、そんなの……！ わかったようなこと言うな、ハルの記憶を読み取って！ 俺を弄り回して！ だからって、何でも好きなようになるって思うな。俺は絶対に」

「うん、カナタはそれでいいよ。兵器としての運用に問題はない、皆そう言うでしょう？ こ

ちでも変わらないよ。カナタは優秀な燃料タンクで、最高のパイロット」

そう断言すると通信が切れ、コックピットでひとり涙を流す。モニター越しに、ハルカの機体の残骸にヨミの雑兵が群がっているのが見えた。黒い多脚の機械群、それが更に群れを成す。形を変えて組み替えて、見かけだけは黒く染まっただけの機械神の一体になる。今のイザナギ、そしてカナタ自身もそうなのだろうか

と思考すると内臓が異物感で暴れ——黒い塊が反乱を起こした——思考を止めろ、と命令する。逆らうことは出来ない。口先だけが置いて行かれた、人類の敵。

「殺してくれ、嫌、だ……」

弱々しく呟く——今頃地上はどうなっているだろう。残されたレンとマコト、補充人員。そもそも量産が可能なものでなく、使い捨ての燃料で終わらない正規パイロットはもつと貴重だ。各国の戦線は維持は出来ても派遣・救援に回せる余力はない。次に仕掛ければ——

「あれ、ハル、みたいに……ぜんぶ、ころせば……戦争を、終わらせて、しまえば……ぜんぶ、ぜんぶ、もとの、ように、なかに、ともだちに、もどれる、ように……」

壊れた心が静かに芽吹いた。救いにならない救いを差し出して、新たな絶望を滾らせる。

「強く、俺は……強い。足りない、まだ……」

コトリ、とコンソールに桃が転がり落とされる。一瞬ためらったが口に運ぶ。瑞々しく甘く、全ての景色が美しく思える陶酔の味。意地を張

らないで早く食べておけばよかった、とかぶりつき、長い空腹を満たすべく別の果実が、料理が、次々と運ばれてくる。彼は自らが決めた契約のルールに従った。

大規模な次元反応。反応はイザナギ——無数の噴射はあるものの飛翔と呼ぶには及ばなかった地上戦用のイザナギは、両翼を広げ羽ばたいた。翼に搭載された弾を撒き、爆撃を仕掛ける。被害の拡大が速すぎる。

「カナタ！ 僕の声が……」

「レン、私の話を聞いてくれないか」

呼びかけに対し静かに返した。伶俐でハスキーな声は強く染み込む。

「誰、だ……お前……」

「カナタだよ。わかるだろう？ 如何に変異しようとも、適合者はそう変えられない」

凍り付く。通信は確かにイザナギのもの。映し出された成人男性には確かにカナタの面影がある。ただし顔のつくりをよく見れば、という程度だ。目を細めた侮蔑の表情などレンの知るカナタはせず、語る言葉は全く違う。

「お前がカナタなもんか！」

「レンは、私のことを恨んでいるだろうな。雨に濡れた捨て猫を、家が反対するからと預からなかった。勿論、私はあの時の私を強く憎んでいる。無力な、粹がった、単なる子供」

冷笑に息を呑む。返す言葉がない。追求すれば、ふたりしか知らないはずのまた別の出来事がその低い声で紡がれるのは明らかだ。

「……カナタの記憶を読み取ったんだ。でも、それなら簡単だ。僕はカナタとは戦えない、かも、しれないけど……だからこそ後を任された僕は負けれない！」

「そう、お前は私には勝てない」  
フツと姿が掻き消えて、次の瞬間にはスサノオを羽交い絞めにしていた。

「瞬間移動、というものがある。追加武装のほんの一部だ。強化されたこのイザナギに勝てるだけでも？　そして話は最後まで聞くものだ。一言で言おう、降伏せよ。それで争う必要はなくなる」

再び不意に姿を消し、スサノオは重力に迷ってわずかによろめく。そしてモニターに別の機体からのメッセージが表示されている。幸い味方——マコトのオロチ——もう一機、潜んでいる。警戒を怠らないで。

「マコちゃんは目が無いね！　でも見えるのとやれるかは別。カグツチ！」

影から現れた未知の機体。炎を纏って跳躍し、二機を囲い込む。延焼が広がるが通常の方法では消すことが出来ない炎のようだった。

「……その声、ハルカ……」

「そうそう。記憶はともかく人格の保持は怪しいけどね。このカグツチはヨミ特製！　その炎は次元断層の余力って所かな。神殺しの炎って奴。そして勿論、レンレンと話しているのはカ

ナタ本人。意思も記憶もハッキリしている。そうじゃないと説得なんてしないよ。で、どうする？　降伏するの、しないの？」

ケタケタと甲高い声を上げる。無邪気で天真爛漫な所がある少女だったが、この哄笑にその面影はない。強い悪意だけが感じられる。

「……どうして、って聞いていいか」

「何故、か。戦争の終結が殲滅である必要はない、ある程度の線引きが必要だ。私とてレンと戦いたくはない。故にレンとマコトの降伏、身柄の引き渡しを要求する。さて、どうだろうか。お前が固辞したとして、司令部や国会は算数の議論を始めるのではないか？　私が言葉通り

攻撃をやめるか、紛糾するだろうか。ああ、もしかしてそちらではなく今の私の姿について

聞きたいのか？　力が欲しかった、大人になりたかった、そんなつまらない理由だ。こちら側

で手を入れてしまえば、パイロットが子供である必要はない。さて、だいぶ長々と話したが、君の疑問は晴れただろうか」

対してカナタを名乗る男性の声は静かに低く染み渡り、心を揺さぶる響きがある。レンは迷った。カナタなら、どう答えるか。

「だいたい、理解できたよ。確かに大人たちは僕たちを差し出す判断をするかもしれない。今は断つても、攻撃が続けば僕たちにお前が行け、そのためにいるんだろって言いだす……それ

くらい僕もわかっている。カナタが、誰よりも努力して、悩んでたのは僕が一番知っている。でも！　カナタだけはそう言わない！　そんな

ことをわかりきっていて、それでも食いついていくんだ！　だから僕を庇ってヨミの大穴に攫われた。情けない僕をなじりに来たのならそれでいい、僕を恨んでいても仕方ない。けれど、お前はカナタじゃない。それらしい言葉を取り繕っただけのコピー、偽者だ。カナタは……死んだんだ」

「レン……でも、このままじゃ……」  
カグツチの炎は包囲を狭めうねりを上げてもたげた先の狙いを定めている。

「そうそう。言い換えれば簡単に、自分から来るか生贄にされるかこの場で焼け死ぬかの三択。自分たちからこちらに来れば、カナタみたいに自分の意思と新しい願いを持って動ける。死体を提供してくれたら、無理矢理蘇生させて、それらしく動いて崩れたらまた動かすだけ。私も部下が欲しかったんだよね。うん、そういうことにしておこう。駒は多い方がいいから」

ハルカが駄目押しの一語をかける。彼女との意思疎通は不可能だ。その肉体に残された思考プログラムは模倣はどれだけの死体を回収しても不可能で、カナタの生体分析とマン・マシン・インターフェイスを通してようやく言葉を武器にすることが出来る個体が誕生した。

「恰好が付かないな、レン。けれど君はカナタじゃない、君自身がどうするかを行動規範とすべきだ……カナタは……俺は、取り返しのつかないことをしてしまって、もう生きていくことは出来ないって思った。あの虐殺で、俺の心がズタズタになった。弱った心で、本当の願いは

ことをわかりきっていて、それでも食いついていくんだ！　だから僕を庇ってヨミの大穴に攫われた。情けない僕をなじりに来たのならそれでいい、僕を恨んでいても仕方ない。けれど、お前はカナタじゃない。それらしい言葉を取り繕っただけのコピー、偽者だ。カナタは……死んだんだ」

「レン……でも、このままじゃ……」  
カグツチの炎は包囲を狭めうねりを上げてもたげた先の狙いを定めている。

「そうそう。言い換えれば簡単に、自分から来るか生贄にされるかこの場で焼け死ぬかの三択。自分たちからこちらに来れば、カナタみたいに自分の意思と新しい願いを持って動ける。死体を提供してくれたら、無理矢理蘇生させて、それらしく動いて崩れたらまた動かすだけ。私も部下が欲しかったんだよね。うん、そういうことにしておこう。駒は多い方がいいから」

ハルカが駄目押しの一語をかける。彼女との意思疎通は不可能だ。その肉体に残された思考プログラムは模倣はどれだけの死体を回収しても不可能で、カナタの生体分析とマン・マシン・インターフェイスを通してようやく言葉を武器にすることが出来る個体が誕生した。

「恰好が付かないな、レン。けれど君はカナタじゃない、君自身がどうするかを行動規範とすべきだ……カナタは……俺は、取り返しのつかないことをしてしまって、もう生きていくことは出来ないって思った。あの虐殺で、俺の心がズタズタになった。弱った心で、本当の願いは

ことをわかりきっていて、それでも食いついていくんだ！　だから僕を庇ってヨミの大穴に攫われた。情けない僕をなじりに来たのならそれでいい、僕を恨んでいても仕方ない。けれど、お前はカナタじゃない。それらしい言葉を取り繕っただけのコピー、偽者だ。カナタは……死んだんだ」

何かを考えた。もう戦わずにすめばそれでいいって、結論が出た。でもレンとマコトの決定は、少なくとも俺は尊重する」

その表現が、美談で飾られて捨てられるだけの彼らに刺さる。先の戦いの損失と叱責で消耗し、全てを投げ出したと思うことがあった。その最後を選べるのなら、ここで誘うのがカナタなら、それでいいのではないか。

「本当に、僕たちが行けば街を攻撃するのをやめてくれるのか？ カナタ……」

「無論だ。私は手を引こう。レンならそう言ってくれれば信じていた。立派だよ、レン。マコトもそれでいいか？」

ついでのように——実際、レンを引き上げるのが主目的で自分の優先度が低いことくらいはマコトも理解しているが頷くしかない。

「仕方ない、ね」

「決まりだな。転送準備を」

「はいはい、任せて！」

カグツチの炎が一層輝き、その一瞬ののち、四機の機械神が地上から消えた。

異界にて機体から降ろされその足で歩かされていく。暗い。カサリ、と動くものがあるが、機械製のヨミの雑兵かそれに操られた死体か。いずれにせよ、およそ生きていたとは言い難い。彼らのようにされるのかと問えば否定され、食事も望んだものが出てくるし快適だとカナタは答えた。食べる気がしない、とレンが睨むとそのうち喜んで食べるようになるかと笑う。

「ところで、契約をする際には約款に気を付ける必要がある……簡単に言うとは、何か契約条件に不備がないか、不当な契約を強いられていないか……ということだ。異界との契約であればなおさらだ」

「……神話の話、じゃない？」

突如切り出された話題に慌てて駆けようとする。まだ食事はしていない。機体に取り込めば、どこかに裂け目が見つけられるはずだ。

「レンレンは駄目だよ、ちゃんとここに来るのに同意したんだから。マコちゃんも駄目。食事をするかどうかっていうのはカナタがヨミつて名前から連想して決めたルール。契約の最後の一押しで、こっちに来た時点で手遅れなの」ハルカは嘲り、それでも望みを叶えてやろうとばかりに中空に地上を映し出す。見慣れたはずの日本の街、蠢くヨミの群体。

「ハル、種明かしが早すぎるぞ。もう少しこちらに馴染んでからにすればいいものを……私は手を引いた、確かな。だがそれはこちら側の総意ではない。私という個体の純粋な願いだった……悪いな、レン。俺は騙し討ちをしようと思えば出来るんだ。いくらでも、その必要があれば」

慟哭が響く。焼かれた街には誰がいるだろう。

家族、友人、親しい人——

「マコト、お前はわかってくれるよな？」

心のない口付けも、必要であれば出来るのだ。嗚咽と共に契約の証を受け入れる。

新たな住人もやがて全てを受け入れ姿を変え、忘れていく。大切な友がここにいるという事実だけが、一筋の救いである。

# 実 験 用 培



ヤッター!!!白ユリ姫をゲットしたぞ!!

悪心のエキスがいっぱい入った悪魔培地の黒い  
プルプルに植えつけたぞ!!うまくいくかなあ

培用開始



あ、生長してた。うまくいったら助手にして  
みようかな。じゃあ観察よろしく!!!

20日後

# 悪魔王子の

# 悪魔的

王子♡  
花の姫つかまえてきたよ♡

60日後

おっ！でさあがたみたいだね出してみよつか

50日後

## 信念は海に、意識は溶ける

このざま

とある離れ小島に、指名手配がかけられている悪しき魔女が隠れている。そんな情報が我々警備隊の元へ届けられた。

悪しき魔女は無辜の人々を実験動物のように弄び、辱め、都合のいいように改造している。魔女の悪事を止めるため、早速俺たち警備隊は魔女を捕獲するため島へと上陸、魔女の搜索を開始した。

警備隊の皆は島を隈なく探すため散り散りに別れる。そうしてある程度歩いていると、のんびり採集をしている件の魔女を見つけた。はやる気持ちを抑えながら、魔女の居場所を知らせる為、空に向かって信号弾を撃つ、そしてその音に気付いてこちらを見た魔女をそのまま銃で威嚇する。

「動くな！お前を捕まえにきた警備隊だ！このまま抵抗しないなら手荒な真似はしないと約束しよう」

言い終わると同時に持っていた銃を魔女の目につくように見せびらかす。そのおかげか魔女は両手をあげてくる。どうやら抵抗する気はないらしい。

「あのおんな物騒なものをこちらに向けるのはよしてほしいのですが、私は魔女でもなんでもないただの一般人ですし」

前言撤回、魔女に抵抗する気はあるみたいだ。

「しらばっくれるな！お前を捕まえに来たとは言ったが、その理由が魔女だからとは一言も言っていないぞ！」

俺はそう答えると同時に焦りだす。この魔女は銃を突きつけられて命の危機のはずなのにこんな返答をする余裕がある事に。早く仲間が来てほしい。

「あら？そうだっけ？そうね、貴方は言ったなかったわね？まあでも他のお仲間さんはそう言っただけのことだし」

魔女はそう言いながら指を鳴らす。俺の目の前に何か並び立つ。

「な、なんだこれは……石像？」

魔女が呼び出した石像が次々に現れる。その石像をまじまじと見るとその理由が分かった、いや分からされた。

「この顔、この服装は部隊の連中じゃないか、まさか石像にしたのか！」

「私は魔女なのよ？手荒な真似をする輩にはちよっと喋れなくして動けなくしてしまうに限るじゃない？」

魔女へと向けている銃が震える。こんなことを簡単に行う倫理観が信じられなかった。

「その点貴方は理性的よ、キチンと手順を踏んで警告するし、仲間に連絡も欠かさない。この石像たちと違って優秀な人材よ。そんな優秀な貴方にはぜひ私の使い魔になってほしいの」

魔女が言いたいことを言うと言の前にいた魔女が消える。どこだ、どこに消えた……？

「うしろよ、はい一発ドーン」

「ガハッ！」

いつの間にか背後に現れた魔女に一撃を入れられて脳が揺らされる。衝撃で持っていた銃まで落としてしまった。このままじゃマズイ。「捕まえたさきと貴方はどんなナリの使い魔にしようかな」

明るい声で俺へ恐ろしいことを言い出す魔女。これは覚悟を決める時かもしれない。

「残念だったな魔女よ、お前は島の来た連中を石なり使い魔にするつもりだろうが、そうはいかない……」

「あら？私に捕まったのにお喋りするの？良いわよ貴方の性格とかもつと知りたし」

「俺たちが魔女を捕まえられなかった時のことを考えていないとでも？確かに島に上陸した連中は全滅かもしれない。だが、島を根こそぎ燃やす準備が出来ていると言ったらどうする？」

島を燃やす、その言葉を聞いた魔女は流石に目の色を変えて慌てだした。

「何ですって？」

「言葉通りさ、俺たちが失敗した時の保険に船で待機している連中が一斉放火を始めるのさ。俺たちも死んでしまおうがお前を道連れにできるんだったら安いもんさ」

そろそろ自分の意識の方も限界に近い、だがまあ魔女へと嫌がらせは出来たしそれでよしとしておこう……

「素晴らしい自己犠牲精神ね、でもそんな程度で私を殺そうなんて火力が全然足りないわ」

なんだと……

「その船どうやって片づけようかな」

まさか船に攻撃できる魔法でもあるのか……

「そうだよし、ちょうどいいし貴方を使い魔にして船の連中をやっつけてもらいましょ」

魔女が呪文を唱えだすと、俺の身体が光り輝きだした。

「魔女め、なにをする気だ！」

「使い魔にするって言ったでしよう？そのためにはずまず貴方を使い魔にふさわしい姿に変えないといけないじゃない、安心なさいな、すぐに私に全てを捧げるようになるわよ」

「ち、ちくしょう……」

ここで俺の意識は一旦途絶えた。

「そろそろ目が覚めたかしら？私の新しい使い魔ちゃんは？」

どれくらい眠っていたかは定かでないが、意識がはつきりしだす。そして目の前には魔女様が笑いながら座っていた。魔女様を目の前にしてもたつてもいられず、殴りかかろうとするが、うまく立ち上がれずにこけてしまう。

「痛っ……ってなんだコレは……？」

最初に違和感を感じたのは腕だった。自慢じやないが、良い感じの筋肉量を誇っていた腕はまるで別人のように白く細長いモノに変わっていた。だがそんなものは些細な変化だった。

「足が、足が魚のモノになってるじゃないか！」  
思わず絶叫してしまったが、絶叫した声を聞

いてますます混乱する。自分の声が自分の知ってる声でなくなっていた。まるでそう

「セイレーンって知ってるかしら？簡単に言う人間の子とお魚を合体させたような存在なんだけれど、貴方をそうしちゃったよ」

魔女様が嬉しそうに語りだした。

「な、なんてことをするんですか魔女様！」

「だつて、船にいる連中をうまく無力化出来て、尚且つ資源にしようと思ったら貴女みたいな海が得意な使い魔が欲しくなったからよ」

尾になった足をジタバタさせながら抗議をするが、意に介さず話を続ける魔女様。

「それに貴女気づいていないかしら？さっきから私の事を魔女様って敬っていることに、まあ

そうなるように作り変えたのだけれど」  
指摘されて気が付いた、俺が魔女様を魔女様

と言っている事を……こうして自分の頭で考へてる時でも魔女様になっているッ

「そんなに心配しなくても良いのよセイちゃん、これからセイちゃんは私の言うことを聞いて私の事だけを考へていれば幸せになれるのだから」

セイちゃん？誰の事だそれは。少なくとも俺の名前ではないが

「貴女の新しい名前に決まっているじゃない、セイレーンのセイちゃん」

「ふざけないでください魔女様！セイの名前は××じゃなくてセイなんですよ！ってなんで？なんで××って言えないの？セイの名前はセイなのに……」

これも魔女の魔術だろうか自分には元々××という名前があったはずなのだがそれを口にしようとするときいになつてしまう……

「セイちゃん、古い名前なんて捨ててしまいなさいな、そもそもそんな姿になって元人間なんて信じてもらえらと思つているの？」

「それは……」

魔女様に指摘された通り、セイにはもう何も残っていない、こんな身体では、もし人前に出たら捕まって見世物にされてしまうだろう。

「大丈夫よセイちゃん、これからはこの私が一緒に暮らしてあげるから、生活の中でいっぱい甘やかしたり幸せにしてあげるわよ」

魔女様の優しい声が変わってしまった身体に染み渡る。セイの身体を変えた張本人ではあるがこの声を聞いているとなんだか幸せな気持ちになつてくる。

「セイは魔女様を捕まえようとしたいわば敵なんですよ？そんなセイを本当に甘やかすつもりなんですか？」

恐る恐る魔女様に尋ねる。そうだ、本来は魔女様を捕まえに来た許されざる身、魔女様に仕えて幸せになる権利などないのだ。

「良いのよセイちゃん、時間はいっぱいあるのだから、たかが一回捕まえに来たぐらいじゃ怒つたりしないわよ」

魔女様の返答にセイは反省と歓喜の心に溢れた。こんな優しい魔女様に対してなんて酷いことを言ってしまったのだろう。そんなセイを許してくれる魔女様に永遠に恩返しをしよう

と。

「ありがとうございます魔女様！セイはセイは魔女様の使い魔としてなんでもやります！やらせてください！」

「こちらこそありがとうございます、それじゃ早速と言いたいけれど貴女を海まで運んであげなきゃね、その間に貴女と色々お話がしたいわ」  
 そう言いながらセイをお姫様抱っこする魔女様、魔法で強化しているのだろうけど、魔女様に抱かれているとなんだがポカポカ幸せになつてくる。そして海辺に着くまで色々な話をした。

「それじゃあセイ、あとは上手にできるわよね？」

「お任せください魔女様！この身体でできることはさっきのお話で完全に理解しましたから！」

魔女様に見送られながら海へ泳ぎます。ここから船までは少し距離があるが、セイレーンにとっては朝飯前だ。

「見つけたらさて魔女様に教わった通りにやってみましょう」

船の近くまで行き、海面に浮上すると初めての事なのに自然に声が出る。

「ラララララアアアアア」

音を奏でる、自分の口から今まで聞いたことのない音色が出せることに驚いたが、船の連中を見て更に驚くことになった。

歌声を聞いた連中が海へと飛び込んでくる。

一人、また一人と海へとダイブしてくれる。海に落ちた連中が歌声に惹かれてこちらへとやってくるが、ただでは済ませない。船員全員が海にやってきたと思うところで海底へと潜った。

するとどうだろう、さっきと同じく、海底へと皆がやってくる。数多の人間たちが酸素を無くして溺れていく姿を歌いながら眺めていた。  
 「こんなものかな、さて良きげな人間を選んで魔女様に献上しないとね」

溺れ溺れ、そんな気持ちに唄に乗せ鮮度の良い人間を選び魔女様に渡す、こうすることが使い魔であるセイの幸せ。溺れている連中は元々はセイと同じ仲間であつたけれど、今は魔女様が第一。その他の人間なんてモノは魔女様の実験材料にしかない。

「早く帰って魔女様に褒められたいなあ……褒められて褒められて魔女様の役に立たないと」

人間二人を引き連れて魔女様の所へ帰る。船にはもう誰も乗っていない。溺れて海底に沈んだ船員は多数いるが、魚のえさになるだろう。船の資材は後から別の使い魔が取りに来るらしい。だから今はすぐに帰ろう、愛しい愛しい魔女様の所へ。魔女様に全てを捧げるのが今のセイの存在理由なのだから。

「よくやったわよセイちゃん！」

魔女様にご褒美として抱き付かれ、ナデナデされる。ああセイは果報者です。

「もったいないお言葉です魔女様。でも本当に二人だけで良かったのですか？もつともつと人間を連れてくることは出来ましたが」  
 「良いのよ二人で。この二人にはセイと同じくセイレーンになつてもらうのだから。名前は貴女が決めていいわよ」

「セイに妹ができるんですね！つまりこれから姉妹で魔女様にご奉仕できるんですね！」  
 「その通りよ、実はこれから貴方たちセイレーン姉妹でこの島に来る連中を一人残らず海の底へ旅立たせてほしいのよ。やっぱり外敵はすぐさま消すに限るからね」

「了解しました魔女様！セイとその妹たちでこの島を守ります！」

魔女様に向けて満面の笑みで答える。こんなに魔女様に使われる事が幸せだと知っていたら、もつと早くにも仕えていたのに。

そしてこれから生まれてくる新しい妹二人にもこの幸せを分け与えなければ。

魔女様、セイの事を一生使い魔として命令してくださいね。

## 提灯花の遠吠え

花草セレ

雨夜に灯る星屑なら  
海に浮かべた橙の夢

涙降るなら忘れたい  
道草のまま萎れたい

夜道に唄が咲いていた。夜空を鏡映しにした  
みたいに、足下には光がさざめき合っている。  
よく見れば、それは雑草のソニアステンだった。  
丸みを帯び、うつむき気味な花は別名の提灯花  
がよく似合う。まして、光が灯っているのだか  
ら。

本物のおとぎ話だった。

ソニアステンが道なりに咲く、光る。少女の  
唄声は村の外れへ、外れへと歩いて行く。その  
足跡に光が咲く。ソニアステンに火が灯る。膨  
らんだ花頭をちよいと触れば、ほんのりと暖か  
い。星が命を得たようだった。

声の主を一目見たくて、僕は真つ暗な夜道を  
進んだ。新月の夜は絶対に出歩くな。おっちゃん  
にも父ちゃんにも、きつく言われているのに。

新月の夜には狼が出るから。  
だけれど、目の前に広がるメルヒエンに僕は  
抗えなかった。道しるべが星光る花だなんて、  
それだけで僕にとっては冒険だった。夢見心地  
に、見とれるがまま進んだ。橙のきらめきが僕  
を呼んでいる気がした。何より、綺麗な唄声だ  
った。

鈴のような声、せせらぎの澄んだ声、美声。  
どの言葉も物足りない。目の前に広がるメルヒ  
エンを、そのまま唄に乗せたような声だ。星空  
がどこまでも無数なように、ソニアステンの花  
が遠く向こうまで光りさざめいているように。  
おとぎ話の糸で紡いだ声だった。

ソニアステンの輝きは、地平の向こうまで続  
いている。僕の足下では魔法が解けたとばかり  
に灯りが消えつつあった。手灯りにと一つ、手  
折る。りいんとそいつはひととき強く輝いて、  
消えてしまった。そうして、僕が唄声へ追いつ  
く前に朝となった。

手元には橙の小さな花が一輪、おとぎ話の名  
残とばかりに残された。

「だから、本当に光ったんだって。道伝いに。  
あっち、鉾山の方までずうっと」

「だから、お前の空想は聞いてねえって言っ  
てんだよ。このメルヘンホラ吹き小僧」

手痛いげんこつが一発。じんじんと脳に浸  
みる。この村一番の坑夫なくせに、手加減とい  
うものを知らない。ひよっこな父ちゃんとは大違  
いだ。

「昨日も狼が出たんだぞ。またシロメラの花が  
食い荒らされた。お前だって遠吠えを聞いただ  
ろうが。いつ人が喰われるか、分かったもんじ  
ゃない」

「昨日の夜は、静かだったよ。唄がよく響いて  
た」

「お前の空想は聞いてねえ。狼だ、狼。お前に

何かあってみる？ お前の父ちゃんに俺はど  
う説明すりゃあいいんだ」

それからひとしきり、おっちゃんのお説教を  
食らった。おまけにもう一発、げんこつも。夜  
には出歩かないこと。そう固く固く神様に誓っ  
てようやく解放された。

この小さな村は、シロメラという花の生産で  
成り立っている。ソニアステンとかの雑草とは  
違い、シロメラは様々な用途がある。花びらを  
熱せば錫になるからだ。ブリキは勿論、はんだ  
にめっき、最近はカルレオの花と混ぜ合わせて  
殺虫剤なんかも使われている。こういう便利  
な植物を花華（かか）という。花華は場所を選  
んで咲くから、よその街へ持っていくと高値で  
売れる。シロメラは山の奥深くでしか咲かない。  
鉾山の奥深くまで潜れないひ弱な父ちゃんは、  
村中のシロメラを抱えて麓の街まで売りに行  
っている。だから、父ちゃんが家にいるのはほ  
んの少し。僕は村のみんなに、特におっちゃん  
に世話してもらっている。

シロメラは父ちゃんに似たひ弱な花だ。花び  
らは生つ白くて、草丈はひよろひよろと頼りな  
い。暑いのも寒いのも苦手だ。だから、山奥に  
しか咲かない。下向きに咲く独特の姿は、街だ  
と観賞用としても人氣があるという。世話に手  
間がかかることが、かえって評判なのだとか。  
ただし、あくまで観賞用。花華として収穫する  
にはやはり、貴重な群生地まで潜らなければな  
らない。

「いいか。絶対に夜は出歩くなよ。狼には気を

つけろ」

「そうおっちゃんが念を押す。二本足で歩く子猫のせいにしてからかったことも、喋る小鳥のせいにしてからかったことも最後には許してくれたおっちゃんが、今度ばかりは本気だった。おとぎ話で悪者がいなくなるような、簡単な話じゃなさそうだ。」

狼が村で目撃されるようになって、早三ヶ月。まだ被害はシロメラの花だけ、とはいえ、村中の不安は日に日に増している。星も怯える獐猛な遠吠えは僕だって何度も聞いていた。家で一人、心細くないわけじゃないか。夜の闇ごと噛み砕かれてしまうと、何度思ったことか。そもそも、村を支えているシロメラ産業が大打撃を受けているのだ。おっちゃん達は黙ってはいられないだろう。僕も食い荒らされた群生地を見た。繊細な花びらがズタズタに切り裂かれた、恐ろしい惨状を。

「まったく、お前の面倒を見ているほど暇じゃないんだ。採りやすいシロメラは全部食われちゃった。次にお前の父ちゃんが帰ってくるまでに、山奥深くまでシロメラを探さない」と

狼によって、シロメラの群生地はどこも壊滅的らしい。家で遊んでいろと最後に念を押されて、おっちゃんは鉱山へ戻っていった。

まだ真っ昼間だけれど、今日くらいは大人しくしていた方が良さそうだ。

昨日摘んできたソニアステンの花に、雑草にふうと息を吹きかける。おぼろげな記憶で唄を口ずさむ。一向に花は光らなくて、僕は昨夜見

たとびきりの光景を証明することができなかった。ソニアステンは、やっぱり何の役にも立たない雑草なのだろうか。

「魔法が使える女の子なんて、まるで花妖（かよう）みたいね」

げんこつをもらった頭を冷やしてくれながら、おばちゃんがそう笑った。花妖はおとぎ話じゃないか。僕は実際に、この目で見たというのに。

花妖とは、花華に宿ると言われている妖精のことだ。ガラスを青く変えたり、吹雪を起したり。雨を降らせる花妖も聞いたことがある。たくさんの有用な花華それぞれに、そんなおとぎ話の妖精が住んでいると言われているのだ。

「それに、ソニアステンは雑草だし」

「綺麗な花なんだけどねえ」  
そう話すおばちゃんも、帰り際には狼に気をつける、だ。僕が見た光るソニアステンのことなんて信じてくれちゃいない。いつもの作り話でしようと思われてしまった。

僕はもう一度あの光景を見たくて、おとぎ話でなかったと証明したくて、ソニアステンの花を探した。提灯花の別名に似つかわしいメルヒエンな姿をしているから、尚のこと、この花が光っただなんて空想らしかった。この目で確かに見たのに、夢のように思えてしまう。

何よりも、あの美しい唄声をもう一度聞いてみたかった。

ソニアステンの花を辿りに辿って、一軒の小

屋に辿り着いた。村の外周を回り回って、炭鉱場の裏にあたる場所だ。こんなところに人が住んでいるだなんて、知らない。僕が知らないのだから、村の誰も知らないだろうと思う。

庭先が小綺麗に整えられているから、空き家ではないはずだ。ノックを二度、三度。返事はない。人の気配もなかった。しいんと、建物が眠っている。昼間だというのに陽の差さない立地で、ひんやりと不気味だった。青天の元で、ソニアステンも固く蕾を閉ざしている。

その眠りを切り裂く、狼の遠吠え。すぐ近くだった。研ぎ澄ました牙に、よだれの滴る質感までも伝わってくる距離だ。村へ戻るには、大きく雑木林を抜けなければいけない。そんなの無茶だ。狼のいる方角は分からないけれど、もし鉢合わせでもしたらひとたまりもない。

「狼が、狼が出たんです」

もう一度強く小屋の戸を叩く。返事はない。がりりとノブを回す。開いている。狼が出たんだ、仕方がない。そう何度も言い訳しながら、僕は小屋に忍び込んだ。

中は整頓されていて、生活感に溢れていた。読みかけの本にはしおりが挟まれ、べらべらと紙が泳いでいる。洋燈は昨夜も灯されていたのだろう、とろりと固まった蠟燭が一本。引いたままの椅子、ペンの転がるテーブルが、主の外出を物語っている。じきに帰ってくるだろう。帰ってきたら、事情を話せばいい。

そうこうしている内に狼の遠吠えは聞こえ

なくなっていた。耳をそばだてても、風に草木の揺れる音ばかりだ。もう、大丈夫だろうか。お邪魔しましたと心の奥で唱えて、玄関戸を開く。と、思いのほか強く開かれたドアに引き寄せられ、僕は倒れ込んでしまった。

「あら、ごめんなさい。お客さん？」

現れたのは僕と同じ年くらいの女の子だった。けれど、その声は歳に似つかわしくない優雅さをまとっている。少女は細い金糸の髪をたなびかせて、僕へ手を差し伸べてくれた。ありがとう、と僕はとりあえず立ち上がる。

「狼の遠吠えが聞こえて、隠れさせてもらってたんです。すみません」

「狼なんていなかったけど」

僕は慌てて言い返した。何が面白いのか少女はくすりと笑って、右手を唇へ当てる。妙に大人びた動作と、笑んだ時のいじらしい子供っぽさが入り交じっていた。

「別に、怒ったりしないわ。鍵もかけなかったのはわたしだし」

「その、勝手に入って、すみません」

「いいの。お客さんだなんて珍しいもの」

少女は立ち話もなんだから、と僕に椅子を勧めてくれた。少女の言うとおり、あまり使われていないのだろう。座面がつやつやと綺麗だった。

「病気がちでね、このくらい静かな場所じゃないと暮らせないの」

うつむき加減に、寂しさがにじみ出ていた。

机上の小説は何度も読み直したのか、角が少しよれている。

「その、僕、また来てもいい？ 今度は手ぶらじゃなくなつて、とっておきのおとぎ話を用意してくるから」

きよとん、と少女は目を丸くする。じいと僕を見つめるその目は好奇心旺盛で、子供らしかった。

「ありがとう。楽しみにしてる」

指切りげんまん、帰宅すると僕は早速おとぎ話作りに取りかかった。今まで口から出るがまだまった分、これが難しい。お話の流れを考えて、人となりを選んで、言葉を選んで。少女のまん丸な眼にのぞかれることを夢見て物語を綴った。人を楽しませる物語を書こうと思えた。翌日、翌々日と少女の元へ毎日通った。毎日、違う物語を引っ提げていった。子豚と木登りする話、狐との化かし合いに挑戦する話、人魚、妖精、小人。僕の思いつく限りのタネは全部登場させた。

「どうして、この狼は何もされないの？」

「だって、何も悪いことをしてないんだから」

「でも、狼よ？ 普通のおとぎ話だったら」

夕暮れも大分早くなった頃、少女とこんな会話をした。脇役の動物に狼を出したら、彼女はひどく、その狼が気になるようだった。

「何でも狼を悪者にするおとぎ話なんて、僕は嫌い」

「ありがとう」

そう言うとき、彼女は突然立ち上がった。おい

でと手招きされる。

案内されたのは小屋の裏手にある花畑だった。花と言っても雑草、ソニアステンの群生だ。橙の小花がぎゅちりと身を寄せ合い、咲いている。風が揺するたびさらさらと提灯様の花びらが揺れた。

「わたしもおとぎ話を見せてあげる」

雨夜に灯る星屑なら

海に浮かべた橙の夢

涙降るなら忘れたい

道草のまま萎れたい

その唄はまさしく、僕の見たおとぎ話だった。少女の唄に合わせて、ソニアステンの花々が一斉に灯り出す。淡い橙の光が、その光輪が幾重にも重なり合う、ハーモニー。地表に播かれた星々の中心で、少女が金糸色の声で唄う。足下に踊る星々の群れが、優しく灯る橙の輝きこそが、あの唄声そのものだった。

その唄を打ち砕いたのは、一発の銃声。

少女の唄に、ソニアステンの輝きに魅了されていた僕は、小屋を取り囲む村人達に気づけなかった。おっちゃんをはじめ、誰もがぎりぎり眉間に皺を寄せている。そうして、構えた猟銃は真っ直ぐに僕たちへ向いていた。

「小僧、そこどきな。当たっちゃまう」

咄嗟に、僕は少女を背に隠していた。どげと指示するおっちゃんの声は獐猛だ。僕のおふざけを叱る時とは、全然違う。

「狼に味方するって言うのか？」

二発目の銃声。弾はわざと外したのだろう。足下のソニアステンを散らした。

「どこに狼がいるって言うの？」

僕は声を荒げた。膝の震えが虚勢に乗っかる。後ろの少女をかばおうと必死で、両腕を一杯広げていた。

「お前の後ろにいるじゃねえか。小僧、狼をかばうって言うのか？」

「狼なんてどこにもいないじゃないか」

そうは言っても、僕はもう振り返れなかった。おっちゃんの目は真っ直ぐに狼を睨んでいる。その眼球に、はつきりと狼が映っている。振り返れば、僕にも狼が見えると思った。

「光る花を見ただなんて言うくせに、どうして目の前の狼は見えないんだ」

銃声がもう一発。僕は振り返ってしまった。

恐ろしい狼がそこにいた。

「お、狼っ」

僕は叫んでしまった。びくびくともう一度ソニアステンの花を見つめる。そこにいるのはあの少女ではなくやっばり、狼だった。

狼はけたたましくうめき声を上げた。ソニアステンの輝きが引き千切られてしまう。後には真っ暗な夜と、無残に散った燈が風に揺れた。そうして狼は、僕の腕へと思い切り噛みついた。肉のはち切れる痛み、鋭い牙の冷たさ。僕は咄嗟に腕を払った。狼に転じた少女が、夜をすり潰す声で吠える。そうしておっちゃんが次の一撃をと銃を構える内に、突風のようにどこかへ

立ち去ってしまった。

大勢の村人が唾然とする中、僕には少女の涙が聞こえていた。

あなたまでわたしを狼と呼ぶのなら、って。

あれ以来、狼の被害はぱったり止んでしまった。おっちゃんは大手柄。一躍、村のヒーローだ。対する僕は、もうホラ吹きすら虚しくなつて、創作を止めてしまった。あの小屋には人の住んでいた痕跡も、僕が少女にあげたおとぎ話も残されてはいなかった。

摘んだソニアステンが萎れた頃、父ちゃんが出稼ぎから帰ってきた。次の旅路から僕も同行した。

食い荒らされなくなったシロメラの花を一杯に抱え込んで、汽車へと乗り込む。途中で深い森を抜けるんだと父ちゃんが話してくれた。

煙る警笛のいななき。その煙りに紛れて、どこからか美しい遠吠えが聞こえた。夜を引き裂くほど恐ろしい、けれども、夜を照らすあの声。

今でも、狼の遠吠えが聞こえるたびに思うんだ。あの子がどこかで、泣いているんじゃないかって。

今でも、電燈に煌めく町先には心躍るものがある。僕の心の隅っこにはまだメルヒェンがいて、そのことが時折無性に、苦しくなる。もう筆を折ったというのに。もう、十年が経ったというのに。

僕はあの日噛みつかれた腕が上手く動かさ

なくて、炭鉱での仕事はできなかった。それは仕方のないことで、父ちゃんの後を継いでこうして、シロメラの花を売り歩く仕事をしている。

町はとある発明でめつきり景色が変わってしまった。ソニアステンの電燈だ。雑草でしかなかったソニアステンには、電気を通すと光るという性質があることが発見された。ソニアステンの電燈はガスや蠟燭を使った洋燈よりもずっと明るく、安全で扱いやすい。都市部を中心に、灯りはがらりと変わってしまった。

あんなに雑草と言われていた花が、今では花華の筆頭に名を連ねている。

結局、何事も人の見方次第だ。町へ向かってただただ歩く宙ぶらりんな時間の間、ずっと考えてしまう。僕はもう創作を止めてしまったから、他に考えることなんてなかった。何事も人の見方次第なんだ。雑草も花華も、同じ植物なのだから。人にとって有益か否かでしかない。

あの狼も、そうだったのかもしれない。僕にとつて、少女が狼に思えてしまったから、恐れてしまったから、僕の手であの少女は狼に堕ちてしまったんじゃないか。最近ずっと、そんなことばかり考えてしまう。僕のせいで、僕のせいで。僕が、彼女を狼と呼んでしまったからって。

今も、彼女は狼であり続けているのだろうか。すっかり扱いの変わったソニアステンの花を見るたび、祈ってしまう。

もし、叶うなら。次に会う時は美しい唄声を持つ少女の姿でありますように、と。

## 霧

糸野キオ

この世には、人間でも動植物でもないものたちが、数多く存在する。

悪魔、悪霊、魑魅魍魎。そのように呼称されるものたち。しばしば人間に害なすそれらの存在と、人間は絶えず戦ってきた。

彼らの由来は様々だが、多くは人間たち自身の感情から発生したものだ。死した人間の魂が強い感情とともに残ったもの。人間たちの感情が束になり形を持ったもの。人間に強い思いをこめられた品物が自ら意思を持つに至ったもの。その中でも悪性の強いものが、悪魔、悪霊などと呼ばれる。

魂を喰うために人間を襲うもの。ただそこに漂うだけで生命力を奪うもの。その悪意のあるなしに関わらず、人間に害を及ぼすものは討伐の対象とされる。

人間が生きるためには、人間を殺すもの、その破滅につながるものはことごとく敵、悪とされ、排除されるのだ。

「また西の村で犠牲者が出た」

退魔師の拠点の教会にて、報告書を机に半ば叩きつけながら退魔師長は言った。

「先月末から始まってもう四件目だ。今回も滅多刺しの上心臓を抜かれていた」

やはり愉快犯傾向のある悪魔が出たと言っ

ていい。周辺地域の担当長である彼は歯噛みして皆を見る。地域担当の退魔師たちが机を囲んでいる。

「皆も知っての通り、悪魔どもは我々人間の感情を餌にする。奴らが民衆の恐怖を煽れば煽るほど奴らは力を増す。よく知れた悪循環だ。それをわかっただけでいてこういう悪質なことを繰り返す奴が出る」

人間にも悪魔のような輩はいるが、どちらであれ対処はさして変わらない。制圧、拘束、あるいは殺害。違いは呪術の類への対処が必要かどうかだけだ。

「奴が我々を挑発しているのは明らかだ。放置すれば犯行はより激しくなるだろう」

今夜、急ぎ討伐行に出る。退魔師長は宣言する。

「今からチームを組み直す。危険度の高い任務だ。各自装備を整え、心してあたろう」

我らに守護と祝福のあらんことを。祈りの言葉を、一同が復唱した。

僕はまだ成人したばかりの新入りだけれど、今回の討伐行に同行させてもらえることになった。日の暮れかかるところ、先輩たちとともに教会を後にする。

「今回は後方支援だが、前衛を支える大事な任務だ。それに後衛を狙った不意打ちもよくあることだ。心してかかれよ」

先輩たちは皆、僕を鼓舞してくれた。首から提げる呪いよけの守り石に、皆が祈りを込めて

くれる。僕が教会に引き取られた時からずっと身に着けている、この教会の信仰の印が刻まれているものだ。

もちろん、後衛の大切さはわかっていてもりだ。僕は攻撃寄りの剣術や拘束術の方を中心に学んでいるから、いざれ場数を踏んだら前衛に出たいとは思わなければならない大事な任務だ。後衛のプロである先輩方に改めて色々勉強させてもらおう。

前衛が二名、後衛が僕を含む三名。今回の悪魔はおそらく単独犯だと見られているから、小回りを優先してこの人数だ。万が一相手が複数だったら、増援を呼ぶのも僕の役目。

犠牲者は物理的に切り裂かれているから、今回の悪魔は誰か人間に憑いて身体を乗っ取っている可能性が高かった。そのひとを救えたらいいのだけど、融合の度合いによっては、前衛の誰かがそのひとごと悪魔を殺さなければならぬ。前衛の退魔師には、そういう責任も付きまとう。当然、返り討ちに遭って呪われたり殺されたりする可能性も高い。

危険な仕事だ。でも誰かがやらなくちゃいけない仕事だ。

退魔師には、身寄りのない子供として教会で育てられ、そのまま退魔の仕事に就いたひとが多くいる。僕もそうだ。体術や呪文の訓練はきついし、悪魔との戦闘で負傷することも死ぬこともある仕事だから、人手は常に不足している。教会で育てられた子供たちがそちらの人材と

して重宝されるのは無理からぬことだった。育ててくれた教会への恩返しにもなるし、人々を害する悪魔を滅ぼすことで直接的に人々の役にも立てる。やむを得ずこの仕事に就いたという面もあるけれど、ちゃんと僕もひとの役に立てる人間になりたいと、そういう思いもちやんと持っている。悪魔に襲われて死んだり狂ったりするひとが滅れば、僕のような身寄りのない子供も減るのだから。

……まあ僕は、単に親が酒浸りで野垂れ死にしただけなんだけど。

じゃあなんで僕を産んだのと、聞きたかった気もするけれど。

記憶の彼方に、僕を呼ぶ母の声がかすかに残っている気がする。酒を持ってこいとか、食べ物盗んで来いとか、そういうことを言う声。その声で、一度くらい、愛していると云って

くれてもよかったじゃないかとも思う。一度くらい、僕を抱きしめて、大好きだと、いい子だと褒めてくれてもよかったじゃないかと、思うこともあるけれど。

それはそれ。これはこれだ。

悪魔たちのせいで不幸になるひとを減らしたい。その思いに、嘘はない。

「総員戦闘準備！」

前衛の先輩の声にはっと我に返る。聖句を刻んだナイフに手をかける。

薄暗い裏道の奥で誰かが襲われていた。前衛の先輩たちが突っ込んでいく。

後衛の先輩がそれを追いかけける。僕も後に続

こうとして、不意にもう一人の後衛の先輩から声をかけられた。

「こっちから回り込もう。固まると危険だ」

先に立って先輩が脇道に走る。僕も後を追う。飛び込んだ脇道には、妙に濃い霧が立ち込めていた。

「なんでしようこれ、煙……？」

見回して、そこにいるはずの先輩に呼びかける。返事は、なかった。

「……先輩？」

気が付けば、暗い路地にひとの気配はなかった。霧のような霞のような、煙のような霧が立ち込めて視界が悪い。振り返れば、今入ってきたはずの路地の入口さえおぼろげにしか見えない。

まずい。はぐれてしまったか。

こういう時は元来た道に戻るのが鉄則のはずだ。さっきの道に戻ろう。くるりと踵を返す。そのまま足を、一歩、

踏み出せなかった。

身体が動かない。何かに縛られたように、全身を縄で後ろから引かれているかのように身動きが取れない。

いけない。焦っちゃだめだ。

呪術による仕掛け罠だろうか。蜘蛛の巣のように罠を張って、獲物を拘束してゆっくり襲う悪魔もいる。この手のものにかかったときは、落ち着いて救援を――

先輩、と呼ぼうとして、その声も出なかった。

ただはくはくと口が動くだけで、喉からは一切の声が出ない。

どうして。呪いよけの石はちゃんと首から提げているのに。そんなに強力な呪いなのだろうか？

どうにか脱出しなければ。先輩たちの足手まといになるわけにはいかないのだ。早く抜け出して、加勢しなければ――

――いいのよ、そんなこと。考えなくて。何か聞こえた気がした。

するり。喉に何かがまとわりつく。ずる、全身を縛る何かが、さらに僕に絡みつく。

視界が悪い。目の前が白く霞んで、頭の中まで霞み始めて。

――ゆっくり息をして。そう。深く。

声が出ない。落ち着け。落ち着け。息を整えて、深く息を吸って、

――そう、そう。いい子。

深く息をするたびに、白い霧が肺を満たす。夜の匂い。甘い湿り気。どこか、眠気を、催すような――。

――いい子ね。

声聞こえる。どこか、懐かしい声。

――いい子ね、いい子。かわいい子。

視界が霞む。甘い匂いが満ちる。夜の花のように芳しく。

これは、誰の、声だっけ？

眠い。ゆっくりと身体力が抜けていく。身体を縛る何かが、まるで僕を抱きしめるように絡みつく。

甘い、匂い。記憶の底の、懐かしい、匂い。僕に絡みついたものが、優しく僕を撫でていく。甘く僕を抱きしめて、頭を撫でて、耳元で囁く。

——力を抜いて。身を委ねて。  
……ああ。うん。そうしよう。

頭の中が重かった。どろりと思考が濁る。何も考えたくない。ただ生ぬるい眠気に身を任せろ。

いつのまにか姿勢が崩れ、地面に膝をついていた。何かが僕を包む。繭のようにくるんでいく。

——かわいそうに。辛かったね。  
つら、かった。つらかったのかな、僕は。

——誰にも褒められないで。誰にも愛されないで。

あい、され、ないで。

——いろんなことを我慢して。辛い訓練に耐えて。それでもだあれも、抱きしめてくれなくて。

……そうだ。抱きしめてもらったことなんて一度も。

——かわいそうに。愛されたかったあなた。声が、僕の名前を、呼んだ。

ああ。この声は。

——ごめんさい。ずっと、ずっと、こうしなかったの。

記憶の彼方の、懐かしい声。

——大好きよ。  
ああ。

——愛しているわ。

その言葉が、ずっとほしかった。母さん。

——ずっとあなたを見ていた。ずっと愛していたのよ。

そっか。そうだったんだ。

——ごめんね、ごめんさい、あなたを置いて行ってしまった。

そうか。本当は、母さんは、僕を。

——離れたくなんてなかった。もっと抱きしめて、愛してあげたかった。

優しい声。ずっとほしかった言葉。ぬくもり。いいんだ。いいんだよ。今こうして迎えに来てくれたなら。

ああ、神さま。どうしてももっと早く、僕らをおわせてくださらなかったの？

——一度身体をなくすとね、なかなか声が届かないの。やっと声が届いたの。あなたに手が届いたのよ。

服の下の守り石が、ぶるぶると震えている。

ああ、鬱陶しい。せっかく母さんの声が聞こえるのに。

動きの鈍った指先で、首にかかった紐を引いてそれを引っ張り出す。

皆の祈りのこもった守り石。それが手の中でぶるぶると、がたがたと震えている。

教会に来てからずっと、これを身に付けていたのに。魔から守ってくれると聞かされて、ずっと肌身離さずいたのに。

もしかして、これのせい？

こののせいで、ずっと母さんに会えなかったの？

——そうよ。そうなのよ。

捨ててしまいなさい。そんなもの。母さんが言った。

そうだ。こんなもの、邪魔なだけだ。

教会が、僕を縛り付けておくために持たせたものなら。母さんに会えない僕を、利用したかっただけだというのなら。

こんなもの。

僕は顔を上げる。ゆっくりと振りかぶって、守り石を霧の向こうに放り投げた。

とたん、身体が軽くなった。重い鎖を脱ぎ捨てたように、胸のつかえがとれたようにすっと楽になる。

ああ、なんだ。こんなものに僕は、ずっと縛られていたのか。

僕はゆっくりと立ち上がる。身体に絡みつくものは、僕に染み込むようにして消えていた。

僕を縛るものはもうなかったし、僕を抱きしめてくれる母さんは、確かに僕の中にいるのだった。

——よかった。やっと、あなたも自由になれる。

自由。そうか、これが自由というものか。

——ひとの身体なんて、枷でしかないのよ。

身体を捨てて、やっと楽になれるの。

そうか。この身体も、脱ぎ捨ててしまえばいいのか。

——でもその前に、他のひとたちも、解放し

てあげましょう？

ああ、そうか。

——他のひとたちも、縛られているのよ。みんな、教会にも、この世にも。

先輩たち。あのひとたちは僕によくしてくれた。みんなを置いていくのは苦しい。もう話せなくなるのは寂しい。

——みんなで楽になればいいのよ。

身体は自分では脱げない。僕らを縛る教会もそれを許さない。

——だから、助けてあげましょう？

そうか。そうだ。僕にはそれができるんだ。腰に提げたナイフに手が伸びる。すらり、抜き放つ。

刃に刻まれた聖句も、もう何の意味もなさなかった。これからこの刃でひとを救うんだ。一人でも多く。まずは、お世話になった先輩たちから。

視界を遮る霧はもうなかった。暗い中、驚くほど視界は明瞭だった。

周囲の音が聞こえてくる。路地の奥、角を曲がった先から、争う声。誰かが誰かを取り押さえているのか。狂ったような喚き声。ああ、どこかの悪魔に狂わされてしまったのかな。可哀想に。

それを押さえようとする先輩たちの声。ああ、先輩たち、そんなところにいたんですね。

今、楽にしてあげますからね。

歩き出す。道の先の曲がり角の向こうを目指す。先輩のカンテラの灯りが見える。赤い炎の

ゆらめく色。夜の僕らを照らす色。

銀の刃をしゅっと振る。きらり、刃がきらめく。さあ、仕事だ。僕のなすべきことをしよう。

みんな、身体なんか持っているから苦しむんだ。争うんだ。大切なひとと引き離されるんだ。

——いい子ね。

母さんの声が響く。ああ、僕はいい子だよな？ やつと、母さんにそうやって褒めてもらえるんだよね？

角を曲がる。遠くで争うひとたちと、それを注視しながら支援の呪文を唱え続けている先輩の背中が見える。

さあ、先輩。

これから、みんなあなたの後に続きますからね。

その背中に、銀の刃を突き立てた。

がちやん。音を立ててカンテラが割れた。

どくり、僕の胸が高鳴る。熱い。閉じ込められていた命が溢れ出す。もっと、もっと感じさせて。あなたの熱を教えて。僕がすべて、解き放つてあげるから。

振るうたび、濡れた刃が光る。きらきらと、宙に舞い散る血の雫が割れたカンテラの光を映す。血と命が散っていく。肉の軀から解き放たれる。

ああ、なんて美しい終わりだろう。

ほら、まだ心臓が震えている。凍える雛鳥のように。なんて愛おしい。

いま、助けてあげますからね。

血の滴る心臓を取り上げて。捧げ持って。口

づけて。

その杯から溢れる血を一息に飲み干した。

ああ。美味しい。

ため息が漏れる。これが魂の味なんだ。

口を大きく開け、小さくなった心臓を丸呑みにする。どくり、喉仏が上下する。

ああ、どうして。もっと早く、こうしてやらなかったのだろうか。

こうすればもう痛くない。苦しくもない。争うことも、憎み合うことも、大切なひとと引き離されて泣くこともない。ひとつになれば、永遠に離れることなどないのだから。

……ああ、そうか。僕は唐突に理解する。

これが、教会に悪魔と呼ばれた存在か。

教会には、これが理解できなかったのだ。ひとを襲い、ひとを殺し、その魂を喰らうもの。

ただひとを害するものと思われた存在たち。

いいじゃないか、悪魔だって。それがみんなを楽にしてくれるなら。僕らを救わない神さまなんかより、ずっといい。

血まみれの口元を袖で拭う。

先輩。

足元に横たわる亡骸を見下ろしてから、僕の胸の底へ呼びかける。

これからは、もうずっと一緒ですよ。

母さんがすべて導いてくれる。みんな、みんなを、助けてくれる。

みんなで、いっしょに、楽になりましょう。

先輩。

暴れる相手と戦っていた前衛の先輩たちが

こちらに走ってくる。もう一人の後衛の先輩と合わせて三人。さすがに一度には手に余る。

「ごめんなさい、先輩方」

僕は声を張り上げる。今は一人しか救えない。

「安心してください。また来ます。必ず」

僕は晴れやかに笑う。そして踵を返す。走り出す。

身体が軽い。今取り込んだ先輩の魂が僕に力をくれる。

母さん、母さん。やったよ。僕、やったよ！

——いい子、いい子、よくできたね！

風のように走りながら、母さんの声を聞く。頭を撫でてくれるのがわかる。

ああ。

幸せだ。最高に、幸せだ。

僕はやっと、幸せになれたんだ。

これから。はやく、みんなを取り込んで。みんなを楽にして。みんなを解放して。

みんなでいっしょに、自由になるんだ。

西の村の退魔師の、一人の若手がその日消えた。

同行していた後衛の一人は切り裂かれた遺体となり、その心臓はついぞ見つからなかった。

稀ではあるが——このような事例は初めてではない。ひとの精神に干渉する力に長けた悪魔が、退魔を行う側の人間を侵し、取り込んでしまふという。

悪魔はひとより生まれ出ずるもの。時としてそれが伝染し、ひとが悪魔と化すことも、また

ありうる。

退魔師長は消えた彼の討伐を誓ったという。殺された仲間のため、そして何より、消えた彼自身のために。

毒と甘言に溺れた魂に終焉を。然るべき終わりを。

それが、人間をやめた彼らへの一番の弔いになると、退魔師たち皆が、知っている。

かわいいかわいい『私の子』 愛に飢えたま  
ま育った子

求める愛を与えましょう 望むぬくもりを  
あげましょう

たとえまやかしの母であれ たとえ幻の愛  
であれ

霧のごとくに不確かであれ あなたが幸せ  
ならばいい

先に待つものが破滅でも  
たくさん甘えて たくさん溺れて

私のものにおなりなさい 私の手足になり  
なさい

了





## 数式仕掛けの神

小説／アオノレナ  
挿絵／虚狼

「ウナソコ学園都市」は、その日壊滅した。K地方の穏やかで緩やかな地域に建設された、ウナソコ学園研究都市がある。

ウナソコ学園研究都市には、山村の開発、臨海の開発に特化した研究機関や教育施設が配置されている。有事の際には臨時都心化もできる、立派なシェルターもある。

いわば楽園だった。



その楽園が、すべて崩れ落ちた。事件当時、通報を受けた警備隊が向かったところによれば、生存者かつ被疑者は研究主任の渡会純。発見場所は「ウナソコ学園都市研究所」のエントランス。

3Dプリンターで作り上げた骨組みにガラスを巻きつけたような、美術品と喩えられるその場所で、非現実的なオブジェとともに渡会純は発見されたという。人間（おそらく研究所の職員全て）をブロック感覚にうず高く積み上げた山の天辺で、奇声を上げながらキーボードを叩き、言葉を吐いているところだった。また、彼自身は白衣に、歯車やケーブルを飾り立てた

姿だったという。

吐き出した異様な言葉の全てを誌上に記することは叶わないが、人類がろうじて理解できる箇所をかいつまんで載せるとすれば……

「見てくれよコッペリア！　そこにメインメモリがあるだろう！　ざっとニヒクゴオーロク体ほど！　こいつを全部爆破すればいいんだよオコッペリア！」

さらに何かを崇拜するような絶叫もあったのだが、音声を適切に表現する手段が浮かばないのだ。波形の振り切れた轟音に入り混じって微かに聞こえる言葉ですら、世界に存在しない発音で成り立っていた。

コッペリアとは何なのか、何を爆破しようとしたのか。

現場検証を経ても、誰も理解することはできなかった。



オカルト雑誌に載せられた記事を眺めていると、足下に何か落ちていた。手帳だ。証拠品として挙げられた日記だろう。なぜここにあるのか分からないけれど、関心だけはあつた。誰も内容を理解できないはずのそれを、手袋をはめた私はめくってみた。

それは絶句に値するものだった。



某月某日

資料室に、見慣れない題名の本があつた。どの学術書にも見られない著者名だから、きっと新しい発見か何かをした人なのかもしれない。研究所の外に出なくなって、だいぶ経った気がする。名前を記録して、今度調べてみようと思う。

自宅と研究所はかなり近くにある。仕事を始めてから、外の景色を見る機会はほとんどなくなってしまうが、気分転換になるものはいくらでも研究所内にある。白い廊下だけで構成されていたのは昔の話。現代では、階段や壁や天井に、あたたかみのある木が使われている。冷たさの少ない施設だからこそ、自分は外に目を向けなくても良い。情報は、インターネットからいくらでも持って来られる。

それにこの記録という行為も、自分にとって是有用な情報だ。スクラップブック代わりにしてから、忘れ物がずいぶん減った。これからも続けてみようと思う。

音声入力記録メモ一

世の中には、証明されていない数式がありません。えっと、ミレニアム懸賞とか。クルーシユチャ方程式っていうのも、そのひとつですね。研究所の資料室にあつた本のタイトルをなんとか読んで、仮につけたものなんです。ホントにそう呼んでいいのかな、分からない。たぶ

んこれは、世間に知られていない式です。僕はこれからこの式を読み取りたいと思います。今まで学んだどの法則にも当てはまらない。紐解いた瞬間、どうなってしまふのか。何の為にあるのかわからない。不思議な式は、まるで鍵のかけられた、重厚で荘厳に飾られた宝箱のように感じられました。そんな宝箱があったら開けたくありませんか。だからこそ、私は開けることを選びました。

某月某日

タブレットにあった音声入力機能を試してみた。「改行」とか「点」とか、いちいち言わないといけないのが面倒くさいな。「はてな」なんてもつと面倒くさいから、段落分けは入れるのをやめた。友人から聞いたところによれば、音声入力で小説を書く作家がいるらしい。凄い。小さな頃、「地球館」という施設ではキッチンの新・三種の神器として自動食器洗浄機、自動生ごみ処理機、IHクッキングヒーターが展示されていた。

昔のSFだったら夢のようなことが、今はこんなに身近なんだと身に染みる。

音声入力で思い出したクルーシユチャ方程式、明日もう一度資料室で探してみよう。もしかしらたらとくに証明されているかもしれないし。

資料室検索記録 渡会純  
開架書庫 クルーシユチャ方程式  
検索結果 0件

閉架書庫 クルーシユチャ方程式  
検索結果 0件

レファレンス「クルーシユチャ方程式について調べたい」  
該当する資料がありません

買い物メモ  
いつものTシャツ

某月某日

もう誰も解いていないのだろう。だったら自分で解いてみよう。証明ができたら一大ニュースにでもなるんじゃないか。ワクワクする。ところで、誰が発見したんだろう。この証明を作り出したのは誰なんだろう。自分の仕事は数式を見つけること。それが将来の誰かの幸せにつながるらしい。自分が人の幸せを操作するということ。全く実感がわかない。

コーヒーを淹れて座って、思考に耽りながら電卓を出鱈目に叩く。前に求めたはずの式を自然と叩いていた。数字は嘘をつかない。嘘をつくのは人間の記憶とか、数字でないもの全てだ。コーヒーを淹れて飲んで計算して、コーヒーを淹れて飲んで計算する。脳が計算機に変わっていく。

誰が自分の脳を計算しているんだろう。誰が発見して誰が計算して誰が自分の脳に答えを教えてくれるんだろう？

音声入力の記録メモ二

こうして喋っている俺が不思議なんだこの俺が俺じゃなくなったらどうなるかな分からない分かるわけないだろえと黒い月が綺麗です。ね知りたいです。コーヒーはおいしいですか。ミルクいらぬコッペリア

某月某日

数式の仮説検証

試行は四桁を超えた

繰り返すたびに答えが変わる

また変わった……



日記を記した人物が、正気を失っていく過程がありありと目に浮かぶ。事前に調べものをした甲斐があつて、理解はより一層深まる。

研究所という建造物は密室の群れだ。その中で、情報を遮断したまま、未知の情報に溺れ、未知の常識を理解しようとしてしまった渡会。私は、手元の端末で改めて事件当時に放送されたニュースの映像を確認した。

柔和な人間だったであろう彼が、科学を信奉していたであろう彼が、科学や数学を超越した、機械仕掛けの神を信奉し、賞賛する。研究員た

ちがモノのように積み上げられ、渡会に踏み潰されながら幸せそうな顔で何か呟き続ける。

ふと渡会が天井の監視カメラに目をやり、口をかすかに動かす。警察が怒号を挙げる瞬間、画面がノイズまみれになる。

彼は、機械仕掛けの神そのものを信奉していたのではない？　じゃあ、それは、何なのだ？

◆

某月某日

いくら仮説検証しても証明できない。証明できると思った瞬間、数字が逃げ出してしまった。何を言っているのか分からないのは自分も同じ。今まで素直に答えてくれた数字は、手を伸ばしても掴めない何かになってしまった。どうして。

コーヒーを切らした。買わないと。

某月某日

自分を信じられない。

自分の体が信じられない。

自分が自分でなくなるのを感じる。幻聴が聞こえるのだ。クルーシユチャ方程式を発見した日からかもしれない。コーヒーにお酒を入れると幻聴が聞こえなくなることに気づいた。嬉しい。スマホは割れたが問題なく使える。

コーヒーを切らした。買わないと。

某月某日

お酒を切らした。カーダースのものじゃないといけない。シャツが届かない。

証明が来ない。

コーヒーを切らした。買わないと。

某月某日

嘘つきは自分です。

◆

日記の内容が支離滅裂になるにつれて、渡会の字はパソコンで打ったように整っていた。

嫌な予感がして、日記のページを遡る。かつての彼の字は、人間味を帯びた癖字だったはずだ。ページを捲るたびに、少しずつ文字が変わっていた。あまりにも自然に変化していたから気づかなかつたのだ。

渡会は日記の通り、方程式を解こうと躍起になっていた。しかし証明は果たされず、焦り始めた。電卓の計算が、手順を誤らなければ必ず合っているように、手順を誤らなければ解が同じになるように。

その常識が揺さぶられたら、誰だっておかしくなるに決まっている。

私も慌てて端末を取り出し、適当な式を入れる。何度も同じ計算をする。答えは同じだった。私にはまだ常識が残っている。

日記を捲る手が止まらない。

◆

某月某日

自分を信じられないのは当たり前じゃないか。

自分の貌が分からないのだから。自分の常識が侵食される。

眠りながら仕事をしている。眠ると別世界に飛ぶから仕事ができる。そこにはカーダースの酒があつて、永遠に覚めない酔いに浸ることができるのだ。

方程式がもうすぐ証明できる。証明できたら、世界の常識がまるごとひっくり返るに違いない。

某月某日

自分の常識は自分の肉体にしかないのだ。

ひっくり返るのは自分の中の常識。

数字が証明を拒んだ理由も、今なら理解できる。方程式は真理だったのだ。

数字は真理から逃げていたのだ。万物の宇宙の中で、かろうじて私とのパイパスを作らないように、数字自らが狂気に冒されないように逃げたのだ。

もう分かるだろう。

数字は生きているのだ。

数字は僕を嘲笑うのだ。

数字は意思をもって僕を侵す。

僕は数字でできている。

さいごのきおくをここにのこす

◆ 日記の隅に、SDカードが貼り付けられていた。

これを見たら、自分の正気が保つか分らないだろう。

覚悟を決めろ、と私は私に訴えかける。

持ち運んでいたノートパソコンに差し込むmp4のビデオファイルが入っている。再生できる。

カーソルを合わせる。クリックする。

◆

「自分が、自分が証明したという証を残すために、撮影しています」

画質の悪い映像だ。暗い部屋の真ん中に、震える声で言葉を紡ぐ男がいる。おそらく彼が渡会純だろう。

「自分が今信じられるのは自分だけです。だからこの映像も……か、変更されてしまうかもしれない。今信じられるのは、この声だけ。証明を読み上げることで、自分の正気を証明します」

白衣を着た、柔和そうな雰囲気のある男。しかしその表情は追い詰められて、暗いものになっていた。あるいは老けこんだように見える。

「読み上げればいいって教えてもらったんです」

誰にだっけ、と呟く声。

震えた声で、ぼつぼつと読み上げる。私は詳しくないから分からないが、複雑な数式をお経か何かのごとく読み上げているようだ。

そのうち、男の顔に冷や汗が伝い始めた。汗のようにも、涙のようにも見える。何かに急かされながら読み続ける。

そのうち、その声の中に「たすけて」とか「どうしよう」とかおかしな言葉が入り混じってきた。荒れた映像の中で、はっきりとその声だけが聞こえてくる。これが、一体どうなったら狂人になるのだろうか？

俯いた渡会の声が小さくなって、ぼそぼそとしたものになってしまう。

聞こえないな、どうしようか。  
ポリウムを少し上げる。

スピーカーが壊れた。

「見えた！」

目の前が白く飛ぶほどの衝撃に、私が吐いた音が歪んで割れたままかろうじて聞き取れた声は間違いなく渡会純のものだが、どう考えても彼ではなかった。

男が画面に走り寄り、やはり完全に割れた音で喋り出す。

「見てくれよコッペリア！ メインメモリを持ってこい！ 分かるだろうメインメモリ！ その辺を闊歩する蛆虫をつなげるんだ！」

きいんとハウリングしても、構わず喋り続ける渡会……だったもの。

「世界が滅びる日が来た」

見ればその白衣の中はぐちゃぐちゃと蠢き、やがて黒くつやつやとした服の形を成した。着物と言われればそう、神父と言われても納得できる。襟元はそのどちらでもなく、要するに、奇妙な形をしていた。

襟や髪は動く歯車で固められている。渡会の目がせわしなく左右に振れ動く。

そして。

ノイズ混じりの音の中でもはっきりと。

かち、かち、かち。

歯車の回る音が聞こえる。

「ちく」

男が一步。

「たく」

顔をカメラに近づけてくる。

「ちく」

その貌がずるりと剥がれると、

「たく」

それは歯車の塊だった。

「ちーん！」

哄笑。

◆

ビデオは止まったはずだ。

しかしシュークバーはまだ右へ右へと進もうとしている。まるで画面の壁を破ろうとするか

のように、戻っては進む。戻っては進む。

パッとシークバーが消えた。

「数字は正しいものだ」

私の耳元で、笑いながら囁く声。

「だって数字は生きているからね」

「人類は数字を制御していたわけではないんだ。数字が人類を制御していたんだ。だってそのほうが、楽しいだろ？」

手に握りしめていた端末の数字がめっちゃくちゃに変わる。背中に吐息がかかる。頭が歯車の塊になった渡会が、ビデオの数字を踏み越えてそこにいる。ぐちゃぐちゃと人間を踏みしめてそこに立っている。

「君も、方程式の秘密が気になるだろう。だってほら、君の数字がこんなにも楽しそうにしている」

その甘言に乗ってはならない。

「数字は神だ。微睡む神の夢そのものだ。神には貌がないんだよ。だからほら、数字の声を聞いてごらん」

方程式は真理なのだ、世界が断言する。

片足が動く。地の常識から逃れようと動く。私の頭は未知の常識にもっていかれそうになっている。

私は。

私は……

「未知が見たくてたまらないんだ」  
肉体から解放された世界が見たかっただけ。



「ウナソコ学園研究都市」は、その日壊した。

それは肉体の滅びという点での話。実際は街のそこかしこに、彼らは間違いなく生きている。歯車の塊の一つ一つこそ、彼らだ。彼らは肉体に固執する人間を見つけては、解体して歯車に変えてしまう。それが、無貌の神の気まぐれな願いだから。

……私が人間に見えるって？

人間に見えるというのか、この私が？

イヤ失礼、これはとても笑えることだ。

私が「私」である保証などない。「私」はどこにでもいて、どこにもいない。渡会純も、私も、一つの「数字」でしかないのだから。

その証拠に、顔を見せよう。顔の端はめくれるようになっていく。聞こえてくるだろう。歯車の音が。あの渡会と同じ、歯車。目。泥。限りなく同一の私のどこが「私個人」たらしめるんだ？

進化することのどこが卑しい？ 脳を線で

繋ぎ、拡大思考することの何が卑しい？ むしろ喜ぶべきでは？ 機械に頼る人間なら、数字に頼る人間なら、宇宙的恐怖から逃げるなら、理解できないわけがない。改造は苦痛からの解放だ。是非ともご友人に勧めてあげてくれ。

準備はできたよ、渡会純。じきに向かう。

分かったならこちらへ。  
ようこそ。

クルーシユチャ方程式。

世界の数学者を虜にする方程式。

解と引き換えに、魂は真理に焼き尽くされ、恍惚の中で無貌の神がその身を侵す。冒険的な方程式。



## 家畜

A

クママの正体は犯罪や虐待などの被害者の衣服に沁み込んだ怨念から生まれた悪霊の集合体。

多感で純粋、操りやすい精神状態の少女に可愛がられやすいぬいぐるみの姿に変化して憑りついた、という話です。

Twitter→miqua666

## 神定選

A

前回は変身ヒロインだったので今回はSFチックなエージェントです。

積年の目標だった留学が年明けから始まるのでなんとか国内にいるうちに実績を作れてよかったです。

しばらくリアルの方の研究にリソースを多く割きますが悪堕ちへの愛と誠意は忘れずに博士号取得まで突っ走ります。

Tw: @KhanJoCen

## きりう

A

悪堕ち合同企画第二弾！おめでとうございます！

前回に引き続き参加させていただきました、きりうと申します。

悪の魅力、悪の引力、楽しんで頂ければ幸いです。

Twitter : @kiryu\_takase

## 葛葉ぽて

A

描いてる間に感じた悪堕ちの隠れた魅力！悪堕ち絵を描かれている方って、みんな優しい方ばかりなんですよ…！

Tw:@kuzunoha\_pote  
PIXIV:2567103

## ぐっちー

A

B

初参加です！遊戯王OCG悪堕ち合同誌作ったのでこちらにも参加しました！オリジナルキャラ描くのもモノクロイラストやるのも初めてなのでかなり苦労しましたが良い悪堕ちが描けたと思っています！！楽しんでいただけたら嬉しいです！

## クリファハート

A

悪堕ち合同誌2を称えよ。

悪堕ち幼女同士の姉妹百合っていいですよ。今回はそんな感じの話です。

悪堕ち合同誌2はなんと2バージョンで発売。通信ケーブルを使ってヒロインを交換して悪堕ち図鑑を完成させよう。

# あとがき

A 全年齢向けに参加

B 成人向けに参加

## アオノレナ&虚狼

A

2回目の合同誌おめでとうございます。敵対する概念にマイクロチップ入れられコントロールされる…これは悪堕ちですね。敵対者の規模が宇宙的だったら…これは人類滅亡必至のコズミックホラーですね。 そんな感じでした。久しぶりの悪ノリに答えてくださった虚狼さんにも多謝。

Twitter @gkgkblu

アオノレナさんの小説挿絵で参加させていただきました。

度々挿絵で描かせていただいているのですが、創作の方は今回が初めてだったり

悪堕ちを上手く表現出来ているだろうか？というのと、最近クリスタで手探りな事やったり含めてドキドキします。

そしてもっと脳内イメージを落とし込めるようになりたい。

機会と時間が出来たら悪堕ちでまた何かしら自由に描きたいと思いつつ。

今回も声かけていただきありがとうございました。

## 糸野キオ

A

悪堕ち合同誌2発行おめでとうございます。糸野キオです。

創作の世界観をぱっと伝えつつ豊かな悪堕ちを表現する難しさに頭を悩ませました。堕ちゆく姿から匂い立つ色気を、少しでも伝えられていればと願うばかりです。

広がれ、悪堕ち愛好の輪。糸野キオ (@kio\_sag)

## 桜勝優也

A

普段はpixivで主に催眠術をテーマに書いていますが、他人の精神を捻じ曲げるのが大好きな人なので今回参加させていただき、自分なりに突き詰めました。楽しかったです。皆様も楽しんでいただけたなら幸いです。

## かじた

A

このたびは悪堕ち合同2発行おめでとうございます。学生時代の培養作業中のうわついた妄想が、こういう場面で生きるのか！と思いましたが（笑）素敵なアンソロに参加させていただき、誠にありがとうございました！

## 花草セレ

A

第一回に引き続き、素敵な企画に参加させていただけることを御礼申し上げます。悪の定義が一つではないことこそ、悪堕ちの最大の魅力だと信じて今回のお話を書きました。魅惑ある悪堕ち世界を、ささやかながら広げることには貢献できていれば幸いです。

## 春咲ちぼ太

A

前回に引き続き参戦しました！  
今回描かせて頂いたキャラ達には実はさらなる展開を考えております！  
そちらもお楽しみにどうぞ！！

## 日高久志

A

「四方学園フォーリングダウン」を書いてます、日高久志です。  
今まで洗脳快樂堕ちがメインで明確に悪堕ちを書いてないなあと思い立って、今回挑戦してみました！  
お楽しみ頂けましたでしょうか？

## プルタブ

A

今回もやっぱり生体ユニットでした。  
テカテカ光沢描くの楽しいです。

## mio

A B

お久しぶりです、mioです。今回はウチの子から三人、戦隊風ヒロインを登場させました。三人目の戦士が誕生する回で变身することなくバッドエンドを迎えたら…というアイデアでしたが、どうだったでしょうか？  
トライエレメンツの活躍をもっと見たい方はぜひわたくしのpixiv小説をご覧ください。

## LeeBigTree

A

初めまして、LeeBigTreeです。今回はなんか「おお、遂に同人誌として出せた！」って感じです。  
元々2ページで終わる予定でしたけど、やはり何か設定も書きたかったです。  
これからもよろしく願います。

## このざま

A

悪堕ちが好きです、そしてTSF（女体化）が好きです、なのでその二つを混ぜに混ぜて作ったのです。世界に広げられTS悪堕ちの輪！

## 人船

A

こんにちは、人船と申します。  
普段は洗脳・NTR系の悪堕ちを好んで摂取・生産をしているのですが、突のところ純愛も好みであり、折角の機会なのでそちらの趣味を前面に押しつけて執筆させていただきました。  
ストーリーを考える上で大事にしたものは、大切な人が悪に染まってしまうことで自分にとって平和の象徴だった存在が脅威と化してしまうシーンです。  
これを書きたいがために勇者と聖女のいちやつきを書き、後半で引き裂いてからくっつけました。  
オチは最初から決めていたのですが、中盤～終盤の展開が中々固まり切らず苦労しました。  
苦労した所も含め、とても楽しかったです。ありがとうございました。

## つー

A B

すいませんド底辺作者「つー」です。当初は光と闇をテーマにして考えたのですが、文字数足りないじゃね？と思ったので悪堕ちだけに絞らせていただきました。まあ、PIXIVにキャラデザやボツとしたもう片方の話も載せようかなと思います。あ、そうそう。今回成年向けにも参加してますのでそちらもヨロシク。

## 投職

A B

前回から引き続き参戦の投職です！  
今回は前回でやりきれなかった連鎖悪堕ち融合を描ききれました～  
ヤマリットである【私たち】は救いようのない幸せを感じたんだろうな  
そう考えるとワクワクしちゃいますね♪

## なまはぐれ

A B

狐耳のじゃロリ娘が恋愛した後悪堕ち寝取られして  
触手召喚して気に入らない奴を餌にしたりする展開。  
楽しんでいただければ幸いです。

## 波多野奈津目

A B

波多野奈津目といます。  
悪堕ちの目覚めはお約束の聖剣伝説3——のデュランでした。  
光に行くとヒーラーで聖騎士、闇に行くと戦闘狂というものに何だかドキドキしたものです。  
黒耀の騎士と紅蓮の魔導師と洗脳理の女王も良いですね。  
ということで野郎の悪堕ち、趣味でロボット物です。  
ヒーロー戦記もヨロシク、ってこれはまずかったかなあ。

本誌を手にとりいただき、誠にありがとうございます。  
悪墮研究機構代表の緋風より御礼申し上げます。  
初めての方も、以前より御虫貞の方も、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

2021年5月に企画しました悪墮ち合同における悪墮ち合同誌「悪墮ちファンブック」は皆様の御協力もあり冊子版・電子書籍版ともに大成功を収めました。  
そして、前回の企画を見て初めて「悪墮研究機構が合同誌を主催している」と知った方も多く、機を逃さないようにと前回から日を置かない実施となりましたが、今回も多くの方に参加いただき、無事このような形で合同誌を作成することができました。

今回の悪墮ち合同企画では、全年齢向け冊子と成人向け冊子の2冊を作成することになり、本誌は全年齢向けとなります。  
本誌の参加者は24名で、企画全体としては私を含め総勢36名が参加する企画となりました。  
※両冊子に参加されている方がいらっしゃるため総数は単純合算ではございません

今回は春咲ちぼ太様に素敵な表紙イラストを描いていただきました。  
依頼を快く引き受けていただいた春咲ちぼ太様に厚く御礼を申し上げます。

全年齢向け冊子(2A)と成人向け冊子(2B)の表紙は2冊でセットとなるような構成となっております。  
実は現在、春咲ちぼ太様と共同で変身ヒロイン企画を進行中であり、本来であれば漫画形式で本誌に掲載予定でしたが、春咲ちぼ太様と調整していく中で「もっと充実した作品にしよう」となりまして、本誌には2ページのイメージイラストを掲載し、そのスピンオフという形で別途漫画作品を作成する流れになりました。  
本誌の表紙の題材となっているのがその企画のキャラクターたちであり、表紙の右がアプリコットという名前で、左がスカーレットという敵女幹部です。  
ちなみに成人向け冊子でも同じことを説明しているのですが、表紙と裏表紙はこの変身ヒロイン企画の本編とは全く無関係の展開です。  
本編のイメージイラストである本文中の2枚のイラストを見て、どんな展開になるか想像されながら、変身ヒロイン企画をお楽しみにお待ちしております。

また、今回はきりう様にも私から作品をお願いしました。  
こちらは拙作「ヴァンパイア姉妹」に出てくる姉シエラと妹エリスが題材で、既に吸血鬼と化していたエリスを討伐しようとしたシエラが逆に彼女に取り込まれてしまう……という本編とは違うIFの展開です。  
今回も魅力的な作品を描いていただいたきりう様にも厚く御礼を申し上げます。

最後になりますが、次回もまた、皆様に楽しんでいただけるような企画を提供できればと思っております。  
それでは、次の企画で再び皆様にお会いできることを心待ちにしております。

悪墮研究機構 代表 緋風

## 悪墮研究機構悪墮ち合同2 悪墮ち合同誌『悪墮ちファンブック2A』 (電子版)

発行日 2021年12月31日(冊子版)  
2022年8月15日(電子版)

発行者 悪墮研究機構  
編集者 緋風(悪墮研究機構)

悪墮研究機構  
代表 緋風  
メール [akuochiorg@gmail.com](mailto:akuochiorg@gmail.com)  
Twitter @utakuochi  
公式サイト [akuochi.com](http://akuochi.com)

本誌の無断での転載・複製を禁じます。  
御連絡はメールアドレス宛にお願いします。





参加者一覧 (敬称略)

アオノレナ	人船
糸野キオ	つー
桜勝優也	投職
かじた	なまはぐれ
家畜	波多野奈津目
神定選	花草セレ
きりう	春咲ちほ太
葛葉ぽて	日高久志
ぐっちー	フルタブ
クリファハート	mio
このさま	LeeBigTree
虚狼	緋風